HUIS.
Journal

ハウスジャーナル
2021.4

HUIS. Journal



「日常」をつくる長い旅

HUIS. Journal

HUIS webサイト（https://1-huis.com）ブログ記事より

シャトル織機で織る 唯一無二の生地 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

27kmの糸 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

HUIS インスタライブと【産地応援キャンペーン】を開催 ・・・・・・・・・・ 7

世界的にも希少な生地「シャトルコーデュロイ」・・・・・・・・・・・・・・・ 8

大変人気の生地となっていたウール 100%の素材「ウォッシャブルウール」・・ 9

2 つの大切なお知らせについて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

HUIS の価格の秘密について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

HUIS の生地のこと ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

【太番手・超高密度】の特別な生地・バフクロス ・・・・・・・・・・・・・・ 16

2020年も、いよいよあとわずかとなりました。 ・・・・・・・・・・・・・・ 17

100 年の歴史が育む 世界に誇るカットソー生地産地・和歌山 ・・・・・・・・ 18

0.00001% 世界最高品質の綿「SUVIN COTTON（スヴィンコットン）」・・・ 20

衣服における「MADE in JAPAN」の誤解と日本の生地産地のこと ・・・・ 22

“しっかり感・ハリ感”と、“しなやかさ・柔らかさ”の相反する感触が共存する生地 ・・・ 24

HUIS パートナースタッフの門出 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

経通し職人・府川さんのこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

着る人の五感に幸せをはこぶ、極上の風合い・・・・・・・・・・・・・・・・ 30



2018-06-07

シャトル織機で織る 唯一無二の生地



世界的にも希少な「シャトル織機」

先日の名古屋高島屋さんでの催事「NUNOフェスティバル」は、布をテーマにしたものだったこともあり、興味を持ってご来場いただいた方々も多く、HUISにとってはこれまで以上にたくさんのお客さまにお届けすることのできた6日間となりました。
そんなお客さまと日々お話させていただく中で感じたこともたくさんあり、雑多な内容になってしまいますが、感じたことを今回は少し書き留めて見たいと思います。

HUISは、高級シャツ生地の産地として知られる「遠州織物」を使っていますが、その中でも旧式の「シャトル織機」で生地を織る、遠州のある機屋さんの生地を使わせていただいています。
シャトル織機は低速で織ることから、極めて細い糸を超高密度で織ることができます。多くの糸量を使うことから耐久性が高く、また、驚くほど柔らかく上質な質感が生まれます。通常は、こんなにも細く、こんなにも高密度に織られた生地を、目にすること、手にすることはほとんどありません。それは、「シャトル織機」によってシャツ生地を織る機織り工場は、世界でもほとんどないからです。今ではもう製造されていない、価値ある旧式の「シャトル織機」だからこそ生まれる、様々な機能性と心地よさを持った特別な生地なのです。
一方で、低速のシャトル織機での生地生産は、最新の近代織機と比較して20～30倍もの時間がかかると言われています。○○倍という表現では、少しイメージしづらいものですが、つまり、通常は1日で織る生地を、1ヶ月近くもかけて織っている。ということです。それだけの途方もない時間をかけることで初めて生まれる、特別な生地なのです。
ただ、生地生産にそれだけの時間がかかっているということは、需給バランスで成る経済社会の中で、それだけの付加価値がついて流通されているということです。ごくごく単純な計算で考えれば、20倍から30倍の付加価値。この機屋さんが生み出す生地、その耐久性・機能性と心地よさには、繊維業界の中でそれだけの価値が認められています。世界的にも希少な「シャトル織機」で織られた生地に、世界中の高級ブランドが自然と行き着くのには、こうした理由があるのです。
HUISは、遠州という地域の中で生地を直接仕入れることができることで、こうした世界的な最高級の生地を使わせていただきながらも、手の届きやすい価格帯に留め、日常着として使ってもらえること、産地や生地背景を感じてもらえることをコンセプトしています。名古屋での6日間は、こうした品質と私たちの想いを理解していただくことのできた、大切な6日間となりました。









この機屋さんのすごさは、織機が近代化し技術革新が行われていく時代の中で、旧式のシャトル織機を使い、さらには改良をし続けて来たことにあります。
何倍も、何十倍も早く織ることのできる織機が開発され、他社が設備を入れ替えていく。他方、積み重ねられた技術を受け継いできた遠州の職人さんは、効率化の一方で失われてしまう大切なもの＝風合いや耐久性といった価値に重きを置いて、実直にこれまでどおりの生地を織り続けてきました。むしろ、その価値をさらに高めるため、独自にシャトル織機をカスタマイズし、より細い糸を、より高密度で織れるよう改良をし続けてきました。
高速で、低密度に、効率よく織るのが繊維業界における“技術の革新”です。まさに時代と逆行する道を突き進むことで、世界でもここでしか織ることのできない、唯一無二の生地を作り続けてきたのです。

髙島屋さんでお話しさせていただいたたくさんの方々から、こんなお話をよく聞かせていただきました。昔の服は生地が良く、おじいさんおばあさんの服は洗っても洗っても何年も何十年も、一生着られる服だった。その頃の生地と、すごくよく似た風合いだと。HUIS の扱わせていただいている生地は、まさにその生地です。たっぷりの糸を、ゆっくりじっくりと高密度に織り上げ、“丈夫”で“最高に心地の良い”生地。洗いをかけることで、一層風合いを増し、ずっと長く着続けられる服。まだそんな大切な生地が、この日本で織られています。
担い手が高齢化し、技術が次々と絶えてしまう時代の中で、次世代に残さなければならない、大切な価値だと私たちは思っています。シャトル織機の様子は、掲載いたしました HUIS のプロモーション MV でご紹介していますのでぜひご覧ください。

https://www.youtube.com/watch?v=nWoDR_8QsQI&feature=youtu.be

2019-07-12

27kmの糸





「ゆるふわコットンスカート」には約40kmもの糸が織り込まれている

超極細糸のゆるふわコットン

HUISの春夏アイテムの中でも毎シーズン好評いただいている「ゆるふわコットン」。こちらの生地は、100番手という超極細糸が高密度で織られた生地です。

イベントなどでは、この 100番手の糸の実物をご覧いただいていますが、まるで蜘蛛の糸のような細さに驚いていただくことが多いです。通常、これだけ細い糸を織った生地は透き通るような透け感が生まれます。一方、HUISの「ゆるふわコットン」は、透け感ができるだけ少なくなるよう、限界まで密度を高めて織っています。
超極細糸をそれだけの密度で織りあげる。そのためには、一般的な生地では考えられないほどの長い時間と、糸の長さが必要になります。いったいどれほどの長さの糸が使われているのか？

HUISのブラウス一着には、約“27km”の100番手の糸が織り込まれています。
“27m”ならわかりやすいのですが、“27km”というと少しイメージがしづらいですよね。27kmの距離は、ちょうど東京ドームを３周半、東京駅から横浜駅までの距離に相当するそうです。これだけ途方もない長さの糸がブラウス一着に織り込まれた、特別な生地なのです。

旧式のシャトル織機でゆっくりと織るからこそ実現できる、唯一無二の生地。
「ゆるふわコットン」を使った HUISのアイテムは、これから気温の上がる夏シーズンにぴったりです。
ぜひオンラインストアでご覧になってみてください。

2020-04-10

HUIS インスタライブと【産地応援キャンペーン】を開催

コロナ禍における【産地応援キャンペーン】

4/11（土）浜松ショールームからお送りする【インスタライブ】は、春夏の新商品をご紹介していきたいと思います。今回初の試みとなる HUISのインスタライブですが、今回はフォトグラファーで HUISの着用モデルとしても協力いただいているmonchouchouのたないりほさんと一緒に、新作商品を着用しながらたくさんご紹介していきたいと思います。



ここからは、少し深刻なお話しをさせてください。ご存知のように、新型コロナの影響で現在、国内にも大変な状況が広がっています。そして、アパレル業界においても、まさに未曾有の大事態が到来しています。外出規制の中で売り場のほとんどが通常のように動かず、また生産体制も大きな混乱の中にあります。遠州織物を基に、地域発・産地発のブランドして活動してきました HUISにとっても、こうした状況はまったく変わりありません。
今春出展を予定しておりました、4月以降20箇所以上のイベントが現在ひとつひとつ中止となっています。また、都内を中心に取扱店さんも多くが営業を停止されており、このまま続いた場合、秋以降 HUISの事業継続も危ぶまれる状況にきています。
今、感染拡大が広がり、外出の自粛が必要となる中で、ご自宅で過ごされることが多くなっていると思います。この先も、この状況はまだしばらく続くでしょう。
どうしても、気持ちが暗くなったり、塞ぎ込みがちになってしまう状況だと思います。でも、そんな暮らしの中で、少しでも気持ちを明るくできるもの、ワクワクと楽しい気持ちをもたらしてくれる“服”の存在は、とても大きいものだと思います。こうした状況を踏まえ、今回のインスタライブでは、【ステイホーム＆産地応援キャンペーン！】を企画させていただくことにしました。
自宅で過ごすご家族、あるいは連絡をとりあっているお友達などと一緒に、HUISの生地の風合いをたっぷりと味わってもらえれば嬉しいです。

また、アパレル業界が未曾有の不況に巻き込まれる中で、遠州産地を支えて来た機織り工場さんたちにも、今後大きな影響が生まれてくると思います。
私たちは、“服”のこと、“服づくり”のことが大好きです。そして、遠州織物の歴史と技術を知り、その柔らかな肌触り、特別な風合い、心地よさに惹かれて HUISをスタートしました。
HUISというブランドを立ち上げることができた私たちにとって恩人と言えるのは、積み重ねられた技術で昔ながらのこうした生地を作り続けてこられた遠州の機織り職人さんたちです。
私たち自身もこの先のことはまだわかりませんが、少しでも恩返しできればという想いから、今回のキャンペーンの売上の一部を、遠州産地へ寄付させていただきます。
国内に産地と言われるところは多くありますが、遠州においても今後、存続に向けて大きな転機が到来すると思います。
微々たる力かもしれませんが、こうした状況の中で、HUISに関わっていただけているみなさんとともに、未来につながることへ取り組んでいければと思っています。

インスタライブ の配信は、11:00～と 14:00～の２部制でお送りさせていただきます。
なにぶん初のインスタライブですので、なにかとうまくいかないこともあるかと思いますが、ぜひ温かい目で見守っていただけると嬉しいです。
オンラインストアに掲載できていないアイテムもたくさん入荷していますが、インスタライブの配信までには一通りのご注文ができるよう準備させていただきます。ぜひ、楽しみにお待ちくださいね。







2020-09-04

世界的にも希少な生地「シャトルコーデュロイ」

国内唯一のコーデュロイ産地、遠州

20AWの目玉、新たな生地の「シャトルコーデュロイ」のアイテムがいよいよ展開スタートとなりました。
平織りでも希少となっている旧式の「シャトル織機」で織られた生地ですが、コーデュロイ生地については特に貴重なものです。

あらためて、ご紹介させていただきますね。
現在、アパレル業界において流通するコーデュロイ生地は、そのほとんどが中国において高速織機により効率的に織られた生地です。
そうした中、日本国内で唯一のコーデュロイ産地である「遠州」において昔ながらの織機で織られた生地は、一般的なコーデュロイ生地とは一線を画す品質の生地として、世界的に評価されています。国内シェアの実に 95%以上が織られている遠州のコーデュロイ生地は、非効率な織機を使ってゆっくりと織られ、職人の技術が詰まった高品質な生地として海外の高級ブランドの生地として数多く使われています。綿（コットン）素材の中で、唯一、素材そのものに保温性を持つのがコーデュロイ素材です。

ウールやカシミアなど、動物性の繊維はもともと身体をあたためるために発達した素材で、素材そのものに保温性があります。
一方、植物由来のコットン生地は、吸水性を持つなど春夏に適した素材と言われます。そのため、綿織物の産地である遠州は、春夏生地がメインの産地でもあります。
そのコットンを元に、秋冬向けの素材として開発されたのがコーデュロイ生地です。
生地表面に畝（うね）を作り、その畝が熱を溜め込んでくれるため、綿の肌触りの気持ちよさと、暖かさを同時に味わうことができます。遠州産地が、一年を通してシーズンに適した素材を提供し続けられる理由です。

ただ、コーデュロイ生地は生地表面にループを作って織る専門的な織り方であり、さらに織り上げた後「カッチング」と言われるループひとつひとつを切断する工程を必要とします。この「カッチング」にも熟練した職人の技術が必要となるため、コーデュロイ生地の産地を維持するためには、大変な苦労があります。
アパレルにおける最高品質の「綿織物」を扱ってきた遠州には、今なお高い技術が受け継がれてきています。遠州が国内唯一のコーデュロイ産地となっているのには、こうした大きな理由があるのです。
その遠州の中でも、最も古い織機である「シャトル織機」を使って織る機織り工場は1件のみしか残されていません。世界的にも、特に希少な生地です。では「シャトルコーデュロイ」によって織られる生地は、どんなコーデュロイなのか？

まず、シャトル織機はタテ糸を大きく開口させてシャトルを運ぶため、表面に立体感のある豊かな風合いが生まれます。温かみのある風合いは、コーデュロイの素材感を一層引き立ててくれます。
また、ゆっくりと時間をかけて織ることで、超高密度で織り上げることができます。時間と糸量を贅沢に使ったシャトルコーデュロイは、高い耐久性を持ち、コーデュロイの欠点である「抜け」や「はげ」が起こりにくく、美しい毛並みが保たれます。
堅牢性がありながらも、しなやか・やわらかで、履き心地も一味違います。
HUISでは、その一件の機織り工場で直接仕入れることができることから、特別な価格で展開をすることができます。
世界的にも希少な、至高の「シャトルコーデュロイ」をぜひ味わってみてください。

2020-10-08

大変人気の生地となっていたウール 100%の素材「ウォッシャブルウール」



他に代えることのできない最高級ウール

HUISの中でも、大変人気の生地となっていたウール 100%の素材「ウォッシャブルウール」。
先日もお伝えしておりましたが、大変残念なことについ先月、糸を供給していただいていた紡績会社さんが事業継続を断念されました。
こちらの原料になっていた糸は、世界的なウール産地として知られている愛知県一宮市の「尾州産地」で作られていた糸で、産地の中でも随一の高品質な梳毛ウール糸を生み出している会社さんでした。

日本国内のアパレル向け繊維産地と言われるところは今ではわずかとなってしまっていますが、今もなお作られているものはどれも、海外で作られる大量生産型の生地とは一線を画す、高品質な生地ばかりです。
ですが、今春から続くコロナウイルスは現在も、業界に抗い難いほどの大きな影響を与えています。一着の衣服になるためには、糸を作る紡績、糸を織る機織り、そしてデザインを形にする縫製、その他様々な工程があり、そのひとつひとつの作業に多くの方が関わってくれています。

HUISでは、いずれの工程も国内で行なっています。身近にあるからこそ、苦しい状況をお聞きする機会があります。
産地の機織り工場や縫製工場においても、今秋、同じように廃業を決められた業者さんがおられます。HUISは大きな規模の経営体ではありません。ですから大きな力はありませんが、生産現場に携わる方からご愛用いただけているお客さま、そうした身の回りで関わっていただける方に少しでも恩返しできるよう、そんな想いで今後も活動を続けていきたいと思っています。





こちらのウォッシャブルウールの糸については、現状でできる一定量を確保できるよう動いているところですが、今後継続的な生産が難しくなってしまいました。残念ではありますが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

2020-11-18

２つの大切なお知らせについて





産地が迎えている現状

11月も後半に差し掛かり、今シーズンのリリースやイベント出展などもいよいよ大詰めとなってきました。今年も本当に多くのお客さまに HUISの服をご愛用いただけていることに感謝の気持ちでいっぱいです。
今日は、今後について２つの大切なお知らせがあり、投稿させていただきました。

まず、一つ目は今後生産ができなくなってしまった「ウォッシャブルウール」についてです。
今年も秋冬アイテムの人気の中心になっているこちらのウール生地ですが、お知らせしておりましたように、コロナ禍の影響によって糸を供給していただいていた紡績会社さんが廃業され、今後生産できない生地となってしまいました。
ただ、その知らせを受け機屋さんがすぐに調整に取り掛かってくれていたことから、最後に残っていた糸在庫をある程度確保していただくことができました。まだはっきりとはしませんが、来期のアイテム展開はおそらく可能な数量だと思います。今後の継続的な生産ができるわけではないのですが、大変な状況の中で調整に取り組んでくれた機屋さんのおかげで、もう少しだけこの生地を使うことができそうです。

もう一つは、来期からの価格についてです。
これまでもお伝えしておりましたように、今年春から続く新型コロナの感染拡大は、アパレルの販売現場だけでなく、紡績・機織り・縫製など、生産現場にも本当に大きな影響を与え続けています。
こうしたことを受け、今月、生産現場におけるすべての生地について大幅な値上げが発表されました。
これまでも天然素材の原料の価格上昇から毎年少しずつ生地値は上がってきてしまっていましたが、今回の価格改定幅はこれまでとは異なるものです。
様々な関連業者さんの縮小により、資材・原料の手配、業者さん間での生産工程がこれまでのようにいかなくなっていること、また、旧式のシャトル織機を使っていることから、メンテナンスにかかる負担の影響もより大きくのしかかります。これを受けて、来期以降の HUISのアイテムについても、価格の改定が避けられない状況となってしまいました。HUISは、世界的な生地産地である“遠州”で生地を直接仕入れられることから、最高品質の生地を使いながらも価格を抑えられることが、他にはない強みです。ご愛用いただけているお客さまにも、そうした価値が HUISの大きな魅力になっていると感じています。そのため、できる限り価格の上昇幅を抑えらえるよう努力したいと考えています。ただ、固定の常設店舗やスタッフを持たないなど経費の圧縮に努め、生地品質に特化してきた HUISにとって、生産原価の大幅な価格上昇が及ぼす影響は少なくありません。来期以降の価格改定は避けられない状況となってしまいましたことを、恐れ入りますが、ご理解いただければと思います。

生地産地で直接仕入れられることから価格を抑えられるという強みは、今後も変わりません。今後いっそう貴重になるであろう「シャトル織機」による生地を、HUISではこの先も使い続けていきたいと考えています。それが、産地である遠州織物のかけがえのない技術の維持と、発展につながることだと思っています。
これまで以上に工夫できることを考え、産地発ブランドとしての事業展開を通してより良い価値を提供していけるよう、取り組んでいきたいと思います。



2020-11-20

HUISの価格の秘密について

先日、生地価格の上昇による来期以降の価格改定のお知らせをさせていただきましたが、さまざまな反響をいただきました。私たちとしては、来期もできるだけ上昇幅を抑えられるよう、がんばっていくつもりです。また、この話題に関連して「HUISの特別な価格」について気づきのあった方もおられたそうで、あらためてご説明させていただければと思い、今日の投稿をさせていただきました。

HUISでは、世界的な生地産地である“遠州”の産地発ブランドとして、生地を直接仕入れられることから、最高品質の生地を使いながらも価格を抑えられることが、他にはない強みであることをこれまでもご説明させていただいてきました。
繊維やアパレルの業界に精通した方ほど、「この品質の生地を使いながらなぜこうした価格で商品展開をできているのか」ということを疑問に思われて、売り場などでご質問を受けることが多くあります。HUISでは、生地を直接仕入れられる、ということを含めて、既存のアパレルブランドさんよりも低価格で展開をすることができる 4つの大きな理由があります。
順にご説明させていただきますね。









1. 生地産地における生地の直接仕入れ
HUISでは産地内における機織り現場において生地の企画から行うほか、機屋さんからの生地の直接仕入れを行なっています。通常は、複数の仲介業者さんを経て商社や生地メーカー等から既成の生地仕入れを行うことが一般的である中、こうした形態にこだわることで流通における中間コストを大きく削減することができます。

2. 固定費を徹底的に排除したブランド展開
一般的なアパレルブランドでは、自社の店舗を設けて各地域での展開を広げていきます。そのため店舗家賃や施設の固定費のほか、常駐する販売スタッフさんの人件費などが避けられないコストになります。
これに対して、HUISではオンラインストアでの直接販売を中心としています。また、実物をご覧になりたいお客さまのためには、百貨店や取扱店さまなどご協力いただける様々な地域で期間限定のイベント出展を行うという形で、売り場を補完しています。また、東京・豊橋・福岡にある HUISショールームは、HUISの取り組みに共感いただいているパートナーショップさんからスペースを提供いただいているもので、販売も含めてご協力をいただいています。これらは関わっていただけるさまざまなショップさん・百貨店さんのご協力のおかげです。こうしたことから一般的な店舗の展開と比較して、大きくコストを削減することができます。

3. 消化率100%のブランド運営
現在のアパレル業界全体における「消化率」は 47%と言われています。
「消化率」とは、生産された製品全体のうち、実際に売れたものの割合を示すもので、シーズンオフのバーゲンやセールなどを含めて、最終的に売れたものにあたります。つまり、作った洋服のうち半分以下しかお客さまのもとに届かず、半分以上は売れ残ってしまっている、ということなのです。これらの売れ残った服はシーズン後に、焼却・廃棄処分されることになります。まさに大量生産・大量廃棄の時代にあり、この 47%衝撃的な数字だと思います。また、半分以上は売れずに廃棄する、という前提で作られる服は、原価に対して単純に２倍の価格をつけなければブランドの経営は難しい、ということでもあります。
HUISでは洋服を大切にしてくださるお客さまのおかげで、毎シーズン制作するすべての洋服を売り切る消化率 100%の経営を続けています。その結果、一般的なブランド運営と比較して、安価な価格設定が可能となるのです。

4. クリエイティブツールの自主制作による広告費の削減
一般的なアパレルブランドでは、カタログやパンフレットなどのクリエイティブツールをデザインの専門業者さんに委託外注をすることで、ブランドイメージの構築や情報発信を行います。こうしたブランドの核となる部分を生み出すツールは数多く、広告宣伝費には大きな費用が必要となります。一方、HUISではシーズンごとのカタログ・パンフレット・DMの制作から、撮影・着用モデルなどすべてを自主制作によって行うことで、費用負担を大きく削減することができます。

以上のような大きく４つの工夫を続けることで、HUISでは「製品原価」以外のコストを削減することができ、生地品質に特化しながらも安価な価格ブランド展開が可能となっています。こうした展開が続けられるのは、アパレルブランドの中では珍しい「産地発ブランド」だからこそでもあります。









2020-12-17

HUIS の生地のこと



組織構造の視点から見るシャトル織機

今年もいよいよ、年末を迎えようとしています。今シーズンも本当にたくさんのお客さまに、いろいろなお店やイベントへ足をお運びいただくことができました。
イベント会場などでは、HUISの生地や商品についてご説明させていただくのですが、同時にご愛用いただいているみなさまからお声をいただける機会でもあります。
また、今年はインスタライブなどを通して、オンラインストアでお買い求めいただくお客さまも非常に増えた一年でした。

オンラインストアではレビューをしていただけているアイテムも多くありますので、ぜひ参考にしていただければと思います。
お話させていただくお客さまからはさまざまな声をいただきますが、その多くは以下のようなご感想です。

・他にはないやわらかな肌触りを気に入っている
・とにかく軽く、着ている感覚がないほど
・肌あたりは軽いが暖かく、一年を通して快適に着られる
・他の服と比べて一日着ていた時の疲れ方が違う
・自然なシワ感で雰囲気があり、シワが伸びやすく管理に手間がかからない
・生地に落ち感がありゆったりとした形だけどスッキリとしたシルエットで着られる

こうしたことは実際に着て、体感していただくことで、実感していただけるものですが、それはどれも「シャトル織機」によって織られた生地がもつ特別な機能性がもたらすものです。
HUISの生地は「細い糸をゆっくりと超高密度」で織ることが特徴ですが、今日は、現代の一般的なアパレル生地に使われている織機と比較した視点で、少し解説させていただきたいと思います。

HUISの生地が織られる旧式の「シャトル織機」は、約 50年前に製造されていたものです。現在は製造されていない、貴重な機械です。「シャトル」と言われる部品がヨコ糸を運び、ゆっくりゆっくりと時間をかけて織っていきます。
対して、現代の最新式の織機は「空気」でヨコ糸を運びます。そのスピードは目ではとても追えないほどの超高速で、一瞬で大量の生地を生産することができます。
こうした二つの織機で織られる生地を比べてみます。極めてゆっくりと織る「シャトル織機」は、ヨコ糸にできるだけテンションをかけません。糸に負担をかけずに、ゆっくりと、ですがぎっしりと密度を入れて織っていきます。
わかりやすいイメージとしては、「たっぷりの糸を“ふにゃふにゃ”で、“ぎゅうぎゅう”に織った生地」と言えます。

一方、最新式の織機で織られる生地は、超高速で織るため糸にテンションをかけざるを得ません。強い力で糸を張りながら、少ない時間で大量の生地を作るため、低密度で織られたものが主流です。
一見しては分かりづらいものですが、こうして「糸をギンギンに張った低密度の生地」と、「たっぷりの糸を“ふにゃふにゃ”で“ぎゅうぎゅう”に織った生地」を想像して見ていただければ、その肌触り・着心地の良さは明らかだと思います。
糸に負担をかけずに織ることは、耐久性にもつながります。衝撃を吸収し、使い込むほどに風合いの増す生地となります。
細い糸を超高密度に織った生地は、風を通しにくく、軽いだけでなく保温性も備えます。また、そのしなやかさは服にとって大切な「落ち感」が生まれます。他にはない着心地とともに、美しいシルエットを生みます。そして生地表面の凹凸感は、肌あたりの軽さに繋がります。一日着ていても疲れ方が違うのは、軽さの他にもこうした理由があります。

「シャトル織機」で織られた生地は、決して華美なものではありません。
鮮やかなカラーのテキスタイルデザインや、目を見張るような織り柄があるわけではなく、多くは無地の素朴な生地です。
ですが、実際に着ることで、私たちの暮らしを豊かにしてくれる、そんな特別な生地です。そんな生地が今でも手に入れることができるのは、何倍も、何十倍も早く織ることのできる織機が開発され、他社が設備を入れ替えていくなかで、「シャトル織機」を使い続けてきた遠州の職人さんたちがいるからです。
効率化の一方で失われてしまう大切なもの、その価値に重きを置いて、実直にこれまでどおりの生地を織り続けてきた、その志があったからです。

HUISの生地は、一目見て伝わる情報量は多くはありません。多様な情報発信ツールが広がる中で、決して“映える”生地ではありません。
そんな寡黙な生地のことを、しっかりと感じ、大切にしていただけるお客さまのおかげで、HUISはこれからもこの生地を使い続けることができます。だから、私たちは遠州の機屋さんに、生地を発注しつづけることができます。
今年は一年、本当に大きな流れの変化のあった一年でした。
来年も、再来年も、変わらずにこのものづくりを続けていけるよう、これからも取り組んでいきます。





2020-12-18

【太番手・超高密度】の特別な生地・バフクロス

伝統と技術の真骨頂を体感

今月、リリースしたバフクロスワイドパンツは、人気の 504ワイドパンツに新たに「バフクロス」を使ったもので、さっそく取扱店さんやイベントなどで、不思議な生地の風合いに魅了される方が多くおられます。
特に生地に精通されている方から「こんな生地が作れるのか」と驚かれることの多いこちらの「バフクロス」は玄人好みの生地とも言えるかもしれません。

昨日の投稿でご紹介させていただいたように、旧式のシャトル織機で織る生地は、「たっぷりの糸を“ふにゃふにゃ”で“ぎゅうぎゅう”に織った生地」とイメージしていただけるとわかりやすいと思います。
時間と糸を惜しみなく使うことから、非常にコストのかかる高級生地ではありますが、軽くやわらかく丈夫で一年を通して快適に着ていただくことのできる特別な生地を生み出すことができます。高級生地と言われる生地の多くは、こうした旧式の織機で織られたもので、主には細い糸を高密度でゆっくりと織った生地です。

HUISのアイテムに使う生地も、そうした細番手の生地が多くを占めていますが、こちらの「バフクロス」は、「太番手」の糸を超高密度で織った珍しい生地です。
具体的には、タテ糸 20番手・ヨコ糸 30番手を使っています。「細番手」の糸を超高密度で織るよりも、「太番手」の糸を超高密度で織ることの方がさらに高い技術を要することから、このバフクロスは遠州で培われた伝統と技術の真骨頂とも言える生地だと思います。太番手の糸を高密度に織るのが、なぜそれほど難しいのか？
それは、織機により大きな負担がかかるからです。
細い糸でもひしめき合うほどの超高密度の生地を、太い糸を使って同じだけの密度で織るためには、非常に大きな力で生地をコントロールしなければなりません。
バフクロスを織り上げているときには、織りあがっていく生地がその密度に耐えかねて、織機を押し戻すような現象が起きるそうです。その反発力を押さえ込むように、より強い織機の力でゆっくりと着実に織り上げていく。
生地と織機が拮抗するそのパワーは、一般的なシャトル織機では、織機自体が壊れてしまうほどの力なのだそうです。

国内有数の織機の製造地として発展を遂げたこの遠州地域には、かつて織機を作っていた職人たちが今もなお存在します。
普通では織り上げられないような生地を織るために、カスタマイズとメンテナンスを繰り返してきた特別なシャトル織機だからこそ、織り上げることができる生地。それがこの「バフクロス」なのです。
生地の密度を感じられるびっしりとしたハリ感がありながらも、シャトルらしいしなやかさが融合した生地で、平織りのためとても軽く、履き心地は抜群です。
遠州織物の真骨頂＝太番手＆超高密度の「バフクロス」を、ぜひ体感してみてくださいね。

2020-12-31

2020年も、いよいよあとわずかとなりました。

激動の2020年を振り返って

2020年も、いよいよあとわずかとなりました。目まぐるしく環境が変わる中で、ふだん先々のことを考えていることが常で、立ち止まって振り返る、という機会がなかなかないのですが、大晦日くらいは少しゆっくりと振り返って見たいと思います。

今年も一年、春から数え本当に多くのイベントに出展させていただき、たくさんの方との新たなご縁をいただくことができました。
また、コロナ禍の中で予定の変更もありましたが、立川 Rustさん、福岡 Combleさんの中にそれぞれ東京ショールーム、福岡ショールームを OPENできたことも大きな一歩となりました。
そして、ありがたいことに今年も全国で新たな取扱店さんが加わってくれました。現在水面下で準備をしていただいていて、年明けから春にかけて新たに取扱がスタートするショップさんもいくつかございます。
それから、緊急事態宣言の中で取り組みをはじめた「インスタライブ」の配信も、定期的に開催させていただきました。産地応援キャンペーンにもたくさんのご賛同・ご協力をいただくことができ、遠州産地へも寄付という形でみなさまの想いをお届けすることができました。新型コロナウイルスという大きな脅威の中、支えてくださるいろいろな方々のおかげで、HUISは一歩、二歩と前に進むことができた一年でした。
ただ、一年を振り返ってしっかりと向き合って考えるべきは、やはり国内の生産現場のことだと思います。

これまでも何度かお伝えしてきたように、コロナ禍がアパレルの生産現場に与えている被害はあまりにも大きく、紡績・機織り・縫製など、国内の生産現場のすべてに多大な影響を与え続けています。
事業者さんの倒産や事業転換は今も相次いでいて、現場における今までのような生産体制が作れなくなってしまいました。
ただ、生地産地で直接仕入れられることから、最高品質の生地を使いながらも通常のアパレルブランドと比べ価格を大きく抑えられるという強みは、今後も変わりません。「シャトル織機」で織られた生地は HUISの原点でもあります。今後いっそう貴重になるであろう「シャトル織機」による生地を、HUISではこの先も使い続けていきたいと考えています。

緊急事態宣言の中で配信させていただいたインスタライブでは、「外に出かけられなくても新しい服を着られるのはやっぱり楽しい」「こんな中でも服のことを考えていられる時間は、幸せな時間」といった声を、お客さまからいただきました。
洋服が好きな人、生地が好きな人にとって、『いい服』が人生にもたらしてくれる価値は無限大だと、私たちは考えています。
一年を振り返りながら今に向き合い、これからのことを考えて。国内の生地産地のこと、日本のものづくりのこと、来年も関わってくださる皆さんとともに共有しながら、いっそう新しい価値を作っていきたいと思います。今年も一年、本当にありがとうございました。





2021-01-05

100 年の歴史が育む
世界に誇るカットソー生地産地・和歌山







2021年から新たにスタートするレーベル

「HUIS in house」の生地は、高級カットソー生地産地・和歌山で生まれます。
紀ノ川の豊かな水と受け継がれた高い技術をもとに、細番手の高級糸をゆっくりと柔らかに編み上げた生地は、五感に幸せをはこびます。

和歌山県は、カットソー生地として主に用いられる「丸編ニット生地」生産国内１位を誇る編み生地の総合産地です。伝統的な技術で編まれる生地は国内外の高級ブランドにも使われる世界有数の高品質な生地産地で、筒状に編んだニット（丸編み）は、伸縮性に富み、ソフトな風合いが特徴です。
和歌山での編み生地生産の歴史は、明治 42 年にスイス製丸編み機 5台を導入して事業を開始したことから始ます。その歴史は実に 100年以上。

大正時代には第一次世界大戦を契機に一層の発展を遂げ、設備機械台数 4,000台を超える全国一の丸編み産地に発展しました。

一方、戦後から近年にかけてアジアを中心とする安価な海外産生地の輸入が急激に増加していきます。消費者にとって低価格の衣料製品が手に入りやすくなった一方で、国内の繊維業産地はいずれも大きな打撃を受けました。経済のグローバル化が進む中で、こうした境遇を迎えたことは「遠州織物」も同様です。
和歌山ニット産業の各企業も、単に後継者がいるだけではなく、新しい時代に対応した戦略と受け継がれた技術を備えた企業でなければ生き残れない時代を迎えました。
目指すべきは、安価な大量生産型の海外の生地とは一線を画す、高品質な生地。こうした時代を経て、今残る和歌山の企業が生み出す生地は、高い技術で生み出された、風合いと機能性を備える特別な生地です。

一方で、アパレル業界における「生地」は中間材であることから、一般のお客さまにとって認知度が低いことは否めません。
国内でどれだけ高い品質の生地が作られていても、最終製品を通して生地産地のことを知る由は、残念ながら多くはありません。
緻密で繊細な日本の職人の技から生まれる、唯一無二の豊かな生地。
「HUIS in house」はこうした日本の世界に誇る技術を、製品を通して伝えていくことが、大きなテーマのひとつです。

2021-01-06,07

0.00001% 世界最高品質の綿
「SUVIN COTTON（スヴィンコットン）」









【HUIS in house】に使用される生地は、実際に触って見ていただければすぐに実感できるほどの特別な風合いと機能性を持っています。その理由は、「和歌山県で編まれている」ということともう一つ、「使用している『綿』が特別である」ということが大きな理由です。

現在、小規模な栽培を除いて、日本国内において産業規模での綿花の栽培はほとんど行われておらず、日本で生産されるアパレル生地の綿原料も、ほぼ全てが海外から輸入されています。
世界最大の綿花産地であり、高級綿の生産地としても知られるインド。
その中でも、【HUIS in house】の生地に使われている最高峰の綿「SUVIN COTTON（スヴィンコットン）」は、綿花の王様、インドの誇りといわれる特別な綿です。
インド綿という王冠の中心に、燦然と輝く宝石。インドの紡績ではスビン綿を使用する際、神に祈りを捧げるといいます。

衣服に使われる綿には様々な種類がありますが、中でも高級糸とされるのが「超長綿」といわれる種類の綿です。繊維長が長いことから、やわらかな肌触りや高級感あるツヤ感、そして高い耐久性が生まれます。
「ギザコットン」や「スーピマコットン」といった高級糸の名称を耳にしたことがあるかもしれませんが、こうした高級綿糸は「超長綿」の代表です。全世界での年間綿花生産量は約 2600万トン、そのうち「超長綿」の年間生産量はわずか約 39万トンです。すべてのコットンの中でも 1.5%ほどしかありません。

そして、その「超長綿」の中でも世界最高峰の繊維質を持つといわれる「SUVIN COTTON（スヴィンコットン）」の年間生産量はわずか「200トン」。実に 0.00001%の希少な高級綿です。

ギザやスーピマよりも、さらに長く細い繊維を持つ SUVIN COTTONは「綿の宝石」と呼ばれ、シルクのような光沢とカシミヤのような肌触りのコットンとして知られています。
では、繊維が長く細いことで、なぜ特別な風合いの生地が生まれるのか？
その秘密は糸の「撚り」にあります。
「SUVIN COTTON」の特徴は、超長綿の中でも、ひときわ繊維質が細く、長く、強いことです。
2.9マイクロの SUVIN糸は、糸自体がシルクのようなツヤとカシミアのような柔らかさを持つとともに、糸に撚り（複数の繊維をねじり合わせること）をかけなくても強度をもつため、甘撚りの糸を使って丈夫な生地を生み出すことができます。
撚りは甘ければ甘いほど、やさしくやわらかな風合いが生まれる。それは、繊維の一本一本がわかるような繊細な柔らかさ。
HUIS in houseの生地は、超甘撚りの糸を使った、柔らかな風合いと日用耐久性の共存する生地です。また、綿の白度が高いことから染料の入りが良く、長く使い続けながらも退色しにくい特徴を備えています。

「SUVIN COTTON」が生産されているのは、世界でも最大の綿花の生産地であるインドです。綿花の生産には、雨季と乾季がはっきりしており、かつ緯度が低く、強い太陽光線が降り注ぐ場所が適しているといわれます。ただインドにおいてその条件に合う土地の多くは、サバナ地帯という砂漠に近い地域で、豊かな土壌に恵まれにくい地域です。
この「SUVIN COTTON」が生産されているインド・タミールナドゥ州「デカン高原」は、こうした高度と緯度の条件が合致し、綿花に適した気候でありながら肥沃な土壌を備える、世界的にも稀な超長綿の産地。地球が産み出した「奇跡の土地」といわれる土地です。

ただ、かつて最盛期には年間 6000トンの生産を誇ったといわれる SUVIN COTTONも、現在の収穫量は年わずか 200トンあまり。アパレル製品の低価格化が進む中での高級糸の需要減や、気象環境の変動により絶滅が危ぶまれています。農業も、織物も、そこに関わる“人”と“技術”が大切であることは同じです。
素晴らしい生地を作ることができる古い機械がどれだけ残っていても、人から人へ伝えられてきたその扱う技術がなければ、生地を生み出すことはできません。
仮に最高峰の綿花が育つ種が残っていても、その土地で育まれた栽培技術がなければ、最高品質の綿花を育て、収穫をすることはできません。素晴らしい資源も、技術も、需要がなければ知らないうちに消えて無くなってしまいます。
どんな業界においても効率化が進む中で、そうした価値あるものが、今なくなりつつあります。

「綿の宝石」と呼ばれる SUVIN COTTONと、伝統ある編み物産地である和歌山の職人が作り出す、唯一無二の生地。
【HUIS in house】のリリースは明日の夜を予定しています。
その価値を、ぜひ体感してみてくださいね。

2021-02-17

衣服における「MADE in JAPAN」の誤解と日本の生地産地のこと



アパレル業界での「MADE in JAPAN」とは

先週から21SSの新商品のリリースがスタートしました。今後も少しずつリリースの情報をお伝えしていきますね。また、さまざまな地域でのイベント出展もこれから続いていきます。
そうしたイベントでの販売の際などにはお客さまにいつもお話していることではありますが、あらためてお伝えできればと思うことを、今日は投稿させていただきたいと思います。

みなさんがお店に足を運んだ時、手にとった洋服の製品タグに「MADE in JAPAN」という記載があると、「生地から縫製まですべてが日本で作られた洋服」だと思われる方が多いかもしれません。
ですが、アパレル業界において「MADE in JAPAN」という表示は「縫製地」だけを指すもので、生地についてはどこの国で作られたものかということを言及されることはありません。言い換えると、購入するお客さまにとって、どこの国で作られた生地の洋服か、を確認する方法がないのです。
少し違和感を感じる方もいらっしゃるかもしれません、私たちも最初にそのことを知った時には不思議に感じました。ですが、これは国際的な統一規定のため、こうしたルールの上で世界中のアパレル製品は流通しています。そのため、実際私たちが目にする「MADE in JAPAN」と表示されている洋服のうちの多くは、アジアを中心とする安価な海外産の生地を仕入れ、日本国内で縫製されたものです。
統計では、近年の日本国内に流通しているアパレル製品のうち約 20%が「MADE in JAPAN」と表記されている衣服だと言われています。
そして、そのうち、実際に「日本産の生地」を使いかつ「日本で縫製」した衣服は、1%に満たないと言われています。
それだけ、日本国内で織られた生地を使った衣服はほとんど見ることがなく、希少であるということです。これは、驚くような数字だと思います。

では、なぜ流通コストを抑えられるはずの身近な日本国内の生地が、それほど使われることが少ないのか？
それは、日本で作られる生地の多くが、海外産の生地と比べて「高価な高級生地」であるからです。日本の生地を使った服は原価が高く、高価な値段の製品となってしまいます。
近年のアパレル業界は、ファストファッション化が進み、安価な衣服が主流となる中で、こうした国産生地の需要は大きく落ち込んできました。
ここで、日本の「生地産地」に目を向けてみたいと思います。
日本の生地産地というのはおもしろいことに、農畜産物のように地域ごとで特色があり、産地ごとに作られる生地が分かれています。例えるなら、「魚沼産のコシヒカリ」や「松阪の松阪牛」などといったように。
そんな風にイメージしていただくと、頭に浮かぶ生地や産地はありますでしょうか？
岡山・広島などのデニムは世界に誇る品質として知られ、ご存知の方も多いかと思います。そのほか、今治のタオル、奈良の靴下、など製品になるものは知られているものも多いです。
一方、中間材としての素材となるとだんだんと知られにくくなっていきます。愛知県一宮市の尾州織物はウールの産地、滋賀のリネン、新潟の横編みニット、和歌山の丸編みカットソー。そして浜松市を中心とする「遠州」地域は、「コットン生地」の産地です。こうした国内の産地で生産されている生地の多くは高級生地であり、品質に徹底してこだわる欧州の有名ブランドが衣服を作る際には、実際こうした日本国内の生地を数多く用いています。
ですが、生地をどこで仕入れたのか、という情報は高級ブランドになるほど企業秘密、トップシークレットとして扱われることになります。残念ながら国内で作られている高品質な生地について、日本人である私たちが知ることが少ないのは、こうした事情もあります。

ではなぜ日本の生地は高級生地なのか？
それは、海外に比べ国内で生地生産に使われている機械は古いものが多い、ということが大きな要因のひとつです。
そうした機械は、時間と技術を多く要する機械です。最新型の機械で、安価に効率よく大量生産できる海外産の生地とは一線を画す生地。手間を惜しまずに職人が作る、付加価値の高い生地。
他にはない着心地や、複雑な織り柄など、独自の特色ある生地を作る地域が生き残ってきました。
衣服の低価格化が年々進む中で、それぞれの技術＝強みを生かし、押し寄せる海外産の生地と戦ってきた歴史が、今ある生地産地の分布に現れているのです。

そして、このように日本の各地域に点在する繊維産地の中で、ここ「遠州」という産地の大きな特徴のひとつは、古い織機を扱う機屋さんが国内の産地の中で最も多いということです。
日本初の自動織機の生みの親である発明家「豊田佐吉」（トヨタグループ創始者）が生まれた土地であり、織機を作り操る技術者が集結したものづくりのまちとして、遠州の繊維業は大きく発展してきました。
HUISの衣服に使われているのは、そんな当時に発明された旧式の「シャトル織機」で織られた生地。細い糸を高密度に織る、風合い豊かな生地は、何十年と磨き続けてきた、遠州の職人の技術が凝縮した生地です。特別な風合いと、様々な機能性を持つこの生地のことを、私たちは誇りに思っています。

もちろん海外産の安価な生地が一概に悪いものというわけではありません。効率よく大量生産が可能になったことでアパレル製品は安価に手に入れられることができるようになりました。そうした衣服もニーズに応えている服です。
そんな中で、私たちは個人個人にとって選択肢があることが大切だと思っています。今のような時代にあって、自分が望む、心地よい暮らし方を満たせるような衣服。そうしたことを求めるみなさんに、届けられるブランドでありたいと思います。

これからはじまる新たな 2021年の春夏シーズン。今期も HUISは、さまざまな地域で、たくさんの方に、この生地の価値を届けていきたいと思っています。





2021-02-19

“しっかり感・ハリ感”と、“しなやかさ・柔らかさ”の相反する感触が共存する生地



着る人へもたらす不思議な感覚

昨日、放送された NHKあさイチさんでの反響はありがたいことにとても大きく、お客さまや取扱店さまなどから今もたくさんのお問い合わせやご注文などをいただいています。
商品のデザインやカラー、シルエットなどはオンラインストアでご覧いただくことができる部分も多いのですが、「風合い」「肌触り」「着心地」といったものは、実際に体感していただかないとなかなか感じていただくことはできません。
そんなこともあって、全国さまざまな地域の百貨店さんやショップさんなどからお声掛けをいただき、商品を取り扱っていただいたり、POPUPイベントの開催をさせていただいています。
そうした場で実際に生地を触っていただいたり、ご試着いただくことで、みなさん同じような感動を受けていただくのですが、今日は HUISの特別な生地について言葉で可能な限りお伝えできればと思います。

番組の中でもご紹介いただいたように、旧式の「シャトル織機」で織られた生地は、豊かな風合いと様々な機能を持ちます。手に触れていただいた時の感触を言葉で表すと、
・高い密度で織られていることがよくわかるハリ感、生地のしっかり感
・おどろくほどの肌あたりの柔らかさと、着用した時のしなやかさ

を感じていただくことができます。
この「しっかり感・ハリ感」と「しなやかさ・やわらかさ」というのは、実は相反する性質です。
相反するはずのこの 2つの感触が、一つの生地の中に共存している、ということが触わる人、着る人へ不思議な感覚をもたらす、シャトル織機で織られた生地の特別さだと思います。
それは例えるなら、鍛え上げられた「アスリートの筋肉」のような生地です。フィギュアスケートを滑る競技者は、強靭な体幹と、しなやかな筋肉をあわせもつからこそ、美しく力強い演技ができる。それは、一足飛びに手に入れられるものではありません。長年の日々の鍛錬と、技術の積み重ねがあって初めて実現できるものです。

では、なぜ旧式のシャトル織機で織った生地では、こうした相反する性質が共存するのか。
それはやはり、「低速でゆっくりと織る」ということに大きな要因があります。
アパレル生地を織る現代の最新式の織機は、超高速で織られる効率的な機械です。目にも止まらないほどのスピードで織れるよう、繊維業における織機は革新的な発展を遂げてきました。
ですが、超高速で織るためには、糸に強いテンションをかけざるを得ません。これは、物理的に避けられないことで、早く織るためには早く糸を運ぶ必要があります。
そのため、糸が強く張られた状態で織り上げられていくことになり、そうした生地の触った時の感触は、なんとなく想像することができるのではないかと思います。
こうした最新式の織機と比べ、旧式のシャトル織機は極めて低速でゆっくりと緯糸（よこいと）を運んでいきます。糸にできるだけテンションをかけず、あそびを持たせた形で、極端な表現で言うと「ふにゃふにゃ」に緯糸を運んでいきます。
また、シャトルが往復するのは、織機に織りかけられた経糸（たていと）の間を通っていきます。大きなシャトルが往復するためには、経糸がその都度大きく開かなければ通ることができないことから、経糸は常に上下に大きく開口しながら織り上げていきます。
緯糸にテンションをかけず、そして経糸を大きく動かしながら織ることで、ふっくらと立体感のある独特な風合いが生まれます。こうして織る生地はどれほど密度を入れても、糸自体にあそびを残した組成を持つことから、しなやかで柔らかな感触を持ちます。使い込むほどに風合いが増し、着る人に馴染んでいく服となります。
シャトル織機で織られた生地に、「しっかり感・ハリ感」と「しなやかさ・やわらかさ」という相反する性質が共存するのは、こうした理由があるのです。

福岡久留米のうなぎの寝床さんとの対談では、そんなシャトル織機で織られた生地の話を掘り下げて考えています。こちらもぜひ、ご覧になってみてくださいね。

■うなぎの寝床×古橋織布× HUIS
産地コラボレーションが生み出す【遠州織物もんぺ】
https://1-huis.com/ensyumonpe_1



2021-04-04

HUIS パートナースタッフの門出



私達が考える「販売」の意義

4月は入学、入園、そして新社会人の門出の季節。

先日、HUISで長く尽力してくれてきたパートナースタッフの一人が、新社会人として、国内有数の繊維産地「尾州産地」へ就職し、新たな一歩を踏み出されました。

HUISでは、全国各地で出展させていただいているイベントやショールームにおいて、「パートナースタッフ」さんたちに協力していただき、販売を担っていただいています。パートナーのみなさんは、それぞれにご自身の事業や仕事を持ち、展望や世界観をもった方々で、私たちにはない本当に様々なスキルをお持ちです。

いろいろな経緯で HUISの活動に共感いただき、それぞれの地域で、遠州織物の価値を伝えることに協力をしていただけているみなさんは、まさに「パートナー」であり、いつも大きな力を貸していただいています。

3年前の冬、大学 2年生の頃から HUISの販売を手伝ってきてくれた彼女は、どんな現場でも、産地のものづくりや、そこで生まれる生地の価値を、一心に伝えてきてくれました。その熱意を受けて、HUISのファンになってくれた方は少なくありません。

現在 6年目を迎える HUISにとって、まぎれもなく創成期を支えてくれた一人でした。

遠州だけでなく、さまざまな産地やアパレルの業界に精通していた彼女は、昨年度まで学んでいた大学の卒業論文で「繊維産地」のことを自身の視点からまとめられました。

その中に、産地発ブランドの一例として HUISのことを取り上げてくれています。

販売という立場で HUISに長く関わってきてくれていた方が見る、HUISの価値の視点がとても嬉しく、一部ですが以下に紹介させていただきたいと思います。

－尾州を主とした繊維産地における「作者の再生」
―バルトのテクスト論の批判的検討を通して―

服は「人が作っている」ということを理解している消費者が、この国にはどれだけいるだろうか。服は生地から作り、生地は糸から作り、糸は繊維から作る。その間には更に多くの諸工程が存在し、そこには様々な人が携わりものづくりを行っている。機械からぽんと、完成品が飛び出してくるわけではない。服が生み出されるまでには、長い物語が存在しているのだ。そう捉えると、わたしたちは服という「作品」を着ているのかもしれない。

ファストファッションはわたしたちに簡単に装うことのできる時代をもたらしたが、その反面、生産者と消費者の距離を遠ざけてしまった。複雑になった生産構造は過剰な供給や無理のある生産サイクルを固定化し、私たち消費者は服を消費するばかりだ。そうした中で作り手の存在は薄れ、服ができるまでの背景は見え辛くなってきた。わたしは、高校 2年生の時に初めて「生地を織る工場」へ見学に行き、それを契機として服に携わる道に進むことを決めた。そこで見た光景は、想像を絶するほど途方もない、そして熱量の込められた「ものづくり」の現場であった。糸から生地が出来るまでの工程を見学したことで、その前後を含め、服ができるまでの背景には果てしない長い道のりが存在していることを工場の中で感じたのだ。その工場との出会いが、わたしの「尾州」との出会いでもあった。

【中略】3-2-6

本事例の対象となる HUISにおいて、筆者は 2018年より販売スタッフとしてブランドに関わってきた。そのため、「読者」―消費者としての視点と共に、広義での「作者」―ここでは販売員としての視点から、事例をまとめる。

【中略】HUISの商品はハイブランドと同等の生地を使用しつつも、自身が産地内にいるメリットを生かし、機屋と直接の取引を行うことで上代を極力抑え、「日常着」として着用してもらえるよう提案している。また、単に生地を仕入れるのではなく、機屋と直接打ち合わせを行い生地を企画するところから始め、商品の生産 、取扱店への卸売り、百貨店などでの催事出展、自社のオンラインストアでの直接販売など、幅広い業務を行う。「川中」と称されるアパレルメーカーでは、生地を仕入れて商品を作り、卸売りまでを行うのが一般的であるため、川上（生産）から川下（販売）まで目の行き届いた体制になっている HUISの特徴が窺える 。この体制は、一貫性のあるブランドの世界観を築くと共に、商品の情報や価値を正しく「読者」である消費者に伝えることを実現している。各地で行う「接客販売」によってファンが生み出されているという特徴も、この体制によるものである。

【中略】HUISのファンの形成には、各地で行われる催事やイベントでの「接客販売」が大きな要因となっていることを先述した。確かな品質の生地と、それを丁寧に言語化して消費者に伝える HUISの姿勢は、消費者に対して産地や工場、生地、そして服の価値の理解を促しているといえる。また同時に、服そのものの見方にも変化をもたらしていると考えられる。実際に、接客された顧客たちは産地や生地について知ることで HUISの魅力を感覚的かつ理論的に理解し、また日常で HUISの服を着用し生活する中で、より実感を伴って理解を深める傾向にある。この傾向は、ブランドにおける「伝える」面を担う昌樹さんが認識していると共に、筆者が 3年に渡り HUISの販売を行う中で感じたものでもある。本項では、百貨店の催事やイベントの場において、HUISの販売スタッフとして接客を行い感じた、「読者」である使い手、つまり消費者の消費行動の中での変化を明らかにする。

【中略】販売の多くは、各地での期間限定の出店におけるものであるため、その地域のファン―「既存顧客」や「見込み顧客」に対して SNSやホームページで事前に情報を届け、来店を促すことが重要となる。そして、販売期間においては、通りすがりの「潜在顧客」へいかにアプローチを行い、「新規顧客」にするかが重要となる。先述したように、HUISは接客において多くのファンを生み出しており、その背景には、徹底的に生地の魅力を伝える独自の接客スタイルの存在がある。浜松発ウェブマガジンにて、あゆみさんは次のように語っている。[私たちは服を通して、生地づくりの技術と産地の想いを伝えていると思っています。肌触りが良いとか、軽くて着心地が良いとか、丈夫だとか、それは触れたり着たりすれば感じられることなのですが、それだけでは古橋織布さんの生地の価値を伝えられてはいないんです。…（中略）…私たちが使わせていただいている生地は、これだけの技術とかけた時間があって、はじめて生まれる生地なのだということ。効率化の時代の中にあって、旧式のシャトル織機を使い続ける古橋織布さんの志が、唯一無二の生地を生み出しているのだということ。そうしたことが伝わって、だからこうした特別な機能を持つのだと、お客様に理解していただけたときに、はじめて代えがたい価値になるんです。だから、私たちは伝え続けることが必要なんです。]（『TOWTOWMI.jp 』2019 6.286.28）



【中略】消費者にとっては、事前に情報や知識を持っていなければ、商品の評価は自身の目で見たことや感じたこと、接客などから得る情報のみから判断することとなるため、接客の濃度がその商品に対する理解の深さに直結する 。生地の良さを理論的に理解してもらうには、原料や製織工程といった、消費者から遠く離れた生産背景での「物語」を言語化して伝えることが必要不可欠であり、それを聞き興味を持つことによって、潜在顧客は見込み顧客へと変化していく。また、新規顧客が既存顧客になるケースも非常に多い。店頭での接客によって生地及び服の価値を知った上で、日常生活で着用し実感としてその良さを感じることで、オンラインストアでの注文、次の出店のタイミングで来店するなどしており、そこからは顧客ロイヤルティの高さが窺える。 理由としては、そうした既存顧客の場合、二度目以降の来店までに HUISのホームページや SNSから情報を収集し、生地の知識を得た状態にあるため、よりブランドや商品に対する愛着や理解が深化している様子が伝わるからだ。また、ロイヤルティを示す重要な行動として挙げられる項目に、「友人や同僚に商品・サービスを勧める可能性」というものがあるが、HUIS の既存顧客 は これに当てはまる。 HUIS は対面販売において厳格に顧客管理などを行っているわけではないためあくまでも経験則になるものの、友人や夫婦間において「商品を勧める」傾向にある顧客が多く存在するのだ。商品を勧めるという行動には、商品の理解と共に、親しい人を満足させるほどに自分自身が商品に魅力を感じていることが必要不可欠である。着用することで価値をより実感した顧客が既存顧客になるケースがあると先に述べたが、商品の理解を深化させる取り組みも HUIS は欠かさずに行っており、それがロイヤルティの向上にも寄与しているといえる。

【中略】潜在顧客の中には、「遠州産地を知らなかった」「シャトル織機というものを初めて知った」という人が多く、更には「服が糸からできていると想像したことがなかった」という人までいる。そうした顧客に対しても生地の説明を丁寧に行うことは、単に自社の商品に留まらず、「服」そのものに対する見方にも 変化をもたらしているのではないかと考えられる。－

服づくりの世界は、そこに関わる職人さんが幾重にも重なっていることが特徴です。機織りや縫製だけでなく、紡績、撚糸、整経、経通し、染色、生地加工、ほかにも細かな工程を職人さんたちが細分化して担われています。

そして、産地でものづくりに携わる職人さんたちは、往々にして寡黙です。自ら伝えられる場は、多くはありません。だからこそ、自身が作り出すものに、全てを託します。販売の現場は、こうして幾重にも積み重ねられた技術・ものづくりの価値を伝える最終工程であって、職人さんの誇りを届ける、最も大切な現場だと考えています。

あらためて、各地で力を貸してくださっているパートナースタッフさんたちに感謝するとともに、人生の新たなスタートを切った彼女の活躍を、心からお祈りしています。

（自身のインスタグラム @terayanmaで発信されていますのでよろしければぜひご覧ください）



2021-04-16

経通し職人・府川さんのこと

HUIS販売パートナースタッフの一人でもある、府川さんが先日の中日新聞・夕刊の一面に大きく取り上げられました。

昨年、機織りの工程の一つである「経通し」の専門的な職人さんとして独立起業された府川さんは、本当に様々な経験をお持ちです。
記事から一部抜粋しながらご紹介させていただきますね。

神奈川県出身の府川さんは東京都内の大学を経て英国やフィンランドに留学し、海外でも二つの大学を出られてから日本に戻り、外資系企業などで働いた後に浜松へ移り住まれました。
ファッションブランド「ミナペルホネン」への憧れから織物に興味を持ち、遠州織物を販売する会社へ就職。接客で生地に触れるうちに「作り手に回りたい」とのおもいを持つようになり、HUISの生地を織っていただいている古橋織布さんへ就職されました。

そこで機織に関わる様々な工程を学びます。綿花から糸にする「紡績」、糸をねじり合わせる「撚糸」、まっすぐに揃えてビームに巻きつける「整経」、そして機織り機にかける前の器具に糸を通す「経通し」。
超高密度と言われる HUISの生地を織るために、前工程として必要な「経通し」の作業は、たった 1枚の生地でも数千本に渡ります。職人さんが何日もかけて細い糸を一本ずつ器具に通していく気の遠くなるような作業です。

生地作りと一口に言っても、機織りをする前段階には必須となる様々な工程があります。その一つ一つの工程を担うのは、小規模な一人一人の職人さんたちです。ただ、繊維産地が衰退する中で、そうした職人さんたちが次々と廃業されている現状があります。
どれだけ素晴らしい織機が残っていても、その前工程を担う職人さんたちがいなくなり、技術が途絶えてしまえば、生地を織ることはできません。世界に誇る「遠州織物」の品質は、こうした全ての職人さんたちの仕事の連なりが、生み出しているとも言えます。





以前は、1600軒あったと言われる遠州の機屋さんは、現在 50軒ほどに激減してしまいました。
また、数百人いたと言われる「経通し」の職人さんも現在 70〜 80代の方がわずかに残っているばかりです。
経通し職人さんが途絶えてしまえば、今HUISで使わせていただいている生地も、手に入れることはもうできません。
こうした職人技術の連なりで成立している日本国内の繊維業は、俯瞰して見れば、薄皮一枚で繋がっているような産業でもあります。

そんな現状の中、府川さんは昨年 9月に古橋織布さんから独立し、整経工場の一部を借りて「経通し」の職人さんとして起業されました。
府川さんは以前から、こうした産業を支えることに興味のある若い方の受け皿や、事業の必要性をお話されていました。

府川さんは、自身の事業の行く先で、伝統産業やものづくりの現場を志す若い方々に、技術を伝えられるような存在になれればと言います。
現状を憂うことは、誰にでもできることかもしれません。でも、実際に生業としてその世界に踏み入れ、独立起業される、という意志をもつことは、そう簡単ではない、とあらためて感じます。

新たな一歩を踏み出された府川さんの活動を心から応援するとともに、こうした一人の起業家のストーリーにスポットを当て、しっかりと伝えてくれる地元の新聞記者さんがおられることをとても嬉しく思います。
府川さんには、イベントの際などに HUISの販売スタッフとしても力を貸していただいています。
見かけることがありましたらぜひ応援してあげてくださいね。

※検反作業されている様子の画像は HUISのプロモーションムービーの一部です

■ HUIS youtube
https://youtu.be/nWoDR_8QsQI

着る人の五感に幸せをはこぶ、極上の風合い






















日々の暮らしに寄り添う、日常着

HUISの衣服は、静岡県西部地域で生まれる最高品質の「遠州織物」から生まれます。
世界的にも希少な旧式の「シャトル織機」で織る生地は、時間をかけて細い糸を
ゆっくりと織る、風合い豊かな超高密度の生地。
驚くほど軽く柔らかで、着る人の五感に幸せを運ぶとびきり心地の良い生地です。
男女を問わず、年代を問わず、どなたの日常にもしっくりと馴染む服。
他では味わうことのできない、豊かな生地の風合いをぜひ味わってみてください。







HUIS. SHOWROOM

横浜SHOWROOM
神奈川県横浜市神奈川区金港町1-10
横浜ベイクォーター3F noni内

東京SHOWROOM
東京都立川市緑町3-1
GREEN SPRINGS E2-208 Rust内

豊橋SHOWROOM
愛知県豊橋市曙町南松原17 garage内

福岡SHOWROOM
福岡県福岡市西区姪浜3-11-5 COMBLE内

HUIS. journal

発行日　　２０２１年４月
発行者　　HUIS.
本書を無断複写・複製（電子化を含む）することは禁止致します。

We are still on a journey.

ハウスジャーナル
2022.8

HUIS. Journal



未来を拓く、小さな足跡 **Vol.2**

HUIS. Journal

HUIS webサイト（https://1-huis.com）ブログ記事より

HUISが常設店舗を持たない理由 ……02

常識を覆す生地・ダウンプルーフコットン……04

2021AW【HUIS in house】の新たなシリーズがスタートします……06

スケーター・金森綸花さんのこと －東京オリンピックを終えて－ ……08

HUISの秋冬生地における【保温性】と【防風性】の違い ……10

遠州織物ならではのハイブリッドな生地

「綿ウールタイプライタークロス」と「シャトルコーデュロイ」 …… 12

ダウンプルーフコットンダウンジャケットをリリースしました！…… 14

HUISのお洋服のお手入れについて ……16

2021年もありがとうございました ……18

天然素材と、アパレルにおけるSDGsについて ……20

ニューヨーク州ファッション工科大学・藤島奈央さんのこと……22

【シャトルリネン】の価格に感じていただく違和感、その本質的な理由 ……24

シャトル織機で織る、「本物」のタイプライタークロス ……26

札幌大丸でコラボレーションさせていただいた「PETTY」さん ……28

『アナザージャパン』のスポンサーをさせていただくことになりました ……30

2021-08-31

HUIS.が常設店舗を持たない理由



今年も、秋冬新商品のいよいよリリースがはじまりました。

ありがたいことに今期もたくさんのお客さまからオンラインストアでご注文いただいたり、イベントでお買い求めをいただいたりしています。そうした中で、常設のお店を出さないのはなぜか、いつでも商品を見れるようにしたい、という声をいただくこともあります。

こうしたお客さまのお気持ちはとてもわかりますし、私たちにとって心苦しい気持ちを抱く瞬間でもあります。ただ、常設店舗の展開をすることは、現在の商品価格を大きく上げることに直結してしまうことを、これまでもご説明させていただいてきました。

これまでも折に触れて解説させていただいてきましたが、今日はあらためて、解説させていただきたいと思います。

まず、大前提として、HUISの服に使われている生地はとても価格の高い、高価な生地です。

そのため、一般的なアパレルブランドさんがこのシャトル織機で生まれる生地を使い製品を作った場合には、非常に高価な洋服となってしまいます。高級ブランドと言われるブランドさんではなくても、ブラウス1枚が、3万円や4万円といった価格になってしまうことが一般的で、原価に対してそれだけのコストが必要になってしまう素材を、私たちは扱わせていただいています。

それは、遠州という歴史ある生地産地で、生産効率が極めて低く、職人の手作業を多く要する織機（＝50年前のシャトル織機）を使っていることから、必然的に価格がとても高い生地となってしまうことが理由です。その非効率性を代償として、超高速型の織機で織られる安価な生地と比べ、柔らかさ・軽さ・耐久性の高さや、自然なシワ感のある風合いなど、特別な機能を持った生地であることをこれまでもご紹介してきました。

（詳細はこちら → https://1-huis.com/all/1606）

遠州で生まれる最高品質の生地を使いながらも、日常着として愛用していただけることをコンセプトとしているHUISは、できるかぎり価格を下げられるよう、一般的なアパレルブランドさんとは異なるさまざまな工夫をしてきました。

例を挙げると、生地産地において機織り工場で直接生地を仕入れることにより一切の中間マージンを排していること、撮影やパンフレット・カタログ製作などを個人で自主制作することにより広告費を大きく削減していること、商品ロスのない消化率100％経営を続けること、といったことなど（詳細はこちら → https://1-huis.com/all/10673）がありますが、中でも「店舗運営による固定費を徹底的に排除していること」も大きな要因のひとつです。

【お客さまに洋服を届ける場】を設ける方法を、イメージしてみていただければと思います。さまざまな方法がある中で、一番コストがかかってしまうのは【常設の店舗運営】です。店舗を構えるためには初期費用のほか、年間を通して運営するための賃料・人件費のコストが極めて大きくなることは、イメージしていただきやすいのではないかと思います。こうしたコストは、必然的に商品価格に上積みされていきます。

次にコストがかかる方法は、【イベントの開催】です。ここにも、スペースをお借りする賃料や人件費は当然かかりますが、期間を限定することで、常設の店舗運営と比べれば大きくコストを抑えることができます。

そして、もっともコストを安く抑えられる方法は、【オンラインストアを通してお客さまにお届けすること】です。実店舗と比べて必要となる固定費・人件費が大きく抑えられることから、HUISではこうしたオンラインストアでの販売をブランド運営の中心にすることで、国内の遠州で生まれる最高品質の生地を使いながらも、他にはない大きく価格を抑えた商品展開をすることができるのです。オンラインストアでお買い求めいただけるたくさんのお客さまのおかげで、今の価格を維持し、遠州織物の素晴らしさを伝えることができています。







ただ、衣服というものは、一般的なモノとは異なるものだと私たちは考えています。

本やCDなどをオンラインで買うこととは違い、素材感やデザイン、シルエットなどをリアルな場で味わうこと、袖を通した時の感動を共有したり、コーディネートを楽しんだり、または身につけ暮らした時の楽しみをイメージしたりすることは、衣服がもたらしてくれる特別な喜びであり、オンラインだけでは補きれないものだと考えています。特に、シャトル織機が生み出す生地の特別さは、実際に手にとって、袖を通してみてはじめて体感していただけるものだと考えています。

そうしたことから、HUISの商品を実際にご覧いただくことができるよう、百貨店や取扱店さんなど、ご協力いただける様々な地域で期間限定のイベント出展を行うという形で、売り場を補完しています。また、各地にあるショールームは、HUISの取り組みに共感いただいているパートナーショップさんからスペースを提供いただいているもので、売り場での販売も含めてご協力をいただいています。

これらは関わっていただけるさまざまなショップさん・百貨店さんのご協力のおかげです。こうしたことから一般的な店舗の展開と比較して、大きくコストを削減することができるのです。

とても緊張感のあるバランスの中での取り組みですが、それは、今の時代にあった、今の時代ならではの、価値ある商品の届け方であると私たちは考えています。

季節が移り変わるごとに、衣服はいつも私たちに楽しみや、喜びをもたらしてくれます。さまざまな素材やデザインの衣服を、自分や、自分の暮らしに取り入れられることは、それだけでとても豊なことだと思います。産業を基に、暮らしを彩り、文化を形作るものだと思います。私たちの扱わせていただいている服というものは、そんな特別なものだと思っています。

緊急事態宣言がまた各地に広がり、なかなか平常時のような運営が難しくなってきてしまっています。そうした中でも、開催していただけるイベントやインスタライブなど、可能な方法をできる限り活用しながら、2021年秋冬のたくさんの新作を、少しでも多くの方にお届けしていきたいと思っています。

2021年の秋冬シーズンも、ぜひHUISの新作を存分に味わっていただくことができれば、嬉しいです。

2021-10-20

常識を覆す生地・ダウンプルーフコットン









本日、【ダウンプルーフコットン】を使用した2021AWのアウターをオンラインストアにアップしました。

スカートやパンツ、シャツなどにも数多く使っている【ダウンプルーフコットン】はこれからのシーズンにぴったりの生地です。

今日は、HUISの秋冬アイテムの中心的な生地でもあるこの【ダウンプルーフコットン】についてあらためてご紹介させていただきたいと思います。

【ダウンプルーフ】という名称は、「ダウンの羽根すらも通さない」という意味から来ています。通常、ダウンの羽はどんな小さな穴からもでてきてしまうため、ナイロンやポリエステルなどの化繊生地を使い、ダウン製品は作られます。

一方、こちらの生地には旧式のシャトル織機により限界まで高密度に織った特別なコットン素材を使っています。ダウンの羽も通さないほどの超高密度で織ったコットン生地で、ダウンをそのまま包み込むことができ、ダウンの常識を覆すと言われるのが、こちらの【ダウンプルーフコットン】です。

ダウンの羽すらも通さないほどの密度が入っていることから風を通しにくく、「天然素材のウィンドブレーカー」のような生地だと表現されることもあります。

こうした秋冬シーズンにとても適した機能性を持つ【ダウンプルーフコットン】ですが、その質感・風合いにも大きな特徴があります。

秋冬生地なのに春夏生地のような軽さ、そしてしなやかな着心地の良さがありますが、それに加えご愛用者さまの中には、「生地が動いた時にこすれるような独特な音が心地よい」と言われる方がおられます。

そんな時は、このシャリッ、パリッとした質感、擦るとかすかに音が鳴るようなこの触感が「特別な高級生地の証」なんですよ、とご説明させていただいています。

細い糸を、常識では考えられないほどの超高密度で織るからこそ生まれる、このパリ、しゃりっとした特別な音がなる生地。仮に、太い糸をこうした超高密度で織ってしまったら柔道着のような地厚な生地になってしまいます。

とても細い糸を、超高密度で織る、しかも古いシャトル織機でゆっくりと織っているから、このハリ感と、やわらかさ・しなやかさが共存するのです。

こうした“生地の規格”について、少し掘り下げてご説明させていただきたいと思います。

機織りの世界において、「細い糸」を「高い密度」で織る規格の生地ほど、難易度は上がっていきます。

職人の手作業による織機と糸の細かな調整を最適に行うことができなければ、織り傷ばかりの使い物にならない生地になってしまいます。

まさに、機屋さん、職人さんの腕の見せ所です。

HUISの生地に使われている糸はすべて高級糸と言われる糸ですが、超高密度で織る生地にはそうした糸をたっぷりと贅沢に使用します。そして、糸が細くなるほど、密度が高くなるほど、職人さんが織りあがるまでに手を掛ける時間はどんどん増えていきます。ゆっくりと動く旧式のシャトル織機で織る生地は、なおさらです。

加えて、そこに難易度も加わるわけですから、機屋さんにとってこうした生地を織るリスクが非常に高いことがよくわかると思います。

最高品質の生地を織ろう、と高級糸をたくさん仕入れ、長い時間をかけて織り、織り上がってみたら織り傷ばかりで売り物にならなかった、ということになれば、機屋さんにとってその後の経営は非常に厳しくなってしまうでしょう。

HUISが使わせていただいているこうした細番手超高密度の生地というものは、長い歴史の中で技術を積み重ねた遠州の機織り職人さんが、それだけのリスクを抱えて織っている、まさに綱渡りのような生地なのです。

「遠州」という産地は、こうした素晴らしい技術を持った機織り職人さんがまだ残っている、世界の中でも限られた繊維産地です。

海外産の安価な生地が多くを占めるアパレル業界において極めて稀な、本物の職人さんが織る、本物の生地です。遠州地域に住む人だけでなく、身につける人にとって、日本のものづくりの誇りを実感することのできる生地だと思います。

「遠州織物」と一言で聞いても、なかなかその価値は伝わりづらものだと思います。全ての方に理解してもらうことも、難しいことだと思います。でも目を向けてくれた方、耳を傾けてくれた方に、一生懸命伝え続けることが大切だと思っています。

軽くしなやかだけど暖かい、そしてパリっシャリっという独特な触感を持った【ダウンプルーフコットン】は、遠州織物の特別さの証。

ぜひこの贅沢さを味わっていただければと思います。



2021-10-23

2021AW
【HUIS in house】の新たなシリーズがスタートします





世界的に希少な最高品質の綿『SUVIN COTTON（スヴィンコットン）』をすべてに使用し、『和歌山県』で生まれる最高級のカットソーを展開してきた【HUIS in house】に、今秋新たなシリーズが加わります。

世界のコットン生産量のうちわずか0.00001％しか採取することができない特別な『SUVIN COTTON』は、繊維長が長く、糸自体がシルクのようなツヤとカシミアのような柔らかさを持つことから、とろけるようなトロみと、上質なツヤ感を生み出すカットソー生地が生まれます。

今春リリースしたこの【HUIS in house】のカットソーはたくさんの方にその特別な着心地を実感していただくことができ、ご愛用いただくことができました。

そんな『SUVIN COTTON』を使い、伝統ある丸編み産地の和歌山県で生まれる今回の秋冬の新シリーズ、こちらの企画は1年近く前から構想してきました。

こうしてやっと無事、リリースの準備を進めることが今できているのですが、実際の生産に至るまでには、実はとても難しい状況にありました。

それはこの『SUVIN COTTON』をとりまく状況が、ここ一年で特に難しい状態に陥ってしまったからです。

高級綿の産地として知られるインドで『SUVIN COTTON』は生産されていますが、インドの中でもスヴィンが生育できるのはデカン高原という一部の地域のみです。デカン高原は、気候、土質や高度・緯度など、さまざまな条件が生育適地として一致する地域で、奇跡の土地と言われている場所です。

ここで生まれる『SUVIN COTTON』が、今、これまでにも増して手に入りづらくなってしまっています。

もともと世界の綿花生産量のうち0.00001％というわずかな生産量しかなかったスヴィンですが、さらに生産量が落ち込んでいる。その大きな原因のひとつは、近年の地球温暖化による気候変動だと言われています。

一般的な綿花と比べ生育に時間と手間がかかるうえ、奇跡的に一致していた様々な条件が崩れ始めたことから、従来の生産量を維持することが難しくなってしまっているのだそうです。

そして、もうひとつの大きな要因は、今年インドを襲ったデルタ株コロナウィルスです。

世界の中でも特に感染拡大の大きかったインドでのコロナ感染は、生産現場から流通に至るまで多くの被害をもたらしました。

もともと生産量が落ち込んでいた中で、こうして追い討ちのように起こったコロナ感染拡大によって、これまで以上に『SUVIN COTTON』を手に入れることは難しくなってしまいました。価格の高騰が続いていることから、今後より一層厳しい状況が続くことが現在予想されています。

こうした中、想定外のことはさまざまありましたが、こうして無事新シリーズをリリースできる状況にこれたことは、ともに取り組んでくれた、糸づくり・生地づくりの職人さん、そして縫製職人さんなど、ひとえに関わってくださったみなさんのおかげです。

HUISのものづくりにおいては、こうした危機に立たされる業界や地域を目の当たりにすることが多くあります。

ご縁をいただく職人さんの多くは、大量生産はできなけれど、品質にこだわりを持って続けてきた、という方々で、時代のさまざまな状況・変化の中で、その道を断念されることもあります。それは、ご縁をいただいて、お話をうかがって、初めて知ることばかりです。

遠州の繊維産業にしても然りで、どれだけ素晴らしい技術・品質が受け継がれてきていたものだとしても、そこに目を向ける人がいなくなり、憧れを持って継ぐ次代の後継者がいなくなってしまえば、人知れず消えて無くなってしまうものです。

きっと、自分たちが知らないままにそうして消えて無くなってしまったものも、たくさんあるのだと思います。

私たちが知りえる範囲ではありますが、こうしたかけがえのない大切なものをできるだけ、使い、伝えていきたいと思っています。

そんな中で生まれる新しい生地を贅沢に使った【HUIS in house】の新シリーズをリリースできることは、本当に幸せなことです。ぜひご期待くださいね。







2021-07-28

スケーター・金森綸花さんのこと
-東京オリンピックを終えて-







Photo : Kazuo Ito

昨日、東京オリンピック「スケートボード・ストリート女子」では、西矢椛さんが金メダル、中山楓奈さんが銅メダルを見事に獲得しました。前日には、男子種目の堀米雄斗さんが金メダルを獲得し、いずれも大きな注目を集めました。なかには中継をご覧になって感動された、という方も多いかと思います。

HUISでは、同じ競技に取り組むスケーターの金森綸花さん（@rin_skatergirl）を、スポンサーとして少しばかりですが活動を支援させていただいています。

今回、見事メダルを獲得された堀米さん、西矢さん、中山さんなども、綸花さんが普段同じ大会に出場して技を磨き合っているスケーターのみなさんで、こうした日本人選手の快挙に、日本スケートボード界のみなさんのすごさ、レベルの高さ、を実感していただくことができたのではないかと思います。私たちも、あらためてそう感じた2日間でした。

競技の素晴らしさはもちろんですが、中継をご覧になった方には、国内外の選手のみなさんが心から楽しそうに競技に取り組む姿に魅了された方も多いのではないかと思います。

大きなケガと隣り合わせのひとつひとつのトリックに、失敗を恐れずおもいきり向かっていく姿、そして失敗した時でも前向きな笑顔で戻り、敵味方なくお互いを讃えあうみなさんの様子は、すごく輝いて見えました。

こうした大きな大会の場で、私たちが見ることのできる姿は一瞬でしかなく、輝いている瞬間を共有することしかできませんが、見えない部分で、それぞれの選手みなさんが日々積み重ねられてきた努力は計り知れません。

特に世代が若い選手の多いスケーターのみなさんにとっては、同級生と遊びたい時間もあったでしょう。でも、暑い真夏も、凍えるような真冬も、毎日休むことなく屋外で何時間も練習を重ねています。より難度の高い技を成功させるために、常に大きなケガのリスクがつきまとう練習を、恐れずに日々続けています。また、こうしたことを一年中、一心に支え続けるご両親の姿も見てきました。

計り知れないほどの努力を、毎日積み重ね習慣とする日々。

そんな努力を少しも感じさせずに、心から楽しそうに競技に臨む選手のみなさんの姿。それは、本当にみなさんがスケートボードを愛しているからなのだと思います。

そんな選手のみなさんととても比べることはできませんが、そうした姿勢は私たちにとっても同じものだと感じています。

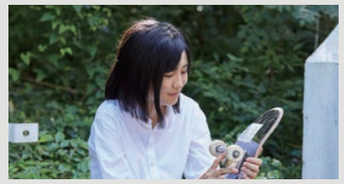
目に見えることのない日々の積み重ねを糧にしながら、さまざまなパートナーさんのおかげで、心から楽しむことができる服づくり。

そして、その基にある、気の遠くなるような繊細な技術で生地を生み出してくれる遠州の機織り職人さんたちの技術と生地への愛情もまた、同じものだと思います。

NHKの中継を解説されていたプロスケーターの瀬尻さんが最後におっしゃっていた、「日本代表の6人おつかれさま。オリンピック予選に出たみんなもおつかれさま。」という言葉が印象的でした。

今回の出場は叶いませんでしたが、次回のオリンピックに向けた綸花さんの挑戦もまた楽しみです。

綸花さんたちの取り組む姿勢に学びながら、今後もHUISとして、私たちができる形のサポートさせていただきたいと思います。



■金森綸花さん @rin_skatergirl
東京・城南島を拠点に活動するスケーター。スタイルに独特の世界観をもち、多くの大会で上位ランクの実績を持つ。東京アスリート認定選手。オリンピック強化選手候補にも選出され取り組まれています。
【Instagram】→ https://www.instagram.com/rin_skatergirl





2021-10-28

HUISの秋冬生地における【保温性】と【防風性】の違い

一年を通して快適に着ていただけるHUISの生地は、遠州の「シャトル織機」で生まれる特別な生地ですが、秋冬シーズンにも快適に過ごしていただける特徴ある生地がラインナップに並びます。

「コットンの高級シャツ生地」の産地（＝遠州織物）として知られる遠州は、春夏シーズンを中心とする生地の産地です。

それだけに、自分たちの技術を活かして秋冬にも適する生地を開発しようと、遠州の職人さんたちの試行錯誤から生まれた秋冬生地は、より工夫を凝らした特徴のある生地だと言えます。今日は、そんなHUISの秋冬生地を少し掘り下げてご紹介したいと思います。

お客さまからよくいただくご質問のなかに、「【ダウンプルーフコットン】と【ウォッシャブルウール】はどちらのほうが暖かいですか？」といったご質問があります。

どちらも暖かい生地になるのですが、暖かさ、にはいろいろな意味が含まれ、一概に比べることが難しいため、今回はその機能を整理してご説明させていただければと思います。

暖かな洋服の生地を作ろうと考えた時に、大きく二つの方法があります。

まず一つ目は、「保温性」のある素材を使った生地を作ることです。保温性のある素材の代表的なものに、「ウール」や「ダウンの羽」があります。ウールは素材そのものに暖かな空気を溜め込む性質をもつため、着用していると着用している人の体温から吸収した熱を生地が溜め込み、体のまわりに暖かな空気をまとう状態が生まれます。

HUISの中では薄くて軽いけれど高い保温性を持つ「ウォッシャブルウール（ウール100%）」が代表的な生地になります。

ただ、こうした生地も風には弱いため、屋内で着用している時には暖かいのですが、外に出て強い風が吹くと暖かい空気は飛んでしまい、寒い冬の屋外では保温性を維持することが難しくなってしまいます。



そこで暖かな生地を作るもう一つの方法が、「防風性」を持つ生地を作ることです。

生地は高密度になるほど、風を通す隙間がなくなることで、高い「防風性」が生まれます。防風性の高い生地をまとうことで、体を覆う暖かな空気が逃げないようにすることができるのです。

HUISの生地の中では、「ダウンプルーフコットン」や「パラシュートクロス」などが代表的な生地になります。“ダウンの羽すらも通さない“という意味を持つダウンプルーフコットンや、“パラシュート”という言葉からも、その防風性能が伝わりやすいかと思います。

通常、こうした防風性の高い生地を作るためには、細い糸でも高密度に織ることができるナイロンやポリエステルなどの化学繊維が使われますが、天然素材であるコットンでこうした規格の生地を生み出せるのが、遠州の機織り技術の驚くべきところです。

肌に触れた時に冷たい感触のある化繊生地と比べ、コットンは肌に触れた時の温かみがあり、そうした心地よさを好まれる方も多くおられるのではないでしょうか。

こうした“保温性”と“防風性”を踏まえていただくと、秋冬を暖かく快適に過ごしていただける上手な着こなしができると思います。

保温性の高い「ウォッシャブルウール」のブラウスやカーディガンを着ていただき、その上から防風性のある「ダウンプルーフ」などのアウター・シャツなどで覆っていただくことで、効率よく暖かい空気を閉じ込めることができます。



いずれも軽くしなやかな生地なので、重ね着したときにもかさばることがありません。

天然素材にこだわるからこそ、天然素材の機能を存分に活かすことができる生地。遠州で生まれるHUISの生地は、そんな生地なのです。

では、他のラインナップに並ぶ「シャトルコーデュロイ」や「綿ウールライプライタークロス」とはどんな性質を持つ生地なのか？

明日は、工夫と開発をこらす遠州の職人さんたちが生み出した、保温性と防風性を兼ね備えたハイブリッドな生地について、詳しくご紹介したいと思います。

ぜひご期待くださいね。

2021-10-29

遠州織物ならではのハイブリッドな生地
「綿ウールタイプライタークロス」と「シャトルコーデュロイ」





昨日から2日間にわたって、HUISの秋冬生地についてご紹介させていただいています。昨日の投稿では、天然素材から生まれる生地の【保温性】と【防風性】についてご紹介させていただきました。

暖かな空気を溜め込んでくれるウールを代表する【保温性】のある生地、と、風も通さないほどの高密度で織る【防風性】を備えた生地の機能について解説させていただきましたが、今日ご紹介させていただくのは、こうした【保温性】と【防風性】を併せ持つハイブリッドな生地。遠州の高い技術をもとに、工夫を凝らして開発された特徴ある生地です。

まずは一つ目の生地「シャトルコーデュロイ」からご紹介させていただきたいと思います。

遠州という産地の面白いところのひとつは、「春夏生地の産地」と「秋冬生地の産地」の２面性を持っている、という点だと思います。遠州織物というと「コットンの高級シャツ生地の産地」として知られていることはこれまでにもお伝えしてきましたが、こうした生地を織る機屋さんがあるのは、主に浜松市を中心とする地域です。

遠州はコットン素材を中心とした産地であることから、おのずと春夏製品に強みを持つ産地となります。これに対して、秋冬製品に強みを持つ代表的な産地は、愛知県一宮を中心とする「尾州織物」で、ウール素材を使った生地の世界的な産地となっています。このように、使う素材によって繊維産地には、強みと弱みのある時期があり季節性が生まれます。

こうした中で、遠州産地は秋冬シーズンの生地であるコーデュロイ素材の産地でもあることが、他の産地にはない特徴です。

コーデュロイが生産されているのは、同じ遠州地域の中でも天竜川以東の磐田市～掛川市の地域で、同じコットン素材を使いながらも、シャツ生地を主に生産する天竜川以西の浜松エリアとは異なる特色をもっているのが面白い点です。

コーデュロイ素材は、コットン生地の中で唯一保温性を持つ生地です。

ウールのような保温性を持つわけではないコットンをループ状に織り、これを加工して畝に変えることで、畝に暖かな空気を溜めることができる。コーデュロイは秋冬の暖かな素材として出荷できることから、コットン産地の弱みを補い、遠州産地として一年を通して需要のある生地を生産することができるのです。







世界でも最後に残る「高級コーデュロイの産地」と言われる遠州、その中でもHUISの使用する「シャトルコーデュロイ」は、旧式のシャトル織機でゆっくりと織ることから、現代の高速織機で作られるコーデュロイにはない生地の膨らみや柔らかさが特徴です。

また、細い糸を高密度で織り上げることから、軽量で堅牢性も高く、防風性も備えます。保温性を生む畝と、防風性を備えた高密度のシャトルコーデュロイは、遠州の技術が生み出したハイブリッドな天然素材なのです。

そしてもう一つの生地が「綿ウールタイプライタークロス」。素材の内訳は「コットン90%・ウール10%」となっているユニークな生地です。

こちらの生地の秘密は、よこ糸に使われる「ウールコアヤーン」という特別な糸にあります。「ウールコアヤーン」という糸は、糸の中心にだけウール素材が入り、そのウールのまわりをコットンが包み込む、という形状の糸になっています。

ゆで卵を切った断面を、糸の断面としてイメージしていただくとわかりやすいかと思います。黄身の部分がウール、白身の部分がコットン、という状態です。

保温性を持つウールが糸の中心にあることで、着ている人の熱を適度に溜め込むことができ、着用していると次第に暖かさを感じることができます。

また、糸のまわりをコットンが覆っていることで、肌触りはコットンのやわらかな肌触りを味わうことができ、また、ウールの毛羽が外殻に現れないため洗濯をしても縮むことがなく、お手入れも楽ちんです。

さらに、春夏の超高密度生地・タイプライタークロスと同等の密度を打ち込むことで、防風性も備えることから、ウールとコットンのいいとこ取りと言える生地です。

こちらの綿ウールタイプライタークロスは、ウールコアヤーンを開発した紡績会社さんの技術にもぜひ注目したい点です。

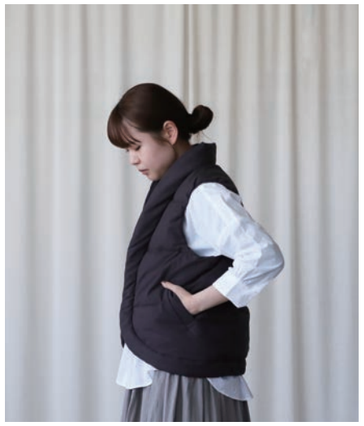
「シャトルコーデュロイ」と「綿ウールタイプライタークロス」は、HUISで定番となっている生地ですが、それぞれの生地の特徴を感じていただきながら着用いただくことで、一層愛着を持って味わっていただけると思います。

日本の誇る、至高の織布技術が生み出す機能的な生地を、ぜひお楽しみくださいね。



2021-11-09

ダウンプルーフコットンダウンジャケットをリリースしました!







たくさんのお問い合わせをいただいておりました、今期の最後のアウター【ダウンジャケット】&【ダウンベスト】をオンラインストアにUPしました。

ダウンシリーズはこちらの２型のみ、カラーもこちらのダークグレー一色となります。本日紹介するのは【ダウンジャケット】です。

世の中にダウン製品と言われるものはたくさん流通していますが、その中で、化学繊維のナイロンやポリエステルではない生地で作られたダウン製品を見たことはあまりないと思います。

その理由は、ダウンの羽はどんな小さな穴からも出てしまう性質を持つからです。細く強い糸で織られたポリエステルやナイロンなどをコーティングすることで、はじめてダウンをしっかりと包み込むことができるのです。

ダウンの常識を覆すと言われる「ダウンプルーフコットン」のすごさは、天然素材であるコットン100％の生地を使って、こうしたダウンを完全に包み込むことができることにあります。

細い糸を使い、通常では考えられないほどの超高密度で織り上げることで、あたたかなダウンの羽をしっかりと包み込みます。遠州織物の職人技術を基に、途方もない時間をかけることではじめてできる生地です。

そんな天然素材100％でつくられたHUISの「ダウンプルーフコットンダウンジャケット」は、なんとそのまま水洗いすることができます。純粋なコットン生地のため、水が通って中のダウンもまるごと洗うことができ、洗濯後は自然に水分を蒸発させてくれます。

こうした特徴は、着用した時の快適さにそのままつながることがよくわかると思います。

石油を原料に作られる化繊生地は大量生産に向きますが、一般的には蒸れやすいものが多いのが特徴です。

一方、植物由来のコットンは、汗や水分を吸いやすく、あたたかみのあるやさしい肌触りが特徴です。“呼吸できる生地”でダウンを直接包むからこそ、初めて生まれる特別なダウンなのです。



デザインは、ゆったりとした身幅をとり、たっぷりと生地とダウンを使ったシンプルなダウンジャケットです。身体全体を優しく包み込み、一度着たら離れられなくなるほどの快適な暖かさと軽さを持ちます。

なお、ダウン素材にもポーランド製の最高級ホワイトグースダウンを用い、一点一点にロットNoが付与された証明書が付属しています。その暖かさは、まるで羽毛ふとんに包まれているよう。細い糸で織ったしなやかな生地のため、重ね着にも負担がなく、真冬を通して重宝していただけます。

2022-03-20

HUISのお洋服のお手入れについて





もうすぐ立春。日がのびて、あたたかな光が降り注ぐようになり、季節の変わり目を感じるようになりました。

冬の間、私たちの身体を守り、温めてくれた大切なお洋服のお手入れについて考え始めている方もいらっしゃると思います。

HUISの生地は、お手入れの容易さも特徴です。どれだけ着心地の良い服も、着るたびにドライクリーニングが必要な服だとしたら、それは日常着としてはなかなか使いづらいものです。

生地が持つ自然なシワ感は、素材本来の風合いであることから、お洗濯を続けても変わらない着心地の良さを楽しんでいただけます。また、高い耐久性を持つことから、お洗濯を繰り返しながら長く愛用していただくことができます。

インスタライブなどでも、お手入れ方法やお洗濯の仕方について、コメントをたくさんいただきます。ずっと着たい大切なお洋服だからこそ、ご自宅で、ご自身でお手入れしたいというお気持ちを多くの方がもっていらっしゃるのだと思います。

よりいっそう愛着を感じていただける、そんなお手入れ方法について、今日は紹介させていただきます。

まず、全ての生地、お洋服に共通している、[洗う、脱水する、伸ばす、干す]について順番にご説明します。

[洗う]

毎日のお洗濯の際に、他の衣類と一緒に洗濯機に入れてお洗濯していただけます。

おすすめは、オシャレ着洗い用の中性洗剤を使い、ネットに入れていただいて、【手洗いコース】や【ドライコース】などで洗っていただくと、お洋服にとって、とてもやさしいです。

近年の洗濯機は節水機能が充実しているので、水量を洗濯機が自動で判断して少ないお水で洗ってくれることも多いようですが、たっぷりのお水で洗っていただきますと、汚れ落ちもよく、生地の風合いもより感じていただけます。

[脱水する、伸ばす]

シワの原因は、主に脱水によるものです。脱水は短時間で、脱水後すぐに取り出してお洋服を広げていただきますと、強いシワが残りにくくなります。

一般的なお洋服と比べ、シャトル織機で織られたHUISの生地はシワが残りにくく、伸びやすい性質を持っています。干す前に、お洋服を広げて手のひらでシワを伸ばしてから干しますと、自然な風合い、いい具合のシワ感でお洋服が乾きます。

[干す]

HUISの生地に限らず、お洋服の生地は直射日光が苦手です。紫外線にあたると少なからず繊維にダメージがあり、少しずつ色が褪せてしまうことがあります。人間の肌と同じですね。

裏返して干す、または陰干しすることをおすすめしています。

もし乾燥後もシワが気になるようでしたら、ハンガーなどにかけたまま、アイロンのスチームをあててみてください。

次に、コーデュロイとウォッシャブルウールなど特徴ある生地のお洗濯方法をご紹介します。

・コーデュロイ

コーデュロイはシャツ生地のお洋服のように頻繁に洗う必要はありませんが、他のものと一緒に洗うときにはネットに入れてのお洗濯がおすすめです。コーデュロイは裏返して洗う、という方もおられますが、畝(うね)が擦り合うのを避けるため、裏返さずに洗った方が生地にやさしいです。お洗濯後はお洋服をよく伸ばして、手のひらで毛並みを整えていただきますと、よりきれいに仕上がります。

・ウォッシャブルウール

通常のウールと違い、水洗い洗濯ができるのがウォッシャブルウールですが、洗濯機でのお洗濯の場合は、お洋服をネットに入れて単独洗いをおすすめしています。

また、中性洗剤をご使用いただき、脱水の設定を弱く、時間は短めにしてください。柔軟剤が苦手でない方は、毛が絡まりにくい作用のある柔軟剤を入れていただくのもおすすめです。

お洗濯後はお洋服をよく伸ばして、手のひらで形を整えて干していただきますと、きれいに仕上がります。なお、ウールは汗や汚れを弾く性質があるため、頻繁に洗う必要はありません。

HUISの生地である遠州織物は「育つ生地」と言われています。

季節を経て、お洗濯を重ねていただくことで、お客様それぞれのお洋服へと育っていきます。

コーディネートを楽しんでいただくように、生地との対話、お洗濯をお楽しみください。



2021-12-31

2021年もありがとうございました

2021年も、あとわずかとなりました。

今年もさまざまなことがあった1年間ですが、少しだけ振り返りをしてみたいと思います。

2021年は、あらたなレーベル【HUIS in house】のリリースからスタートした年となりました。

世界的にも希少な糸「SUVIN COTTON」を使い、和歌山で編まれた特別なカットソー生地を使わせていただくことができた【HUIS in house】のシリーズは、そのとろけるような肌触りをたくさんのお客さまに実感していただくことができました。

また、同じSUVIN糸を使った織生地・スヴィンオックスフォードなどもとても好評いただきました。いずれも、「SUVIN COTTON」の素晴らしさを、お客さまみなさまに実感いただけたからこそだと思います。

本当に良いものは、しっかりと届く。そうあらためて感じることのできた新しいスタートとなりました。

また、3月には横浜ショールームを無事OPENすることができました。首都圏にお住まいの方からはアクセスもしやすいことから、現在では旗艦店としてありがたいことに毎日たくさんの方に足をお運びいただいています。

そして、今年も数多くのイベント出展をさせていただきました。新しく出展させていただいたショップさん、百貨店さんとの新たなご縁、そして新たなお客さまとの出会いをいただくことができました。

一方、生産現場に目を向けると、前述の「SUVIN COTTON」は現在世界的に価格が高騰していることから当面糸の手配の見込みがなく、継続的な生産が難しくなってしまいました。

2022年春シーズンに向けてはなんとか原料の手配が間に合ったことから、【カットソーシリーズ】は幾分か展開できる見込みで予定をしておりますが、以降については不透明な状況となっています。

スヴィンだけでなく、HUISで使用している生地は、ギザコットンやスーピマコットンなどいずれも超長綿と言われる高級糸を使用しています。ですが、そのいずれの糸も現在、高騰が続き、今までのように手に入れることができない状況に直面しています。このことは、私たちが簡単に解消できる問題ではありません。

コロナ禍における原料供給不足も原因の一つにありますが、根本的な原因としては、地球の気候変動による生産量の減少や、アパレル製品の低価格化による需要不足などがあげられています。



また、HUISの商品は徹底した品質を求めて、染色や縫製も日本国内ですべて行っていますが、国内のこうした事業者さんの多くも、苦しい状況に立たされています。

「年内で事業を閉めることにした」

そう発表された紡績会社さん、機屋さん、縫製工場さんなどの話を、今月に入ってからもいくつかお聞きました。不採算性、後継者不足など、いずれの産地もさまざまな課題を抱えています。

良い糸が今までのように手に入らない、技術ある職人が廃業してしまう、生産現場では今そんな状況が進んでいます。本当に良いものづくりを維持することが、難しくなってきています。

HUISをはじめて7年間のうちに、こうした状況はどんどんと加速してきました。

でも、おそらく、もっと前からそうだったのだと思います。きっと20年、30年前は、価値のあるものがもっともっと身近にあったのだと思います。

アパレル業界における多くの企業は、こうして年々原料が高価になり生産コストが高まる中で、商品価格を維持するために、例えば、使う素材を安価なものに置き換えることで対応してきたのだと思います。価格改定には大きな経営判断が必要となります。販売現場での反発も伴います。できる限りそれを避けること。生産に携わる立場として、それは企業努力でもあると思います。

ですが、HUISはこれからも品質を維持することを最優先にブランドを続けていきたいと考えています。

それは、私たちが、この素材とこの生地のことが大好きだから。そして、「遠州織物」という生地に寄せていただく大きな信頼が、HUISの価値だと考えているからです。

原料高騰の影響は決して小さくありません。これまでの価格でのブランド展開を維持することは難しい状況にありますし、それは今後ずっと続いていくであろう覚悟を今、持っています。

でも、価格を据え置くために素材を置き換えることより、価格の見直しをし続けることになっても、その理由をしっかりと伝え、理解していただくことで、この生地を使い続けたいと思っています。

希少になるからこそ、より愛着のある一着一着になる、そんな捉え方もできると思います。

衣服は私たちに楽しみ、喜びを与えてくれるもの。

2022年がまもなく明けます。

来年も、あっと驚くような、心が躍るような。そんな私たちの暮らしと心を彩ってくれる、たくさんの話題と新商品を、産地から楽しくお届けしていきたいと思っています。



2022-01-19

天然素材と、アパレルにおけるSDGsについて



昨年末の投稿では、アパレル生産現場の現状、さまざまな要因によってものづくりの維持が難しくなっている背景をお伝えさせていただきました。

HUISでは、遠州織物という産地の生地を使用し、昔ながらのシャトル織機で生産していることが特徴ですが、もう一つ、生地にコットンやウールなど天然素材を使っている、ということも大きな特徴です。

天然素材だからこそ生まれる風合い、着心地、機能性があり、HUISがこだわりを持っている部分でもありますが、実は天然素材はいずれも特に年々、原料が手に入りづらくなっています。

ファストファッションと言われる大手ブランドさんの製品をみても、ポリエステルやポリエステル混製品の割合が近年多くなってきたと感じている方も多いのではないでしょうか？

実際、HUISをスタートした頃にはシルクを使ったシーズンもありましたが、今はシルク糸の価格高騰から生産が難しい生地になってしまいました。フォロワーの皆さまの中にはご存知の方も多いかと思いますが、近年はウールについても生産が難しくなってしまっています。

今日は、そんな天然素材の話題をもとに少しお伝えできればと思います。

2021年は「SDGs」という言葉の露出が一気に増えた年ではなかったかと思います。

特にテレビや新聞など報道メディアでは積極的に「SDGs」というワードが使われ、見慣れない言葉ながらも少しずつですが身近に感じるようになってきました。

SDGs＝「Sustainable Development Goals」は、“持続可能な開発目標”の略称ですが、この「持続可能性」について、アパレルは特に早く取り組まれていた業界だと思います。

アパレル業界を牽引する世界的なハイブランドが毎シーズン発表するコレクションにおいて、ショーのコンセプトに持続可能性が考慮されているか否かは各ブランドの評価を大きく左右するもので、いずれのブランドも素材選定には生産背景も強く意識されてきました。近年では「サスティナブルファッション」という言葉もキーワードになっています。





こうして早い時期から意識的な取組がなされてきたのは、アパレルにおける大量生産・大量廃棄が大きな社会問題とされてきた背景もあると思います。

日本国内においても、現在アパレル業界において年間で廃棄される衣類の量は100万トンに及ぶとされています。商品点数に換算すると、国内で年間消費されている衣服はおよそ13億点なのに対し、供給されている衣服は27億点近く。つまり、売れ残る余剰在庫が14億点にのぼると言われています。人口約1億人と考えれば、一人当たり14着分の衣服が新品のまま毎年廃棄されている計算です。

安く・大量に生産することが急速に進んできたアパレル業界では、貴重な原料を使用して、こうしたサイクルが続いてきました。

特に天然素材は、いずれも時間をかけて育てられた原料が元になります。

HUISが主に使っているコットンも、原料は農産物です。農家さんが種をまき、手間をかけて育てた綿花から採取できる原料。ウールも畜産農家さんが羊を育て、その毛を刈ることで得られる原料です。

必要な量を採取し、また育てることで持続可能（サスティナブル）な原料ですが、“人の手”と“時間”が必要な資源です。

現在、世界で生産されるアパレル製品の割合は、ポリエステル50%、コットン30%、ウールは1%と言われています。コットンやウール製品の割合はここまで減少しています。そして今後、天然素材の占める割合はもっともっと少なくなっていくでしょう。

もうひとつ、HUISの生地を生産している旧式の「シャトル織機」は、複雑な近代織機と比べて単純な機構のため、必要な部品さえ手に入れば使い続けることができる。手入れをすることで使い続けることができるサスティナブルな機械とも言えます。

そのかわり必要なのは「技術」、人の手が必要な機械です。生まれる生地は、生き物のような生地。近代のコンピューター制御による生地と比べて必ずしも均一ではありませんが、それを補ってあまりある味わいのある生地です。

天然素材にこだわること、シャトル織機にこだわることは、難しい道だと思います。価格の値上げも避けられない現実があります。でも、今の時代の中で、必要な道だと私たちは思っています。

「SDGs」という言葉は、少し難しく感じてしまいます。

でも、まずは自分たちの着るものにどんな素材が使われているのか、どんな人の手が関わって作られているのか、をイメージしていただくだけで十分だと思います。

きちんとものづくりの背景の見えるものには、愛着をもつことができます。作り手に対して敬意を持つこと、そうしたものを身につけることに誇りを持つこともできます。できるだけそういうものを選択することが、きっと持続可能な世界につながっていきます。

HUISの生地を織ってくれている機屋さんでは、幸い若い職人さんも育ってきています。

日本国内には、まだまだ歴史ある繊維産地があります。それが、日本の強みだと思います。

産業を守る、というほど大きな仕事ではありませんが、自分たちの関わらせてもらっている素晴らしい技術、価値あるものが、これから先もあり続けてくれるように、私たちも頑張っていきたいと考えています。



2022-05-13

ニューヨーク州ファッション工科大学
藤島奈央さんのこと









昨年、HUISの製品生産過程で生まれる遠州織物の“端切れ”を提供させていただいたニューヨーク留学中の学生・藤島さんの卒業制作が先日発表されました

ニューヨーク州ファッション工科大学で学ばれていた藤島さんは、地元・浜松市の出身です。

アパレルのさまざまな現状を学ぶ中で、世界的なファストファッションの問題点から、生産や労働におけるサスティナビリティの重要性を再認識するようになったそうです。

そんな中で以前より、HUISの活動に共感いただいていたそうで、昨年、卒業制作への協力についてご連絡をいただき、縫製工場で生まれる製品生産後の端切れ生地を提供させていただきました。

藤島さんは中学生の頃から遠州織物に興味があり、「遠州織物」をテーマに自由研究にも取り組んだことがあったそうです。お声かけいただいた際には、HUISの”ブランド哲学”への共感を真摯に話してくれました。

衣服の意匠・デザインや機能性といったことだけではなく、伝統的な地域産業の維持や、その生産現場の持続的な発展への取り組みを感じていただけていることが私たちはすごく嬉しかったです。

HUISの製品を作ってくれているのは遠州の機織り職人だけではありません。日本各地の紡績会社さんや縫製工場の縫い子さんたちなど、たくさんの人の手がかかっています。そして、そうした仕事の多くは、それぞれの地域に根付いた産業になっています。

売り場に並ぶ商品そのものを通してそうした背景を感じることは、現実的には少し難しいものだと思います。

売り場と生産現場が特に遠いのがアパレルの構造的な特徴です。ややもすると、機械が自動的に生み出しているように感じてしまうこともあるでしょう。でも、すべての衣服は、たくさんの地域で、それぞれの家族や生活を持ったみなさんの仕事の連なりでできています。それは国内も海外も変わりません。

HUISのブランド活動を通して、若い世代の方にこうしたことを感じていただけるのはとても嬉しいことです。

コロナ・紛争などを通して、世界的なアパレルの情勢もまた大きく変化しています。日本の誇るべき産業の価値がきちんと伝わり、これからの時代にも変わらず続くように。

卒業制作の完成発表会では「遠州織物」やHUISのことも紹介していただいたそうです。同郷の若い世代の方が、世界に向けて「遠州織物」を発信してくださることをとても頼もしく思います。

コロナ禍の中での学生生活や卒業制作、大変だったと思います。藤島さんのこれからのご活躍を応援しています。



2022-03-17

【シャトルリネン】の価格に感じていただく違和感、その本質的な理由





今期の新しい生地、リネン100%の【シャトルリネン】をリリースしました。

初回リリースしたスカートパンツはおかげさまですぐに完売となってしまいましたが、その他のアイテムも今期いくつかリリースを予定しています。

他の生地と同様多くは織れない生地で生産量は限られていますが、ぜひご期待くださいね。

今回、こちらの【シャトルリネン】をリリースした際に、「リネン100%なのに価格がとても安い」というお声をたくさんいただきました。

これまでのコットンを中心としたアイテムと同じ価格帯であることに、ちょっとした違和感を感じていただいた方も多いようです。

こうした率直な感想は、リネン以外のHUISの生地品質や、HUISの価格の特別さを改めてお伝えするのに分かりやすいきっかけになると思い、今回はそのご説明を少し掘り下げてさせていただきたいと思います。

【シャトルリネン】は他の生地と同様、旧式のシャトル織機により長い時間をかけて遠州の職人さんが織る生地です。

糸に遊びを持たせてゆっくりと織り上げていくことで、立体感のある特別な風合いや柔らかさ・耐久性を持ち、使い込むほどにより柔らかく風合いが増していきます。

みなさんの身の回りのお店でリネン100%の生地の洋服をみることはあると思いますが、シャトル織機で織られたリネン生地はほとんど存在しません。海外の高級ブランドなど、限られた商品にしか使われていない生地だからです。

HUISではこの【シャトルリネン】を使った505スカートパンツを、他のコットン生地と同じ19,800+taxという価格で展開しています。

HUIS商品の価格には、いわゆる“ブランド料”というものを載せていません。単純な原価からの積算で、できる限り上代を下げられるよう価格設定をしています。

その上で「一般的に価格が高いと思われているリネン100%の生地」と、「他のコットン生地」とが同じ価格帯になる、ということは、裏を返せばいかにHUISのコットン生地が高価な生地なのか、ということが分かりやすいかと思います。

そして同時に、世の中に安価なコットン生地がどれほどあふれているのか、ということもイメージできるかと思います。

生地の品質は、主に「①原料となる糸の品質」と「②織る織機（しょっき）」の2つの要素で決まります。

①高品質な糸ほど生産できる地域が限られ、生育に時間と手間がかかることから、原価は高くなりますが、繊維長が細く長いため、ツヤがあり丈夫な糸ができます。

②古い織機ほど現存する数が限られていて、技術を持った職人しか扱うことができず、また大変な時間と手間がかかることから、原価は高くなりますが、他にはない風合いや着心地・耐久性など様々な機能をもちます。

こうした品質と価格の相関関係はとても分かりやすく、人の手を介して作られるものだからこそ、効率化とともに失われるものがある、という分かりやすい世界なのだと思います。

HUISの生地はこの2つの要素に一切の妥協をしません。スビン・スーピマ・ギザなど最高品質の糸を使いながら、最も古い織機「シャトル織機」で織ることで、他にはない最高品質の生地が生まれる、ということをこれまでもご紹介してきました。

裏を返せば、安価な原料の糸を使い、超高速型の織機を使うことで、安価な生地を大量に生産することができます。残念ながら、現在私たちの身の回りにある衣服はこうしたものが多くを占めている、ということもイメージしやすいと思います。

ここで、一般的にリネン100%の服は高いものが多い、という理由についてもご説明させていただきたいと思います。

様々な品種があり品質差の幅が大きいコットンと違い、リネンは品種が少なく品質差が小さいため、コットンのように大きく価格を抑えたリネン原料がないため、安価な生地を作ろうとしても①の部分で限界がある、ということです。

できるだけ安価なリネン糸を使い、高速型の織機で織ったとしても、生地価格を一定以下にすることができないため、リネン100%の衣服の多くは価格が高めの商品になってしまうのです。スカートが3～4万円、ワンピースが5～6万円といったことも多いでしょう。(やはりそれだけ天然素材は高いということもご理解いただけると思います)

HUISの【シャトルリネン】は、そうした一般的に流通するリネン素材とは一線を画す生地です。

フランス・ノルマンディー地方で生産されたリネンを原料とし、ネップ（節）やムラの少ない高品質のリネン糸を使うとともに、１日稼働し続けてもわずかしか織り上がらない「シャトル織機」を使い、遠州の職人が毎日欠かさず目を張って織り続けることで、やっとできあがる希少な生地です。

こうした生地を使ったスカートパンツを19,800円という価格で展開できるのは、生地の直接仕入れやBtoC直販といった、HUISが安価に商品展開をできる4つの特別な理由があるからです。

詳細については以前解説させていただいた記事↓をあらためてぜひご覧ください。

■“HUISの価格の秘密について”
https://1-huis.com/all/10673

そして、この【シャトルリネン】で感じていただいた価格の違和感を通して、リネン以外のHUISの生地、遠州織物という生地がいかに特別な生地か、ということも感じていただければと思います。

2022SSもたくさんの新たなアイテムを展開していきます。ぜひご期待くださいね。

2022-05-30

シャトル織機で織る、「本物」のタイプライタークロス



2022年の春夏物も多くのアイテムが出揃ってきましたが、5月後半に入りやっとHUISの「タイプライタークロス」の生地のアイテムをリリースすることができました。

こちらのタイプライタークロスは特に、織り上がるまでに大変な時間がかかる生地のためどうしても生産量に限りがあり、安定供給が難しい生地でもあります。

みなさんがセレクトショップなどに訪れると、この「タイプライタークロス」という名称のついた生地の洋服をご覧になることがあるかもしれません。しかし、よく見るこうした現代の高速型織機で織られる一般的なタイプライタークロスと、HUISの使用するタイプライタークロスは、全く異なる生地です。

旧式のシャトル織機で織る「“本物”のタイプライタークロス」がいかに特別な生地か、今回はじっくりとお伝えしたいと思います。

「タイプライター」は文字を印字する機械ですが、これに使用する紙のように薄く、目の詰まった織物であることが名称の由来と言われます。または、タイプライターの印字リボンに使用されていた、との説もあります。

いずれも、薄手で丈夫な超高密度生地であることから、まるで紙のような質感と表現される生地がタイプライタークロスです。

規格としては細い番手の糸を高密度に織った生地で、その密度から独特なハリ感が生まれます。

現代の織機で織ったタイプライター生地は、糸のテンションを強く張った状態で超高速に織り上げるため、短時間で多くの生地を織ることができますが、どうしてもハリ感とともに堅さのある生地となり、“着心地の良さ”からは遠ざかってしまいます。

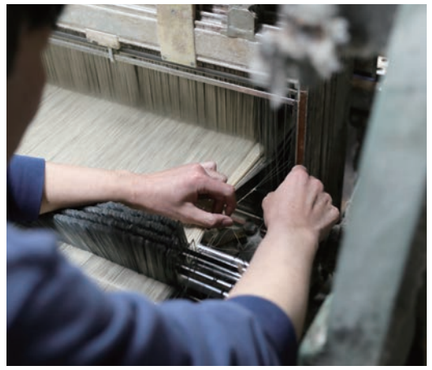
一方、HUISのタイプライタークロスを実際に触れた時、このハリ感とともに「しなやかさ」「柔らかさ」といった、通常ハリ感とは相反する不思議な質感を感じることができると思います。これは、旧式のシャトル織機で織ることで、はじめて生まれる不思議で特別な感触です。

織物はタテ糸を上下に開き、その間にヨコ糸を通して織ります。

シャトル織機で織るHUISの生地は、上糸（上側の糸）を限界まで緩めてゆっくりとシャトルを通し、ヨコ糸を包み込むように織っていきます。また、シャトル織機はその特性上タテ糸の開口が大きく、タテ糸が大きくくねらせながら生地を織り上げていくため、生地が立体的になり、ふっくらとした生地に織り上がります。

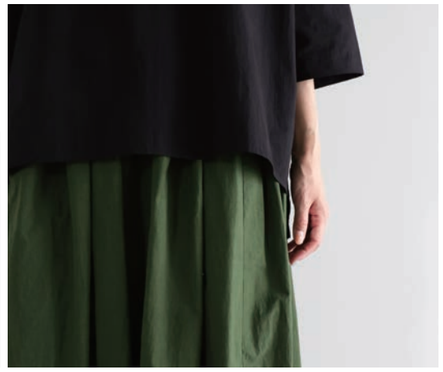
糸に遊びを持たせた状態で、かつ、ゆっくりと超高密度に織ることで、はじめてこうした特別な質感を持ったタイプライタークロスが生まれるのです。

シャトル織機は、様々な部品がネジで止まっているため細部まで微調整することができますが、その加減はマニュアル化できるものではなく、職人の感覚で微調整が重ねられます。









最高の生地が織り上がるか、そうでないかは背中合わせ。職人の技術がダイレクトに生地品質に反映される、難度の高い織機でもあるのです。

この織機のセッティングが完璧に決まってはじめて、現代の織機の限界と比べて、数段高い密度の織物を織ることができます。

貴重な旧式のシャトル織機と、それを扱う遠州の機織り職人の至高の技術が融合して、はじめてこの「“本物”のタイプライタークロス」が生まれるのです。

こうして織られたタイプライタークロスには、もうひとつ特別な特徴があります。

HUISのタイプライターの服を手に持ってもらった時に感じる“パリッ”とした「触感」の次に、“シャカシャカッ”という「音」をぜひ体感ください。

細番手の糸を、限界を超える超高密度で織り上げると、甲高い布ズレ音を発生させます。服を着て動くたびにシャカシャカという音を奏で、布を纏っている感覚が生まれます。

糸量と時間を贅沢に使った最高のタイプライタークロスだけが持つ、この特別な感覚をぜひ体感いただきたいと思います。

冒頭でもお伝えしたように「タイプライタークロス」という名称で世間に販売されている洋服の中に、このシャトル織機で織られた「“本物”のタイプライタークロス」は、現代ではほとんどなくなってしまいました。

そして残念ながら、その明確な違いを店頭で判別するのは、簡単ではなくなっています。

昔の良い生地に近づけるため、現代ではさまざまな加工の技術が発展しているため、店頭でその肌触りだけを比べても明確な違いを感じにくいのが実際のところです。

ですが、その違いは、洗濯をした後にはっきりと現れていきます。

水を通して洗いをかけていくと、生地の表面に施した加工は落ち、柔らかさは失われます。

一方、シャトル織機で糸に負担をかけず、ふっくらとやわらかく織った生地は、洗いをかけるほどに一層風合いが増していきます。

本当に良い生地は、水を通すと分かる、と言われるひとつの理由です。

現代では希少となったシャトル織機。

織り上がるまでには途方もない時間がかかる非効率的な織機のため、多くの製品を作ることができませんが、それだけ特別な生地が生まれます。

遠州の至高の技術が生み出す「“本物”のタイプライタークロス」の春夏アイテム。

ぜひ味わってみてくださいね。

2022-06-11　先日の札幌大丸さんでコラボした「PETTY」さんについて







先月は、札幌大丸さん1Fで初のPOPUPを開催させていただきましたが、こちらのイベントでは東京を拠点に活動されている「PETTY」さんとコラボの形で開催させていただきました。

主に女性の方へ向けたシンプルな衣服をユニセックス展開しているHUISに対し、男性を中心にターゲットとしたこだわりある個性的なデザインの衣服を展開しているのがPETTYさんです。

雰囲気は対照的。ですがものづくりの背景が非常に共通していることが、この２ブランドのおもしろさです。

PETTYデザイナーの板倉北斗さんは、HUISの使用する遠州織物をはじめとして、他のさまざまな産地で作られた貴重な生地を使用し、古着をルーツとしたヴィンテージやアンティーク服をモチーフにした創作活動を展開しています。

現代のアパレル業界において、「デザイナー」と呼ばれる職種の人が、生産現場を知ることはほとんどないと言われています。

デザインした衣服にどんな生地を使うのか？という場面において、商社さんが手配する生地見本帳（カタログ）から選ぶことが一般的です。

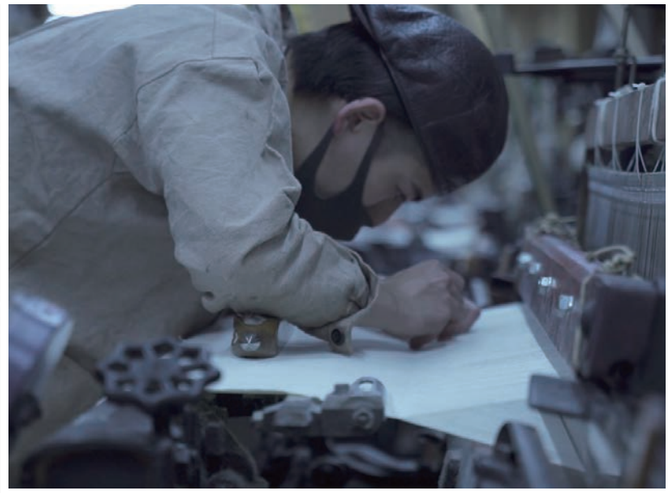
こうした見本帳に並ぶ生地の上では、どんな国で、どんな機械で、どんな人が織っているか、という情報は表示されることがなく、生地に対する表面的な情報のみを伴って流通することが通常です。

こうした中、PETTYのデザイナーである板倉さんは、年月をかけて国内のさまざまな産地に自ら足を運び、独学で各地の職人さんたちと対話と企画を重ねることを続けてきました。

また、2020年には自ら愛知県の機屋さんに住み込み、職人として機織りや織機の整備に携わられ、実体験を通して自らの知識をより深めています。

（その記録についてはnoteにまとめられていますので興味のある方はぜひご覧ください→https://bit.ly/3Ns51Op）









板倉さんのそうした姿勢や、深い知識に、私たちはいつも感銘を受けています。

それぞれの産地の強み、そこで生まれる生地の特性を、本当の意味で理解して衣服に落とし込むことのできるデザイナーは、どれほどいるでしょうか。私たちHUISは、遠州織物という産地に特化したブランド展開をさせていただいていますが、より広がりのある『日本の産地』というテーマを背景のひとつとして、PETTYさんはブランド展開をされています。

ブランドの持つ雰囲気、デザイン、生地背景、そして身につけていただけるお客さま。いろんな要素が複雑に組み合わさって生まれるのがアパレルブランドの面白さです。誇りある日本の職人の技術がそこにあることは、これからの時代における、無限の魅力につながります。

刺激をいただける素晴らしいブランドさんたちとともに、活動をさせていただけることが、私たちにとって何よりの楽しみです。

2022-06-28　『アナザージャパン』のスポンサーをさせていただくことになりました



合同展示会「大日本市」を通した定番商品の取扱いや、「渋谷スクランブルスクエア」にある中川政七商店・渋谷店さんでの常設取扱など、現在少しずつ連携させていただいている中川政七商店さんですが、このたびHUISでは、三菱地所さんと中川政七商店さんによる共同プロジェクト『アナザージャパン』のスポンサーをさせていただくことになりました。

『アナザージャパン』とは、全国各地から東京へ集まってきた学生さん18人が自らの地元をPRすべく、三菱地所さんが東京駅前で開発を進めている「TOKYO TORCH」において始動する、学生さんによる新しい“地域産品セレクトショップ” 事業です。

こちらの“地域産品セレクトショップ”の特徴は、仕入れや収益管理・店舗作り・プロモーション・接客・販売までのすべてを学生さんたちが自分たちで考えて手がけること。中川政七商店さんがサポートはするものの、店舗に社員さんは不在で、各都道府県出身の学生さんたちが地域産品を自らセレクトし、店舗運営を手がける新しい取組みです。

コンセプトは、“私たちがつくる、もうひとつの日本”

こちらの店舗は2022年8月に東京駅前の「TOKYO TORCH」内銭瓶町ビルディング1階に開業し、はじめの2ヶ月間は「アナザー・キュウシュウ」として九州・沖縄エリアにフォーカスした企画展を開催します。以降、2ヶ月毎に企画展のエリアが変わり、来年夏に日本全国を一周するという企画展です。

近年、「地域の魅力」や「地域資源」といった言葉がよく使われるようになり、ある意味、ありふれた言葉になってしまったようにも感じます。それは、若い世代の人たちにとってももしかしたら同じかもしれません。

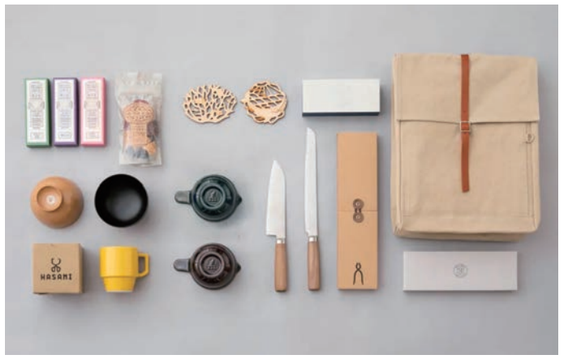
ですが、私たちはあらためて感じてほしいと思っています。国内さまざまな地域の地形や気候・立地などを基に、そこで活動を続けてきた人々の長い歴史が育んだ地域産品や技術、多種多様な日本のこうした資源は、世界的にみても素晴らしい価値をもったものです。

それぞれの地域に今存在する、一つ一つの素晴らしい価値あるモノやコトやヒトは、いずれも、私たち日本人にとって代え難い誇りになるものです。

オフライン/オンラインいずれにおいてもグローバル化が進むなかで、現役世代が携わる事業活動の幅は今後ますます広がっていくでしょう。こうした国際社会の中でこれから活躍していく若い世代の方々が、一つの経済事業を成立させるために、自分のたちで本気で考え、自ら足を運び、運営し、さまざまな体験を通して感じることは、日本の未来を豊かにする可能性の大きな一歩だと私たちは思います。









故郷の魅力を再発見し、それを伝える役割を担いながら、自分たちで試行錯誤する学生さんたちをぜひ応援したいと思い、HUISでは、このアナザージャパンのスポンサーをさせていただくことになりました。

なお、こちらのアナザージャパンの始動に伴い、クラウドファンディングもスタートしました。

■【クラウドファンディング】アナザー・ジャパン｜学生による本気の地域産品セレクトショップ経営！
https://readyfor.jp/projects/another-japan01

クラウドファンディングで支援して頂いた支援金は、学生さんの商品セレクト時に発生する出張費をはじめ、学生さんが店舗経営を担う上で必要となる活動費として大切に使われるそうです。

こうした素敵なご縁をいただけることを嬉しく思い、また自分たちの地域のいいところを知ってもらおうと、一生懸命活動する学生さんたちをこれからも応援していきたいと思います。

店舗のスタートは今年の夏、8月からです。東京駅前のアクセスしやすい立地となりますので、お近くのかたはぜひ、学生さんによる本気の地域産品セレクトショップ『アナザージャパン』にお立ち寄りくださいね。

■アナザージャパン
https://www.wantedly.com/companies/another_japan/about

HUIS. SHOWROOM

東京SHOWROOM
東京都千代田区丸の内2丁目4-1
丸の内ビルティング4F garage内

横浜SHOWROOM
神奈川県横浜市神奈川区金港町1-10
横浜ベイクォーター3F noni内

立川SHOWROOM
東京都立川市緑町3-1
GREEN SPRINGS E2-208 Rust内

豊橋SHOWROOM
愛知県豊橋市曙町南松原17 garage内

福岡SHOWROOM
福岡県福岡市西区姪浜3-11-5 COMBLE内

HUIS. journal vol.2

発行日　2022年8月（2022年11月改）
発行者　HUIS.
本書を無断複写・複製（電子化を含む）することは禁止致します。

We are still on a journey.

ハウスジャーナル
2023.10

HUIS. Journal



Vol.3

HUIS. Journal

HUIS webサイト（https://1-huis.com）ブログ記事より

一年を通して快適に着られる、調温機能を持つ麻素材と【シャトルリネン】 ……02

播州織産元／コスト上昇も値上げ難航／「モノ作りができなくなる」……04

2022年12月 東京駅前･丸ビルに【HUIS東京ショールーム】がOPEN ……05

多摩美術大学フリーペーパー「mA（エムエー）」第12号が発刊されました
HUISはスポンサーとして活動を支援させていただいています ……06

遠州織物発祥の聖地「初生衣神社（うぶぎぬじんじゃ）」を遺すための
クラウドファンディングがスタートしました ……07

驚きの保温性と着心地、HUISのウォッシャブルウールの秘密 …… 08

地元の静岡文化芸術大学にて臨時講義をさせていただきました…… 10

農産物と同じはずの「繊維産地」が、ほとんど知られない理由……12

【遠州×尾州】産地交流プログラムツアーが開催されました ……16

オーガニックコットン（H02）の特別さについて ……18

【HUISのくつした.】まもなくリリースです ……20

「久留女木の棚田」新プロジェクトがスタートします ……24

新プロジェクト「久留女木の棚田」のこと ……25

「久留女木の棚田×遠州織物プロジェクト」がもたらす意味……26

「久留女木の棚田×遠州織物プロジェクト」綿の種まきをしました ……27

東京・丸の内ビルディングでトークイベント
「あっこたんとHUIS松下さんのフダンギ談義」を開催いたしました ……28

遠州産地を盛り上げる、若手の繊維関係者が集まるプロジェクトチーム
「entrance」が新たにスタートします！ ……32

今週末7/1（土）・2（日）の2日間は、卸商団地のあつみ工房さんで
いよいよ遠州織物のセミオーダー会「entrance」を開催します！ ……33

「entrance」初イベントにたくさんの反響をいただきました ……34

古橋織布・濱田さんの門出……35

2022-09-25

一年を通して快適に着られる
調温機能を持つ麻素材と【シャトルリネン】











リネン100%の【シャトルリネン】の商品がまた新たにいくつか入荷してきました。

こちらの【シャトルリネン】は、旧式のシャトル織機により長い時間をかけて遠州の職人さんが織る生地で、みなさんが身の回りのお店で見るリネン100%の生地とは異なる生地です。

糸に遊びを持たせてゆっくりと織り上げていくことで、立体感のある特別な風合いや柔らかさを持ち、使い込むほどに柔らかく風合いが増していきます。

麻100%の服というと春夏シーズンのみの服と思われがちですが、実は麻（=リネン）は体と外気の緩衝をしてくれる調温機能に優れた素材で、四季のある日本で一年を通して快適に着ていただくことのできる天然素材です。

今回は、その麻素材の特性についてご紹介させていただきますね。

HUISの生地を生産する産地「遠州」は高級綿織物の産地として知られている地域ですが、麻（=リネン）織物の生産量もとても多く、旧式の織機で生まれる麻素材は、その品質から繊維・アパレル業界ではよく知られている産地です。「遠州織物」という言葉には、綿織物だけでなく麻織物も多くが含まれています。

現代において、天然素材の衣服の中で最もポピュラーな「綿」は、もともと日本古代からあった作物ではありません。綿栽培や綿織物が、一般的に広がったのは江戸時代以降で、それまでは麻織物が日本人にとって身近な衣服でした。

この麻素材の大きな特徴は、空気を多く含み、余分な湿気を蒸散してくれることです。その特徴が生まれる理由は、麻繊維の構造にあります。

麻は繊維の中心に大きな空洞があり、また繊維表面にもたくさんのひび割れや小さな空洞がある「多孔構造」になっています。この繊維の空洞に、体から出た水分がすばやく吸収され、外気への蒸散が促されます。

麻が持つこの吸湿・速乾性が、汗をかく夏シーズンに快適に着用いただける理由ですが、多孔構造を持つ麻素材の特性はそれだけではありません。水分を蒸発した後の空洞は、体から出た空気をとどめて空気の層を作ることから、冬も暖かく、呼吸するように体感を調節してくれます。

外気との緩衝を担ってくれるこの空気の層が、麻素材が持つ調温機能の秘密。そのため、麻素材は一年を通して快適に過ごしていただくことができるのです。

日本の歴史を紐解くと、縄文時代の遺跡から麻の種・縄・編み物などが出土し、弥生時代には最古の麻の平織物（ヨコ糸20本、タテ糸18本/cm2）が出土しています。麻素材は、古代から中世に至る長い間、四季を通じて日本人の衣服の主役であったことが分かります。

日本各地の神社の神札（おふだ）のなかでも、伊勢神宮の神札は「神宮大麻」とよばれ、伊勢神宮の天照大御神（あまてらすおおみかみ）の力を宿す神札として、毎年お正月を迎える前に日本全国の神社と通して配られています。

また、天皇の代替わりに伴う皇室行事「大嘗祭（だいじょうさい）」では、麻織物がお供えされます。その織物に使う麻は、阿波国の由緒ある土地で厳格に管理された麻が用いられます。

こうしたことからも、私たち日本人にとって、麻はとても密接な素材であることがわかると思います。

夏だけしか味わえないと思っていた麻素材が、一年中着られる、という発見は、また新たな楽しみになるのではないでしょうか。

一般的にはごわつきがちな麻素材ですが、軽くしなやかなHUISの【シャトルリネン】は重ね着にも最適です。

遠州織物の技術で生まれる、特別な【シャトルリネン】をぜひたっぷりと味わってくださいね。

2022-10-10

播州織産元／コスト上昇も値上げ難航「モノ作りができなくなる」



先日、繊維・アパレル業界専門誌である「繊維ニュース」に播州産地（兵庫）の現状について一面で特集されていました。

生地作りに関するすべての原価が上がっているにも関わらず、アパレル製品や生地の値上げが進んでいない、という内容です。

播州に限らず、遠州、またその他の産地についても状況は同様です。以下、記事の内容を抜粋させていただきます。

・昨年から原糸、燃料、染色・加工薬剤、電気代といったコストの急上昇にさらされている。
・それ以降もウクライナ情勢の不安定化や円安の進展などでさらなる原価高騰が続いている。
・取引先へ交渉し値上げをお願いしているが、コストアップ分を満たす値上げは認めてもらえていない。
・生地の値段を上げれば、服の売値を上げることになる。これだけ原価が上がっていても売り場での売り手が値上げを嫌えば値上げが難しい。
・売り場において必要分のコストアップも認めないという姿勢は、国内のモノ作りをより危うくしてしまう。日本でものが作れる体制を維持するためにも丁寧に値上げの理解を広めていく必要がある。

コロナ禍以降、近年の生地生産に関する原料の高騰は“異常”とも言える状況が続いています。

ですが、売り場で見る衣服の価格に大きな値上げが見られないということは、必ずどこかに歪みが生まれている、ということをイメージしていただけるのではないかと思います。

その歪みは、歴史ある工場や職人の、倒産や事業閉鎖を生みます。HUISのまわりでも、これまでそうした経営判断をされる方をいくつも見てきました。

日本国内で、適切に、持続的に、良いもの作りが行える環境が閉ざされつつある、というのが今の日本の生地産地です。元々の後継者不足に加え、原価高騰が続く現状は、事業継続を断念する決定打になり得ます。常にギリギリの状態が続いています。

こうした現状を少しでも打破できるためには、多くの方に今の生産現場の状況と、売り場において衣服の値上げが不可避な状況を、理解してもらう努力が最も重要だと思っています。

多くのアパレル企業は、労力のかかるこうした情報の発信を避ける傾向にあります。それは、品質、あるいは、関わる誰かへの歪みに繋がってしまっています。

HUISでも可能な限り価格の維持に努めてきていますが、今後も、段階的に価格の見直しを行なっていきます。

ぜひ、そのことが、日本の適切な、持続的な、良いもの作りの維持につながっていることだとご理解いただければと思います。

現状を捉えた内容でも、業界専門誌での記事は、なかなか一般の方には伝わりにくいものです。今回、ご紹介させていただきました。

2022-11-06

2022年12月 東京駅前・丸ビルに【HUIS東京ショールーム】がOPEN







来月12月中旬、HUISの旗艦ショールームとなる新たなショールーム【HUIS東京ショールーム】が東京駅前「丸ビル」4FにOPENするグリーンショップ「garage TOKYO」さんの中でスタートします。

グリーンショップ「garage TOKYO」は、豊橋に本店を構えるgarageさんが新たにに出展されるショップです。

これまでもHUISは、豊橋garage本店、立川Rust、横浜noniさんの中にそれぞれショールームを展開させていただいていますが、東京の中心に作られる新たな拠点の中で、HUISへもお声掛けをいただき開設させていただけることになりました。

今回OPENとなる「丸ビル（丸の内ビルディング）」は東京駅のすぐ目の前で、HUISショールームの中でも最もアクセスがしやすい旗艦ショールームとなります。

東京駅前から皇居に向かう拓かれたロケーションや、歴史的な建造物の並ぶ丸の内の街並みは本当に気持ちが良く、訪れるたびにいつも清々しく感じるエリアです。

また、東京駅から地下直結の「丸ビル」は、旅行や出張などの際にもふらりとお立ち寄りいただきやすい場所です。

ありがたいことに、ウェブやSNSをきっかけに知っていただくことも多くなったHUISのアイテムを、実際に手にとってご覧になりたいというお客さまの声をたくさんいただくようになりました。

そんなみなさまへ実際にご覧いただける機会を作れるよう、現在もさまざまな地域でのイベント出展を続けてきていますが、garageさんのおかげで、こうしてまた新たな拠点を作らせていただけることは本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

ぜひご期待くださいね。



■丸の内ビルディング
https://www.marunouchi.com/building/marubiru
■garage
https://garage-garden.com
@garage_toyohashi

2022-11-23

多摩美術大学フリーペーパー「mA（エムエー）」第12号が発刊されました HUISはスポンサーとして活動を支援させていただいています







こちらの冊子「mA(エムエー)」は多摩美術大学テキスタイルデザイン専攻の有志の学生さんたちが毎年制作しているフリーペーパーです。

テキスタイルデザインとは、主に染物・織物のデザインを指しますが、現代ではインテリアデザインからウェブデザインまで幅広く関連する領域です。

学生さんたちのクリエイティブな視点から身の回りの様々なモノ・コトを実際に見て、聞いて、感じ、探ったことを外部に発信している冊子で、HUISではスポンサーとしてこうした活動を支援させていただいています。

今年発刊された第12号のテーマは「舞」。特別インタビューでは、イベントなどでもよくご一緒させていただいている「Maito Design Works」の小室真以人さんが特集されています。

こちらの冊子は、多摩美術大学を含む全国の大学や、渋谷ヒカリエ・青山spiralなどショップやギャラリーなどに設置されています。ファッションやインテリア、アート、デザインなどに興味がある方はぜひお手に取ってみてくださいね。

2022-11-11

遠州織物発祥の聖地「初生衣神社（うぶぎぬじんじゃ）」を遺すためのクラウドファンディングがスタートしました





今回ご紹介させていただくのは、浜松市北区三ヶ日町「初生衣神社」について。

遠州織物発祥の聖地として祀られ、毎年国内の繊維関係者が多く参拝する「初生衣神社」ですが、その“織殿”の維持が難しくなっていることから、その修繕を目的とするクラウドファンデイングがこのたびスタートしました。

HUISのウェブサイトにも詳しく紹介させていただいているこの初生衣神社について、あらためてご紹介させていただきますね。

現在、アパレルの高級生地産地として知られている「遠州織物」の産業発展の歴史としては、江戸時代中期以降に綿花を栽培する農家が自給自足で始めた手機による綿織物がはじまりです。

一方、織物文化の歴史としてこの初生衣神社が担ってきた神事の起源は平安時代まで遡り、ここ遠州は日本国内における繊維産地として大変由緒ある歴史を持った地域になります。初生衣神社の祭神は「天棚機姫命（あめのたなばたひめのみこと）」。日本では大変なじみの深い、七夕の織姫（おりひめ）様です。

遠州織物の発祥の聖地として崇敬されてきた「初生衣神社」は、800年以上前より、「伊勢神宮」へ神衣（かんみそ=天照大神（あまてらすおおみかみ）が天岩戸から出てきた時に着たと言われる衣）を納めるという神事を担ってきた、他社に類のない由緒ある古社です。 ここで以前神衣調達の職を預かってきた「神服部（かんはとり）家」は日本で唯一の苗字を持つ由緒ある家であり、一子相伝で800年以上に渡り初生衣神社の宮司を務められてきた歴史を持ちます。

この神衣を伊勢神宮へ奉献するという神事は、令和になった今もなお変わらずに行われ、毎年春に「おんぞ祭り」という名の大祭が行われています。

その神衣を作るのが浜松市指定有形民俗文化財となっている「織殿（おりどの）」で、ここにおさめられている織機は800年以上前に神衣を織っていた物と全く同じ形をしています。掲載させていただいている画像がそのものになります。これは、神様に対して常に同じ物を作り続けることが祭事である、という考えに基づき、織機も常に同じ形を伝承してきたからなのです。

江戸時代に建てられてから現在までその姿を保ってきたこの「織殿」ですが、近年では織殿自体が傾き、雨風の度に茅葺屋根の茅が抜け落ち、傷みが激しくなっています。耐震性能を調査したところ「建物全体が傾いているため5年以上持たない可能性がある」という結果が出ています。

由緒ある歴史を持つ初生衣神社ですが、崇敬神社のため氏子がいないことも大きな特徴です。これまで神社の立つ三ヶ日町の方々や遠州織物に関わる方々が初生衣神社を共に守ってきましたが、人口減少・織物業界の衰退が進み、建物の維持管理が難しい状況になっています。

そのため立ち上がったのが、織殿の修繕費を募るための今回のクラウドファンディングです。

今なお、国内ではさまざまな特徴ある高品質な生地が各産地で作られています。産地の規模はいずれも縮小を続けていますが、受け継がれてきた技術とともに、こうした素晴らしい産業の歴史を裏付ける文化的遺産が少しでも維持されていくことは、私たち日本人にとって大切なことだと思っています。HUISとしても可能な限りの支援をさせていただいています。

遠州織物の、そして日本の繊維産業にとっての聖地である初生衣神社が、これから先も変わらずに続いていくことを願っています。

今回のクラウドファンディングをきっかけに、こうした由緒ある神社が遠州にあることをぜひ知っていただき、身近に感じていただければ幸いです。

2022-12-01

驚きの保温性と着心地
HUISのウォッシャブルウールの秘密



今年も全国的にやっと気温が下がってきて、ウール素材が嬉しいシーズンが本格的にやってきました。

今期リリースしたHUISの【新ウォッシャブルウール】のラインナップも揃ってきましたが、このウォッシャブルウールがさらに活躍するのはこれからの冬シーズンです。

こんなに薄いのになんでこんなに暖かいの!?と驚かれることも多いこちらの生地。それこそが、ウール100%素材の持つ保温性です。今日はあらためて、HUISのウォッシャブルウールの良さをご紹介させていただきますね。

ご存知の通り、ウールは羊が寒さから身を守るための羊毛からできています。

羊毛が暖かいのは、羊毛繊維の縮れ（クリンプ）がたくさんの空気を含んでいることが理由です。他の繊維と違い、羊毛繊維はまっすぐではなく反り返りながら伸びる立体的な構造のため全体がちりちりと縮れます。

この縮れのおかげで羊毛は体積のうちに、なんと約60%もの空気を含んでいます。

店頭でもお客さまに「ウールは着ている人の熱をどんどん溜め込んでくれます。自分の体の周りを、暖かい空気が包み込んでいる状態になるから暖かいんですよ。」とご説明させていただいています。

これをより詳しく解説させていただくと、空気には熱伝導率が低い（熱を伝えにくい）性質があります。つまり、空気は一度暖まったらなかなか温度を逃がしません。

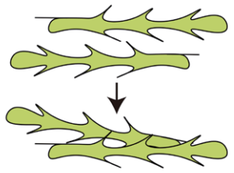
ですから、ウールを着ると自分の体温で身を包む空気が暖まり、暖まった熱を逃がしにくいのでずっと暖かいのです。ダウンジャケットの羽毛が暖かいのと同じで、素材そのものが暖かいというより、空気の暖かさが保温性の正体なのです。

こうしたウール素材の保温性を最も発揮することができるのは、アウターなどの中にウールを着た時です。暖かい空気を完全に閉じ込めることで、薄くてもウール100%の洋服は驚きの暖かさを体感していただけます。北海道のお客さまなどはこうしたウールの機能性を本当によくご存知で、中に着込めるウール素材のアイテムにとても敏感に反応していただけます。

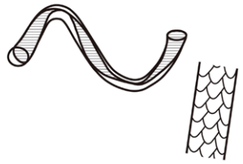
ただ一方で、ウール素材はどうしてもチクチクしたり、ごわついたりといったものも多いため、中に着込むと刺激があったり、肩が凝ってしまったりしがちです。また、毛玉になったり、お洗濯により縮んでしまう性質があるため管理に手間を要するのも敬遠される理由です。こうしたデメリットを解消しているのがHUISのウォッシャブルウールの特別さです。

まずは、なぜHUISのウォッシャブルウールは家庭で洗えるか、というご説明をさせていただきますね。











ウールが洗濯によって縮む原因になるのは、ウール繊維の表面にある細かなケバです。お洗濯によって繊維同士がこすれると、このケバが絡みあって生地が縮んでいくことになります。チクチクしたり毛玉ができるのも同じこのケバが原因です。

HUISのウォッシャブルウール糸は、これらの原因になる細かなケバをきれいに取り除く特別な処理をしています。そのため、お洗濯しても絡み合うことなく縮みが生じにくい生地となります。（洗濯機でお洗濯の際はネットに入れて単独洗いをお願いします）

そして、旧式のシャトル織機でゆっくりと時間をかけて織ることで、柔らかくしなやかな生地ができあがります。ウール糸はとても繊細なため、現代の高速型の織機でこうした生地を織ることは困難です。また、生地表面に凹凸感のある風合いは、ウールの保温性を一層高めてくれます。

こうした軽くしなやかな生地になることで、中に着込んでもストレスがなく快適にき続けられるシャツやブラウスができるのです。

そのほかにもウールの良さはまだまだあります。ウールは吸湿性・放湿性ともに優れていることから、発汗による湿気を吸収し、その水分はすぐに発散されます。羊毛の吸湿力は綿の約2倍、ポリエステルの約40倍ともいわれ、繊維の中でも群を抜いています。この優れた吸・放湿力により、ムレにくくサラリと快適に過ごすことができます。

登山家がウールを愛用するとよく言われますが、その理由は冬山で遭難した時、ウールの肌着は汗で濡れることなく、汗冷えしないからです。汗をかいてもきちんと汗を発散させ、体温を奪わずに調整してくれるので過酷な状況でも羊毛は快適なのです。

また、汚れにくさもウールの大きな特長です。羊毛繊維の表面にある膜は撥水性が高く、雨や水滴などを表面で弾きます。汗や汚れも繊維の中に入り込まないことのでお洗濯の頻度も少なくて大丈夫です。

ご存知の方も多いかと思いますが、例年大変人気の高かったHUISの【ウォッシャブルウール】の原料となる糸を生産されていた紡績会社さんが、一昨年、事業を閉鎖され、残念ながらこの年、HUISのウォッシャブルウール糸は二度と手に入らない糸となってしまいました。

ですが、HUISではこのウォッシャブルウールの糸自体を一から自社で企画・開発に取り組み、今年、本当の意味でHUISでしか作ることのできない新たなウォッシャブルウール生地を作ることができました。

ブラウス・プルオーバー・カーディガンなど、一年を通して重宝していただける様々なラインナップでご用意しています。

HUISの新ウォッシャブルウールをぜひたっぷりと味わってくださいね



2023-01-20

地元の静岡文化芸術大学にて臨時講義をさせていただきました

浜松駅からほど近い静岡文化芸術大学には文化政策学部とデザイン学部があり、人文系と芸術系を横断的に学ぶことができるとても特色のある公立大学です。

今回の講義は、デザイン学部デザイン学科の学生さんに向け、「遠州織物とブランディング」というテーマでお話をさせていただきました。

実は、地元・遠州に住む方にとっても、「遠州織物」という言葉はまだまだ馴染みが薄く、その本質的な価値を知っている方はほとんどいません。

これからを担う若い世代の方々にこそ、これほど素晴らしい地元の産業を知っていただきたいと私たちはいつも思っています。静岡文化芸術大学さんから、こうした機会をいただくことができ、感謝しています。

また、デザイン学科の学生さん向けということで地域資源のブランディングに関する話題から、起業という将来の可能性にもつながるような、HUISが今に至るまでの経緯なども含めて様々なお話をさせていただきました。

こちらでも度々お伝えしていますように、産地は、もう待ったなしの状態です。産地の灯火を次世代につなげられるかどうか。それは次世代を担う人々へ、どれだけ情報を届けられるか、伝えられるかにもかかっていると思っています。

技術を継承しこれから産地を担っていく方も必要です。また、そうした価値ある地域資源を、広く伝えられる方も求められる人材です。デザインはそれを手助けしてくれる大きなツールです。

ここで学ぶ学生さんの中には、地元で就職する方も、県外で就職する方もいるでしょう。遠州に関わらず、日本国内にあるさまざまな素晴らしい地域資源が、いっそう多くの方に伝わるような、そんなこれからの時代になればと考えています。

今回の講義「遠州織物とブランディング」には、たくさんの学生さんや関係者の方にご参加いただきました。地元新聞社さんにも取り上げていただき多く反響をいただけたことありがたく思っております。

90分という時間でしたが、学生さんたちみなさん熱心に聞いておられました。開催いただいた荒川先生からも関心の高さを伺っていたのですが、先日、学生さんたちからの感想アンケートをいただきました。

正直、私たちが思っていた以上にたくさんのことを感じ、考えてくれたことがよくわかる嬉しいお言葉ばかりで、今回ご紹介する他にも素晴らしい感想をたくさんいただきました。こうした声が、遠州産地を担う方々にとって、1番の力になると思っています。HUISをご覧いただけている繊維関係者の方々もたくさんおられることを伝え、学生さんたちからのご了承をいただきましたので、以下その一部をご紹介させていただきます。





——

『私の地元は兵庫県赤穂市で、織物といえば赤穂緞通と刷りこまれて育ってきました（過言です）。そのため他の知識があまりなく、今日初めて遠州織物を知りました。話を聞けば聞くほど面白かったのですが一番印象に残っているのは、「浜松の産業は全てつながっている」というお話です。初めて浜松に来た時も思ったのですが、浜松は本当に名産の数が桁違いで世界的に有名なものばかり。浜松特有の風土と人が創り上げたものなのだろうと思います。今日のお話を聞く中でますますそのように感じました。』

『以前までは、服は学生だし激安のネットショップでいいだろうと思っていたけど、最近あまりの安っぽさに少し質を気にするようになりました。そんな時にこのような特別な織り方をした上質な生地であったり、遠州はこうした生地の産地だという情報はとてもためになりました。「高いから良いわけではないよね」と話し合ったりすることもありますが、やはり高値のものは相応に質の良いもので、それこそ日本のすばらしい技術、大げさですが魂が宿っているんだと感じました。』

『世の中に流通している「MADE in JAPAN」と記載された服は、実際には他国の要素が入っているという事実、そして「HUIS」の商品は全て日本で作られている希少な商品であることに驚きました。

また地域発のブランドのお客さんへのアプローチとして、「地域のものを使う」だけでは人を集めることができない。一方で地域と繋がっているからこそのメリットなどを伝えることが重要だと学びました。こんなに手の込んだ製品にもかかわらず手頃な価格で提供できるのは地域ブランドのメリットであり、大量生産ができない希少性の高さを伝えることで、人を惹きつけることができるのだと思いました。』

『遠州織物は知っていたが、どういった魅力があるのか詳しいことは知らなかったので、今回色んなことが知れてよかった。トヨタやスズキが元々は織機から、車など作る大企業に発展したと知り、驚いた。シャトル織機で織られた布を実際に触ったとき全然違って驚いた。浜松の織機の技術にルイヴィトンなどのハイブランドが目をつけているというお話を聞いて、少し誇りに思った。』

『私は、シャトル織機というものを今日の講義で初めて知りました。

多くの人たちは効率を重視していった中で、シャトル織機の技術が残り、その価値を伝えていこうとする人たちがいることが素晴らしいと思いました。また三大織機のメーカーが浜松にあり、その織機技術があった故に自動車技術が成長していった、というお話が大変面白かったです。浜松にそのような優れた技術があったからこそ技術者が集まりものづくりのまちになったというのは今まで知らなかった歴史だったので、これからそのことを思い返せるようにしたいです。』

『浜松は自動車や楽器のイメージが強く、遠州織物も名前は知っているけれどそれほど意識したことはありませんでした。ですが、自動車や楽器は、織物や農業にもつながりがあって、浜松で織物がさかんだった理由がよく分かりました。

学生なので高い服はあまり買おうと思ってこなかったけれど、素材の良さを知ると値段の価値に納得できるし、欲しいなと思いました。ものをつくって売るときに、自分だけが良いと分かっているのではなく、買う側に分かりやすく伝え知ってもらうことで買ってもらえるのだなと思いました。』

『遠州織物のサンプルを触らせて頂いた際に本当に軽くて驚きました。

そしてその驚きは、松下さんが遠州織物の良さを知識のない私にも分かりやすく説明して下さり、その後に触れたからこそ驚きが増したと思います。奈良の靴下や岡山のデニムなど最終製品に近いものは認知されやすいが、遠州のような繊維産地は地元の人にすら認知されていないのはとてももったいないことです。浜松は多くの産業があるのにも関わらず分離していると聞いて、これも残念なことだと感じました。これから多くの産業が様々に組み合わさり浜松が発展していってくれたらいいな。今回のお話を聞いて、遠州織物、浜松の良さ、そして松下さんの大きな愛を感じました。この度は本当にありがとうございました。』

『これは私が普段から思っていることなのですが、良いものを良いと周囲に発信するのは想像以上に難しいことだと思います。HUISさんのように情報発信や様々な場所での出店、現地での説明など、色々な視点からアプローチしていくのは相応の熱量があるからこそだと思いました。』

嬉しいお言葉をありがとうございました。



2023-02-05

農産物と同じはずの「繊維産地」がほとんど知られない理由

2023年もスタートしてはや1ヶ月が過ぎ、2月を迎えました。

いよいよHUISの2023SS新商品も少しずつリリースがはじまっています。

昨年も1年間、さまざまな地域でのイベント開催を続けてきました。そうした場で新たにHUISや遠州織物のことを知ってくださった方、またウェブ上やSNS上で知ってくださった方もおられると思います。そうしたみなさんに向けて、今日はあらためてお伝えできればと思います。

ご存知の通り、HUISは「遠州織物」という生地を使ったブランドです。「遠州織物」は、遠州という歴史ある繊維産地で生まれる生地のことを指しますが、多くのお客さまにとって、アパレル・ファッションにおけるこの“産地”という言葉はあまり馴染みのなかったことではないかと思います。

そうした意味で、HUISのことを知ることが、服選びの楽しみ方が新たに広がるきっかけになった、というお声もいただくようになってきました。それは、私たちにとってもすごく嬉しいことです。

こうした“繊維産地”というものは、地域ごとの特色を活かし長い年月を経て技術が育まれてきたものです。そして日本国内の繊維産地は多くが、世界的に極めて価値の高い技術をもつ産地です。

本来、農産物や水産物とまったく同じように、産地の情報が価値の裏付けとなって流通するのが自然なことなはず。ですが、アパレル業界は、そのさまざまな要因の中で、産地というものの情報がこれまでお客さまに知られることがありませんでした。むしろ、“産地”という概念を新鮮に感じる方が多いのではないでしょうか。それほど、アパレルにおける生地の流通というものが、特殊性を帯びてきた歴史を感じています。

今回は私たちが考えるその理由を、HUISのことを少し振り返りながらお伝えできればと思います。まずは、私たちが住む遠州という産地についてあらためて。

遠州は、主に綿（コットン）生地の産地で、シャツ生地などの洋服の生地が作られています。単にシャツ生地、というわけではなく、限られた国内外のハイブランドなどが使ういわゆる“超高級生地”が作られています。高級生地に特化したアパレル向けの綿織物の産地、が遠州産地です。ちなみに、今は麻（リネン）織物も多く作られています。

では高級生地とはどんな生地でどんな特別さがあるのか?

細番手&高密度生地を作ることができるのが遠州の技術であり、特に織機の中で最も古い織機『旧式のシャトル織機』が、国内で最も多く残る産地です。

機織りの世界は、古い織機になればなるほど扱いは難しく、技術が必要になります。

一方、旧式の織機で低速に織れば織るほど、糸に遊びのある状態で柔らかく織り上げていくため、抜群の着心地と風合い、その他機能性が生まれます。

そして、糸は細番手になればなるほど、かつ、高密度になればなるほど、織るのは難しくなります。

つまり、旧式のシャトル織機を使い、細番手&高密度の生地を織るのが最も難しい生地なのです。この大変難しい規格の生地を、最高級の糸を使って織るのが遠州織物の特徴です。まさに綱渡りのような生地です。こうした技術があることから、織るのが難しい麻（リネン）織物も現在たくさん織られるようになりました。

ですが、BtoBに特化して流通する中間材であるところの「遠州織物」は、一般の方にほとんど知られることがありません。今は規模も急激に縮小し、特別な技術を持った機屋さんだけが残っている産地です。

実は、遠州に住む地元の人も「遠州織物」がどんな生地なのか、どれほど価値のある生地なのか、知っている方はほとんどいません。恥ずかしながら私たち自身も、HUISを通して産地の方々と関わる以前は、「遠州織物」の価値を知ることがありませんでした。

今の若い方だけでなく、ご年配と言われる世代の方まで知らないのです。そして、今にも消えて無くなってしまいそうな規模に縮小しています。過去には1000軒以上あった遠州の機屋さんは現在数十軒。2022年にも多くの機屋さんが廃業されました。おそらく、今、学校に通うような地域の子どもたちにも、このままでは知られることはなく産地自体が消滅してしまうでしょう。

そういう中で、遠州に残る貴重な織機、機織り職人さんたちの他にはない技術、そして遠州織物の価値を、洋服というものづくりを通してお伝えしているのが「産地発ブランド」としてのHUISの役割だと思っています。

HUISを立ち上げる以前のことを、少し振り返ってみます。

こうした遠州織物のことを知った当初、私たちは、他にもそういう良い生地を作っている地域や、あるいは国があるものだと思っていました。

お米だったら「魚沼産コシヒカリ」、牛肉なら「松阪牛」が有名ですが、他にもお米や肉牛を作っている地域は多くあり、それぞれにブランド化を図って一生懸命切磋琢磨しています。高級な綿織物といわれる遠州織物も、数ある産地のなかの一つではないか、というイメージが最初の感覚でした。

ただ、知っていくと、旧式の織機を使った高級糸の細番手高密度の生地を作る産地なんて、もう世界中どこにもない、唯一、遠州だけで、とんでもない技術を持った機屋さんたちがこの技術を閉ざさまいとがんばっている。でも、年々縮小し、今にも消えて無くなってしまいそうな産地なんだ、ということを知ります。

和牛は世界で評価されているのに、日本中、どこもブランド牛を育てなくなって、和牛というものを見ることはもうほとんどない。畜産業が残っている国内産地は松阪牛を作る松阪だけ、あとは安価な輸入牛肉しか流通していない。まるで、そんな感じなんだと理解するようになります。

そして同時に、繊維産地というものは、それほどまでに一般消費者に対して情報が伝わらないものなんだ、と思いました。松阪牛は松阪牛としてはっきりとブランド化されていて、消費者に認知されています。松阪に行けば間違いなくおいしい松阪牛のお店があるし、少なくとも、そこに住む地域の方々







はそのことを誇りに思っています。

こうした素材そのものが消費者に届けられる農産物と比べ、「生地」はとにかく生産者から消費者までの距離が遠い。

繊維業の特徴のひとつは、流通において、中間に関わる役割を持つ人が多い、ということです。

アパレルは、素材そのものの価値よりも、デザインや見せ方といったものが尊重される世界です。私たちは、それ自体はとても文化的で尊いことだと思います。だからファッションはこれほど魅力的で、人にとってとてつもなく大きな産業になっている大きな要素だと思います。

ただ、一方で、こうした部分での優先順位を持つ人をたくさん介することで、素材そのものの価値について、その情報はどんどんと薄まっていきます。どの国で、どの産地で作られた生地か、という情報すら、流通の途中で消えてなくなってしまうのです。だから、遠州に住む人すら、遠州織物のことを知らないのです。

そして、素材の価値の情報が薄くなるのであれば、それは効率良く生産できる安価なものにどんどんと置き換わっていくということが、実際、自然なことだと思います。

HUISを立ち上げ、しばらく経ってからの頃の話に移ります。

ブランドをスタートしてから、次第に地域内だけでなく、イベント出展などを機会に、地域外に展開が広がっていくようになります。

そこで知り合ったブランドさん、担当者さんやオーナーさんと交流する中で、他産地のことを少しずつ知っていきます。

最初にそういう“産地”をテーマにしたイベントに出させてもらったのが、名古屋タカシマヤでの『もんぺ博覧会』でした。これは、福岡・久留米絣をもんぺ（MONPE）にしてブランド展開されている「うなぎの寝床」さんが企画されていたイベントで、名古屋に程近い遠州のブランドとして呼んでいただいたのがきっかけでした。

久留米絣はもともと着物のブランド生地ですが、“日本のジーンズ=MONPE”というコピーで新たな価値を提案され、当時からうなぎの寝床さんは産地発ブランドとして有名でした。

その後、同じように産地をテーマとするイベントが少しずつ現れ始め、例えば、最高品質のウールコートを作るblanketさんと知り合い、愛知県一宮市が尾州織物といってウール生地のすごい産地だ、あざやかなショールを展開するtamaki niimeさんと出会い、兵庫県西脇市（播州）は遠州と並ぶ綿織物の産地なんだ、といったことを知っていきます。

他にも、主な繊維関係の国内産地をいくつかざっくりとご紹介させていただきます。

群馬・桐生 → シルクとジャガード織物
山梨・富士吉田 → シルク
北陸 → 化学繊維
新潟 → 横編みニット
静岡・浜松 → 綿・リネン（遠州織物）
静岡・磐田 → コーデュロイ（遠州織物）
愛知・一宮 → ウール（尾州織物）
愛知・三河&知多 → 綿（三河木綿・知多木綿）
滋賀 → 麻（近江上布）
三重・伊勢 → 綿（伊勢木綿）
和歌山 → 丸編みニット（メリヤス）
奈良 → 靴下
京都・西陣 → シルク（西陣織）
南大阪 → タオルや毛布（泉州織物）
兵庫・西脇 → 綿（播州織物）
岡山・児島 → デニム
愛媛・今治 → タオル（今治タオル）
福岡・久留米 → 久留米絣

和服生地を作る産地についてはまだまだ他にもありますが、アパレルに近い産地を列記しました。

こうした繊維産地のことを知るたびに、ああ、これは農産物と全く同じなんだ、と考えるようになります。

遠州の農業について、少し話題を広げます。

ここ遠州は農業が盛んな地域で、特に”国土の縮図”と表現されています。それは、日照量が豊富なほか、地域内に気候や地形・土質が異なるさまざまエリアがあり、多種多様な農産物が生産されていることが理由です。

農産物は、その土地の環境にあったものが特産品として育ちます。例えば、浜松の「みかん」が育つ地域は、山間地に近い地域で、大きな石が土の中にごろごろとあるような痩せた土地です。

おいしいみかんが育つためには糖度を高めるため豊富な日照量が必要になるとともに、根からの水の吸収をどれだけ防ぐことができるか、がポイントです。水はけが良い痩せた土地で日照量が豊富な地域だからこそ、おいしいみかんが採れ、ブランド力は高まり、みかん栽培の技術が歴史的に成熟しているのです。





一方、国内で長野に次ぐ大きなシェアを誇る浜松のセルリー（セロリ）が育つのは、天竜川西岸や浜名湖東側の地域で、ここは栄養分が豊富でふわふわの洪積埴壌土が広がっているため、栄養を必要とする西洋野菜がよく育ちます。

川や湖に隣接するこうした土地は、大昔は川だったことが多く、山から流れてきたたくさんの養分を土が含んでいるためです。

仮に痩せたゴロゴロ石の土地に持ってくると、セルリーはまともに育ちません。その地域ならではの強みを活かした特産物が生まれるわけです。

こうした地域ごとの農産物の産地化を、生産・流通・ブランド化の面で大きな役割を果たしてきたのが、各地域に根付く農協です。厳しい出荷基準を設け、それに足る生産技術や資材を農家さんに提供し、品質基準の保たれた生産物を産地としてブランド化し、流通にのせるのです。

農作物に洋服のようなデザインディレクションは不要です。流通において中間に関わる人たちが、常に○○産という情報とともに、素材そのものを流通させていきます。○○産という情報を、信頼性の根拠として。これは水産物についても同じことが言えます。

そうした情報のおかげで私たち日本人は味だけでなく、地域性も感じられるこんなにも豊かな食文化を享受することができています。

繊維業に話を戻すと、繊維産地の分布でよくわかるように太平洋に面した日照量の豊富な地域ではほとんどが綿織物の産地となっています。そのため、綿織物の産地は現在も農業がさかんな地域です。遠州織物の歴史も、綿花の一大産地となった江戸時代中期以降を発祥とするもので、農産物たる綿花栽培が繊維業の基礎にあります。

一方で、日照量の乏しい北陸地域は化学繊維の産地、群馬や山梨といった内陸部では、養蚕を基とする絹（シルク）織物の産地として残っています。

こうした特産物を見ていると、知られにくいと言われる繊維産地の中でも、一般消費者の方に比較的よく知られている産地というのは「今治のタオル」「奈良の靴下」「岡山のデニム」といったものではないかと思います。

その理由のひとつは、生産品が最終製品により近いものだからだと私たちは考えます。

素材そのものが最終製品に近いということは、デザインをするという役割が薄く、生産者から流通までに介する人が少ないということです。そのため比較的農産物に近く、結果、産地そのものがクローズアップされやすい傾向があるのだと思います。

その点、「旧式のシャトル織機で織った細番手高密度の生地」というまさに中間材である遠州のような生地の産地が知られづらいのは自然なことなのだと思います。

こうした中で、国内の繊維産地のことがきちんと知られ、技術を持つ職人さんたち生産を担う方々にスポットがあたるためには、流通の中間を担う立場の人や企業が、どれだけ産地の価値ある情報を発信していけるか、が鍵だと私たちは考えています。

HUISのような「産地発ブランド」は、生地を仕入れるための中間事業者をまったく介しません。また産地の中で、歴史、技術、生地の情報を得て、価値を知ることができます。これほど恵まれた環境はありません。

日本の国内には、多種多様、豊かな繊維産地が今なおあります。担っている人たちがいます。たくさんの人に知ってもらえることは、そこに住む地域の人の誇りになり、日本人にとっての誇りになります。

そして、それはファッションを楽しむ消費者のみなさんにとって、いかに幸せなことか。色や形など、外面的な情報だけでこれほど楽しめていたファッションの下には、無限に広がる日本の産地や技術という興味深い情報があるのです。さきほど話題にあった食文化と同じような世界が、その先にあるのです。

WEBやSNSが発展し、生の情報・本当の情報を知ることができるようになった現代で、「産地発ブランド」と言われるブランドがもっともっと出てくる未来を私たちは予想しています。そういう人や組織が、各地域に現れることを期待しています。そして、そうしたブランドさんたちと、切磋琢磨して交流する未来を楽しみにしています。

昨年お届けしてきた「生地のコト、産地のコト」シリーズのうち、2023年は、いよいよ「産地のコト」編をスタートします。ぜひそちらもご覧くださいね。

2023-02-16

遠州×尾州
産地交流プログラムツアーが開催されました



2/17-18の2日間、「遠州産地×尾州産地」のそれぞれの産地において繊維企業に関わる若い担い手たちによる産地交流プログラムツアーが開催されました。

国内の繊維業界はさまざまな環境の変化に巻き込まれとても厳しい状況に置かれています。さらに新型コロナウィルスの影響もあり、アパレル・繊維企業の倒産・廃業が相次ぐなど、危機的状況が続いており、ともに長年アパレル業界を支えてきた国内有数の生地産地である遠州・尾州いずれも大きな打撃を受けています。

HUISでは、遠州産地発のアパレルブランドとして、これまで「blanket」さん、「糸と色」さん、「尾州のカレント」さんなどとイベント開催や生地開発などさまざまなコラボをさせていただいてきました。

今回のプロジェクトは、ブランドの垣根を越え、産地同士のつながりとして、若い担い手のみなさんが行う交流事業です。

当日は、遠州から若手繊維関係者が尾州へお伺いし、「尾州のカレント」の皆さんと一緒に、糸商談会「ジャパン・ヤーン・フェア」、尾州産地の工場の視察、「新見本工場」さんの取り組みを見学するほか、ツアー参加者向けトークイベントやセミナーを開催いたしました。

トークイベントでは、（株）糸編・宮浦さんをモデレーターに、大阪牧方「ルポデミディ」オーナー宮地さん、「blanket」彦坂さん、「HUIS」松下の4者で【アパレルの現状と国内産地発ブランドの可能性】についてお話ししました。

トーク内容は、HUIS YouTubeチャンネルからご覧いただくことができます。

■アパレルの現状と、産地発ブランドの可能性
https://youtu.be/hGGd9G06IMM（前編）
https://youtu.be/m1fXzmD3owU（後編）

どちらの産地も大変厳しい状況下ではありますが、そうした中でも、それぞれの産地では若手メンバーが中心となり地域の産業を盛り上げようとさまざまな企画が行われています。

最盛期には1000軒以上あった機屋さんも今ではわずか数十件と縮小の一途をたどる遠州ですが、若い担い手さんがいることは大きな希望です。消えてしまったものを復活させることは難しいことですが、今あるものを大切に守り、遺すことで、職人さんたちの技術や想いは未来につながります。

この交流事業で生まれたいくつかの“種”を、しっかりと形にしていきます。





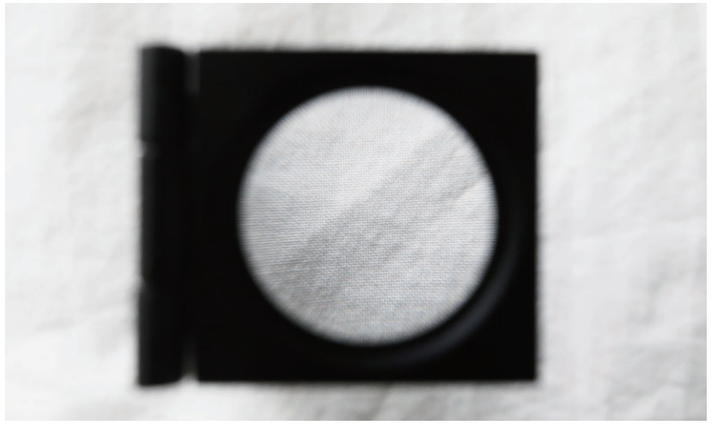




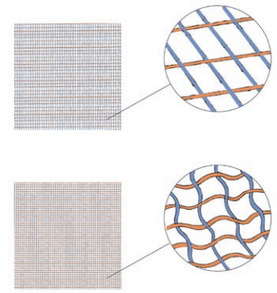
2023-04-13

オーガニックコットン（H02）の特別さについて









いよいよ2023年も4月に入り、本格的な春シーズンを迎えました。

あたたかな日が続くようになると、気持ちも軽やかになりますね。

今日はHUISの中でも、一年を通してもっとも定番となっている生地「オーガニックコットン（生地品番：H02）」について、その特別さをご紹介させていただきます。

環境に配慮されたオーガニックコットン糸を用い、低速のシャトル織機で超高密度に織られているこちらの生地は、糸番手がタテ糸・ヨコ糸ともに60番手となっています。

オールシーズン使いやすい、軽やかでしなやかな肌触りが特徴ですが、単に超高密度であるだけでなく、至高の技術を持った機屋さんでなければ体現することができない特別な組成をしています。

遠州の機織り技術を垣間見ることができるこちらの生地について、詳しく解説させていただきますね。

まず、低速のシャトル織機で織ったHUISの生地は、いずれも表面に凹凸感のある立体的な風合いや、軽くしなやかな着心地が共通した特徴です。

そして、細番手の糸を限界に近い超高密度で織ることができる、という強みが、他にはないシャトル織機を扱う遠州の技術ならです。

限界に近い高密度の規格で織る場合、力任せにヨコ糸を生地に打ち込み続けることになるため、糸への負担は増大し、糸が切れてしまいます。細い糸なら、なおさらです。これが細番手&高密度の織物は難しいと言われる理由です。

シャトル織機は、熟練した職人が、生き物のような織機の具合を常に見ながら、完璧な調整をし続けなければなりませんが、糸に負担をかけず、ゆっくりと織ることができるため、こうした規格の生地を織ることができるのです。

仮に、細い糸を一般的な密度で織ると、生地は透けてしまいますが、オーガニックコットン（H02）については透け感の心配がありません。贅沢に糸を使い、長い時間をかけて超高密度に織ることから、圧倒的な軽さがありながらこうした安心感のある特別な生地ができるわけです。

そしてさらに、シャトル織機で織った生地は、「織り生地」なのにわずかなストレッチ性をもつことが、着たときの快適性が生まれるもう一つの理由と言われます。（生地を強く引っ張ってしまうと破れにつながる可能性がありますのでご注意ください。）

もともと伸縮性をもつ「編み生地」と異なり、「織り生地」にストレッチ性をもたせるためには、通常ポリウレタンなどを混ぜる必要がありますが、コットン100%にも関わらずこうしたわずかなストレッチ性を持つ理由は、生地の組成という部分に注目すると、少しイメージしやすくなると思います。

詳しく解説させていただきますね。

ご存知の通り「織り生地」は、タテ糸の間にヨコ糸を走らせて織っていきますが、タテ糸にもヨコ糸にもテンションをかけずにゆっくりとシャトル織機で織った生地は、糸が波状にくねくねと大きく織り曲がった形で織られていきます。（対して、近代の高速型織機で織った生地はタテ糸・ヨコ糸が直線形状に近く織られていきます）

このことによって、織った直後から生地に「織り縮み」という現象が起こりやすく、もともとわずかに収縮したような生地が生まれるのです。こうした特性が、風合いや着心地に繋がっていると言われます。

そしてさらに、こちらのオーガニックコットン（H02）は、特にそうした特性を多く有する生地になっています。

それは、タテ糸とヨコ糸の密度の割合が完全に1:1（=スクエア）になっている、という特別な組成が理由です。

通常、高密度の生地を織ろうとした時、タテ糸の密度が高くなることが普通で、完全に1:1のスクエア組成で織るのはより難易度が高く、それをさらにシャトル織機を使って織るのは至難の業だそうです。ですが、この完全な1:1のスクエア組成で織った場合、織り縮みの現象が最も大きく起こります。

織り縮みが起こるほど、織機をコントロールするのはさらに難しくなります。でもそれをきちんと織り上げることで、美しく、快適な着心地をもった極上の生地につながるのです。

遠州の機織りの職人さんたちは、こうした一般的に伝えることが難しい、非常に伝わりにくい部分まで、日々試行錯誤して生地の規格をしています。

織ることが困難だと分かっている生地。でも、難しいからこそ、自分たちの技術でしか織れない生地。そこに生き残る道を見出し、特別な生地を今までも生み出してきました。

その挑戦こそが、遠州織物の本質だと私たちは思っています。

この産地が残っていれば、その挑戦は続いていくはずです。

これから先も変わらず、この素晴らしい生地を味わうことができるよう、私たちは少しでも伝える役目を果たしていければと思っています。



2023-04-22

【HUISのくつした.】まもなくリリースです





【HUISのくつした】のリリースも迫ってきて、今回は工場取材のyoutube動画も用意しています。リリースまでの期間、順番に公開となりますので、ぜひこちらも楽しみにご覧くださいね。

さて、今回はこの特別な靴下ができあがるまでの経緯について紹介させていただきたいと思います。

4月28日（金）にいよいよリリースとなる【HUISのくつした】ですが、もともとHUISで靴下を作りたいという構想は何年も前からありました。

HUISとして靴下を作るのであれば、遠州織物でつくる最高品質のシャツのような靴下。HUISに寄せてくれる信頼に応えられる、特別な靴下を作りたいというおもいをずっと持っていました。

いい生地とそうでない生地の違いは、①糸の品質と、②糸を生地にする機械の種類、で主に決まります。シャツ生地の世界においては、それがまさに細番手の高級糸を使い、旧式の「シャトル織機」で織られた生地。長い時間と途方もない手間をかけて生まれる生地は、他に代えられない心地よさ、機能性を持った生地になります。

そうしたことをもとに、国内の靴下生産についていろいろと調べていくようになりますが、生産背景を知るほどに、いい靴下とそうでない靴下、というものがはっきりとある世界だとわかるようになります。そして、国産編機「巻き取り式ダブルシリンダー」のことを知るまでに、それほど時間はかかりませんでした。

現代において靴下生産の主流の編機というのは、「K式シングルシリンダー」になります。シングルシリンダーは複雑な柄ができ、コンピューター制御で効率よく生産することができます。

一方、職人さんによる多くの手作業を必要とする旧式の「ダブルシリンダー」で編む靴下は、「シャトル織機」で織るシャツ生地と同様、とても非効率です。ですが、その非効率性と引き換えに、特別な履き心地や日用耐久性など多くの機能性を持ちます。

上釜と下釜の2つがあるのがダブルシリンダー。上針と、下針で編んでいくため自然なリブ編みとなって、生地自体が伸縮性に富んでいる、というところが、はき心地の良さや長く使えることの大きな要因です。

ダブルシリンダーで編んだ靴下が格別にいい!ということは、産地の方や、靴下生産に関わる人、は実際誰もが知っていることで、やはりそこもシャトル織機と共通する部分なのですが、一般のお客さまにはほとんど知られていません。

ネットで「靴下　ダブルシリンダー」と検索してみても、分かりやすい情報はまず出てくることがなく、こうした情報が表に出づらいところは遠州織物と同様、じつに繊維業界らしい特徴だと感じます。

こうした中、HUISで靴下を作るのであればダブルシリンダーの選択肢しかない、ということはかなり前からはっきりとしていました。

ただ、ダブルシリンダーは本当に手間がかかる編機です。そのため、ダブルシリンダーで編むことができるのは糸が太く、少ない本数で編む、地厚な靴下がほとんどだと知るようになります。

スキーの靴下や、秋冬用の雪柄の靴下、などをイメージしてもらうと分かりやすいと思うのですが、こうしたものはほとんどがダブルシリンダーで編まれています。ですから、こうした靴下の多くは耐久性が高く、履き心地の良い靴下です。

一方、HUISが作りたいと考えていたのは、そうした地厚な靴下ではなく、軽やかな









シャツに合わせられるすっきりとした薄さの靴下でした。一年中履くことのできる適度な厚みの靴下が作りたかったのです。そして、そうした靴下を編めるダブルシリンダーは現代ではほとんど残っていない、ということを知ります。

「細い糸で、糸の本数の多い規格」の靴下をダブルシリンダーで編もうとすると、ただでさえ大変な調整の手間がさらに一気に増えてしまうため、現実的には難しい。だから、実際には、経営に耐えられる規格を編むダブルシリンダーだけが残ってきた、というのが実情なのです。

また、柄やデザインのある靴下を、ダブルシリンダーの多くは編むことができません。こうした柄を表現できるのが、現代の主流となっているK式シングルシリンダーの大きな強みなのです。

HUISは、自分たちのものづくりを通して、繊維産地を知ってもらうことがひとつの役割だと思っています。靴下の産地といえば、やはり「奈良」。できれば奈良でパートナーとなる工場を見つけたいと、仕事で関わる方々を通じて、長い期間産地の靴下工場を探してきました。

ですが、一年を通して履きやすい薄さでかつ、足元を華やかに彩ってくれる靴下を編めるダブルシリンダーを見つけ出すことはできませんでした。

こうして、諦めかけた中で最後に出会うことができたのが、岐阜県関市の老舗靴下工場でした。岐阜県関市は刃物で有名な、ものづくりの街。清流・長良川が流れる自然豊かな地域です。

この工場が残してきた1970年代の「巻取り式ダブルシリンダー」は、176本のミドルゲージでかつ、柄を表現できるジャガード編みができる、希少な編機でした。

編み立てる靴下の細部にまで気を払い、複雑な調整とメンテナンスを重ねて、決して途絶えさせてはならないと大切に使い続けてきた特別なダブルシリンダー。

生産効率が悪く、その価値が一般的に知られることのないこの旧式のダブルシリンダーを使い続けるのは、大きな経営リスクを伴う困難な道です。高速で複雑な柄が編める、最新式の編機だけを使うことのほうがよほど楽です。

ですが、この古い「巻取り式ダブルシリンダー」を使い続けるべきだと考える理由があるから、東洋繊維さんは大切に残し、そして扱える職人さんたちを育ててきました。

日本で靴下編機が作られていたかつての時代の、この旧式の編機がどんな利点を持つのか。文章だけではお伝えしきれないと思い、今回はyoutubeチャンネルのトーク形式で詳しく解説する、という形をとることにしました。

時代に逆行し、守り続けてきた東洋繊維さんの力強い意志を、私たちは【HUISのくつした】を通して伝えていけることが、楽しみで仕方ありません。

【HUISのくつした】解説動画は、HUIS youtubeチャンネルでご覧いただけます。

靴下づくりの裏側が分かるようになると、ファッションはもっともっと楽しくなるはずです。ぜひ楽しみにご覧くださいね。

■HUIS youtubeチャンネル
「HUISのくつした」解説シリーズ

①スタジオトーク
https://youtu.be/c-SYWXdPnEo
②水谷陽治さんとのコラボトーク
https://youtu.be/f8ZvG2zH1nU
③工場でのダブルシリンダー生産工程取材
https://youtu.be/u4FUqkkhC2I



2023-05-10

「久留女木の棚田」新プロジェクトがスタートします

HUISでは、【HUISのくつした】や、トークイベントなど、今年さまざまな新しいプロジェクトを進めていますが、農業分野でも新たなプロジェクトをスタートいたします。

遠州・引佐地域にある「久留女木の棚田」は、“日本の棚田百選”にも選ばれている、遠州の代表的な地域資源です。

絶景の傾斜地に段々と水田が並び、美しい景観の広がる国内有数の貴重な棚田ですが、灌漑設備の整った農地と比べて自然の湧水に頼らざるをえず、機械化も難しいことから、担い手の確保と農地の維持が大きな課題です。

この久留女木の棚田も、現在3分の2ほどが休耕田となり、耕作放棄地化が年々進んでしまっています。

HUISでは、久留女木の棚田の保全に取り組む地域の方々と、企業連携の形のひとつとして今年新たなプロジェクトをスタートします。

地域での営みは長い年月をかけて地域産業へと発展するとともに、こうした代え難い地域資源が生まれてきました。国内には、こうした貴重な資産が数多くあります。ビジネスとして産業を見れば、時代と共に消えて無くなってしまうものがあることも、受け止めざるをえない現状もあります。

一方、ビジネスとは別の視点で、価値を捉えることが必要なものもあると思います。

文化的な視点、教育的な視点。私たちがしかける新しいアイデアと取り組みで、次代につなぐ可能性を何か見出していければと思っています。

2023-05-12

新プロジェクト「久留女木の棚田」のこと



先日のGWは4年ぶりの開催となった浜松まつりとともに、大河ドラマ「どうする家康」主演の松本潤さんが騎馬武者行列をしたことも大きな話題となりました。

現在放映されている「どうする家康」と同時代を扱った2017年放映のNHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」も、同じく浜松が舞台です。

このドラマで主役となる井伊家は浜松市北部の井伊谷が開祖の地で、柴咲コウさん演じた井伊直虎は“久留女木の棚田”を含む井伊谷の領主でした。

“久留女木の棚田”はドラマの舞台の中心となった場所のひとつで、井伊家の隠し里として何度も登場し、柴咲コウさん、高橋一生さん、三浦春馬さんら主要キャストも訪れ棚田でドラマのロケも行われた場所です。

このように歴史ある久留女木地区には「竜宮小僧の伝説」が伝承されています。

竜宮小僧は農繁期になるとどこからともなくやってきては見返りを求めず村人たちのために働いていましたが、不慮の事故で亡くなってしまいます。村人は竜宮小僧の遺言通り槙（まき）の根本に埋葬したところ、水が湧き出し、その湧き水で作ったのが「久留女木の棚田」と言われています。

困っている人には誰にでも手を差し伸べ、自らは名乗ることもなく、見返りも求めず、死んでもなお棚田の水源となり、今も村に恩恵を与えてくれる竜宮小僧。久留女木の村人たちは、今も感謝の気持ちを込め、田植えや稲刈りの後には供物をして手を合わせているそうです。

この「竜宮小僧」はドラマにも登場し、生きる道標として直虎の心に生涯寄り添います。また、現在棚田の保全活動を行う地元のみなさんも、伝説にあやかり「竜宮小僧の会」という団体名で活動しています。

「おんな城主　直虎」の中では、柴咲コウさん演じる直虎が、領地・領民を豊かにするため、自ら領民とともに綿花栽培をはじめ、綿織物にまで仕立てるシーンも登場します。実際に、遠州地域では温暖な気候と豊かな天竜川水系の恩恵により、江戸時代中期から綿花栽培が盛んだったことから、繊維産業が地域の基幹産業として成長し、遠州織物につながります。

遠州織物と棚田。

一見つながりがないように思えますが、かつて人々は食べ物を育てるように、衣服の原料も自ら育て、織物を作ってきました。

今年、HUISはここで綿花の栽培をスタートします。

遠州織物を作る職人さんたちのさらに向こう側には、織物の原料となるコットンやリネンを育てる生産者の方々がいます。

現在の日本は、天然繊維のほぼ全てを海外から輸入しています。そうした国々から私たちはどれほどの恩恵を受けているのか。

売り場に並ぶ服は、どれも簡単につくられたものではありません。目に見えない、多くの人の手の積み重ねで、服はつくられています。

「遠州織物×久留女木の棚田プロジェクト」が、ファッションにおけるこうした側面をイメージするきっかけになればと私たちは考えています。

そして遠州の農業や貴重な地域資源について、ファッションという新しい視点から、広くお伝えしていければと思っています。

2023-05-13

「久留女木の棚田×遠州織物プロジェクト」がもたらす意味

今回新たにスタートするこちらの「久留女木の棚田×遠州織物プロジェクト」は、HUISが地元農家さんたちと連携して、久留女木の棚田で綿花栽培をするものです。

私たちもワクワクしているこちらの新たな事業について、少し詳しくご説明させていただきますね。



田んぼで綿花栽培?と思われる方もいらっしゃるかと思いますが、棚田、といっても、水はけのいい場所やそうでない場所などさまざまです。

そして、山の斜面に段々と並ぶ棚田は日照がたっぷりと注ぎ、作物にとってはとても心地よい環境。ここ久留女木でも、レタスやとうもろこしなど、敷地によっては畑としてさまざまな作物が作られています。

HUISのものづくりのスタンスは、HUIS自らが職域を広げるわけではなく、その分野の専門家の方々との連携によってより良いものを作る、という考え方を大切にしています。

今回も私たちは農家さんたちとの事業連携という新たな形で、農業の専門家である地元の農家さんたちに、綿花を栽培していただきます。

そして、育てた綿花を採取し、紡績して糸にし、遠州織物とすることが、今回のプロジェクトの特別な意味です。

多くの綿花を採取できるわけではないので、久留女木の綿を100%使った糸を作ることは難しいのですが、この久留女木で作る綿を混紡した糸を紡績できる見込みを、遠州の機屋さんたちのご協力によって計画することができました。

通常、紡績をするためには大変多くの原綿が必要となりますが、繊維産地たる遠州の繊維関係者の方々、こうした事業に共感いただけるみなさんのおかげで、ひとつの道筋をつくることができました。

今回、農業分野にHUISが取り組もうと考える理由について、ご説明させていただきたいと思います。

先日の投稿でもお伝えしていたように、耕作放棄地化が進む地域農業の課題解消に向けた一歩がその一つですが、現実的に採算性を考えたときには、少し難しいプロジェクトになります。

HUISが使用する生地はすべて、数ある綿の中で最高級の綿糸を用いて作られていますが、こうした高級綿が作られている国というのは、多くが発展途上にある地域です。そのため、非常に手間のかかる高級綿花の栽培を経ても、私たちが手にすることができる程度の価格で流通されている現状があります。対して、日本国内の人件費や地代で綿花を作る場合、高級綿でなくても、できた綿や糸はとても高価なものになってしまいます。自社で綿花栽培を計画するアパレル企業は多くありますが、そのほとんどが頓挫してしまう理由は、この採算性の部分にあります。

以前、備前産地のデニムメーカーさんが100%国内栽培をした綿糸を使いデニムパンツを作った際、1着100万円を超えるデニムパンツになってしまったそうです。この話をだけを聞いても、国産綿で洋服を作る難しさとともに、高級綿を作っている国々から私たちがどれだけ恩恵を受けているかよくわかります。

今回、久留女木で私たちが作る綿からできる糸も、一部を含んだ糸とはいえ、通常HUIS製品が使用している糸よりも必然的に価格の高い糸になってしまいます。

つまり、HUISではもともと最高級の綿を使っているので、「HUISの従来の製品より生地品質は下がるのに、価格は高い」という製品ができることになります。

最高級の糸を使い、最も古い希少なシャトル織機を使って織る遠州織物。その生地の価値が、HUISの本質です。ですから、今回のプロジェクトで生まれる製品に対して付加価値をつけることは目的ではありません。

私たちは、「品質的に最高品質の生地ではないはずなのに、価格は高い服」が従来のHUIS製品と並んである、ということ自体が、いろいろな気づきにつながればと思っています。

プロジェクトを通して、農産物たる綿花から私たちが身につける服になるまでの、いろいろなことをお伝えすることができると思います。それは私たちにとっても、また新しい気づきにつながると思います。繰り返しになってしまいますが、そのストーリーを価値として製品を販売することが本旨ではありません。

売り場に並ぶ製品の一つ一つは、多くの人の手、途方もない作業の積み重ねでできあがっています。

2023-05-16

「久留女木の棚田×遠州織物プロジェクト」綿の種まきをしました









地元農家さんと連携して久留女木の棚田で綿花栽培をおこなう「久留女木の棚田×遠州織物プロジェクト」。先週末、種まきを行い、いよいよスタートしました。

小雨の降るあいにくのお天気ではありましたが、行政関係者や浜松市内の子どもたち、久留女木の地元農家の方など約30人が参加して、休耕田を活用した畑に和綿と洋綿の種をまきました。

綿は日本では1年草なので、順調に育てば今年の秋には綿を収穫できる予定です。

SNS等でも生長の様子をお伝えしていく予定ですので、新たなプロジェクトとともに綿の生長を皆さまにも見守っていただければと思います。

「久留女木の棚田」は住民の少ない山間にある田んぼのため、平地の水田でも珍しくなってしまった生き物や植物を多く観察することができます。

集まった子供たちは、棚田のカニやカエル、虫などを見つけてははしゃぎ、普段できない体験に喜んでいました。

畑での種まきの後、旧久留女木小学校にて綿の苗木を育てるためポットへの種まきも行いました。

自然豊かで美しい景観の広がる国内有数の貴重な棚田ですが、現在3分の2ほどが休耕田となり、耕作放棄地化が年々進んでしまっています。

HUISでは、今回種まきをした畑だけでなく、耕作放棄地化してしまったかつての水田を再生し畑に戻した場所でも綿花の栽培を計画しています。

畑や田んぼは、耕作し続けないと雑草が生い茂り山林化が進みます。そして田や畑には戻せなくなってしまいます。

また、田んぼに水が入らなくなると棚田に生息する生物は繁殖や捕食ができず、生存が難しくなります。

代々守られてきた、美しい久留女木の棚田を守るには、人が適度に自然に手を入れ作物を育て続けるしかないのです。

こうしたことを農業体験などの機会に地域の子供たちにも啓発していきたいと思います。



2023-07-06

東京・丸の内ビルディングでトークイベント「あっこたんとHUIS松下さんのフダンギ談義」を開催いたしました









6月10日（土）、東京・丸の内ビルディング3F「TSUTAYA BOOKSTOREシェアラウンジ」で、金子敦子さんとのトークイベントgarage presents【あっこたんとHUIS松下さんのフダンギ談義】を開催いたしました。

日々の着こなしが人気の金子敦子さん（@55akotan）は、HUISの洋服もふだんから愛用してくださっていて、著書『新 大人の普段着・秋冬編』（主婦と生活社）のなかでも、HUISアイテムのコーディネートをたくさんご紹介いただいています。

また、著書は最新刊の秋冬編のほか、「新 大人の普段着」「新 大人の普段着・春〜夏編」とあり、いずれも人気の書籍となっています。

最新刊の書籍の中に、こんな内容をご紹介いただいているページがありました。

****

あらゆる服を着るうちに、同じコットンでもパリっとしていたり、つやがあったりと着心地や風合いに違いがあることに気づきました。それまではデザイン重視でしたが、その違いを認識してから、いろんな生地の服を着たいと思うように。

今、よく着るのは静岡県西部の遠州地方で作られる遠州織のひとつ、コードレーンのシャツ。空気感のある細い糸で織られていて、軽い着心地です。

****

金子さんのような方に、遠州織物のことを知っていただけるのは本当に嬉しいことです。

また、そうしたもともとファッションやコーディネートがお好きなお客さまにとって、生地のことや産地のこと、織機や職人技術の奥深い世界を知ることは、より一層、無限の楽しみが広がるきっかけになるのではないかと私たちは思っています。

現在のアパレル業界において、“華やかなファッションシーン”や“お客さまに届ける売り場”といったものと、“産地”や“職人”といったものが、どうしても遠く、切り離された存在になりがちです。

私たちの活動がその接点になれればと思っていますし、金子さんが想いを伝えてくれているこうした1ページも、お客さまと産地をつなぐ架け橋になるものだと思います。

司会には『新 大人の普段着』の編集者・木村愛さん（@aikanaizumi）をお迎えしてお送りいたしました。

トークイベントの内容は、HUIS YouTubeチャンネルにてご覧いただくことができます。

当日お越しいただけなかった方も、ぜひyoutubeの配信でトークイベントの雰囲気をお楽しみください。

■「あっこたんとHUIS松下さんのフダンギ談義」
【前編】https://youtu.be/BLfOVd-QvcY
【後編】https://youtu.be/vnBND2jX2-0

■「あっこたんとHUIS松下さんのフダンギ談義」前編
3:45　HUISと金子さんの出会い
9:00　遠州織物・HUISについて
13:40　金子さん「誰でも、いつからでもおしゃれになれる」
22:00　洋服選びで大切にしていること
23:44　「栄養のある服」
27:20　MADE in JAPANの生地って?
　　日本の繊維産地について
34:15　「いい生地」と「悪い生地」の違い

■「あっこたんとHUIS松下さんのフダンギ談義」後編
0:13　あっこたん、松下が考える「いい服とは?」
9:00　ご質問①あっこたん流HUISコーデ教えてください
19:30　②普段着おしゃれで心がけていることは?
　　＆布バックはどちらで購入されてますか?
26:18　③トートバックの荷物整理で工夫していることは?
30:37　④洋服の管理はどうされていますか?
32:46　⑤アウトドアにおすすめのリュックとお財布は?
36:29　⑥ヘアケアどうしてますか?
38:37　⑦遠州織物や機屋さんが残っていくために必要なことは?









2023-06-11

遠州産地を盛り上げる
若手の繊維関係者が集まるプロジェクトチーム
「entrance」が新たにスタートします！



国内の繊維業界はさまざまな環境の変化に巻き込まれとても厳しい状況に置かれています。

また数年に渡った新型コロナウィルスの影響により、アパレル・繊維企業の倒産・廃業が相次ぐなど危機的状況が続いており、アパレル業界を支えてきた国内の多くの生地産地はいずれも窮地に立たされています。

ここ遠州においても、原料の高騰や、職人の高齢化、事業者の廃業など、今まで以上に苦しい状況に直面しています。

HUISのまわりでも事業閉鎖を決断される事業者さんは年々増え、状況はいっそう深刻化しています。

現代において、新たに機織りを始めよう、染色工場を始めよう、という事業者が現れることは残念ながらありません。今残っている事業者さんたちの事業が健全に継続されていくことが、産地が残るために必要なことです。

こうしたなかで、遠州産地の技術と伝統を伝え、残そうと、若手の繊維関係者のみなさんが新たに結成したのがこの「entrance」です。

遠州産地では今年2月、コロナ禍が次第に開けていく中で産地を盛り上げる取り組みのきっかけを掴もうと、「entrance」の前身となる遠州「ひよこのかい」のメンバーが尾州産地を訪れて若手同士の交流プログラムを行いました。(詳細は以下)

「【遠州×尾州】産地の担い手交流プログラム」https://1-huis.com/all/29079/

「2/17-18遠州×尾州 若手担い手交流プログラムを開催いたしました」
https://1-huis.com/all/29254/

新たに立ち上がった「entrance」は、前身である「ひよこのかい」メンバーを母体に、アパレルデザイナー、デザインディレクター、アパレル企業などがメンバーに加わり、消費者の方々に直接、遠州織物の魅力を伝える取り組みを行なっていきます。

今後、entranceブランドの商品開発やイベント展開を通じて、遠州産地を発信していきます。

グループ名の「entrance」は、「遠州産地（en）に夢中（trance）になる入口」という意味で、遠州産地、遠州織物に関わる人の「ポータル/玄関口」をイメージしています。

「entrance」の“en”には、遠州の「遠」のほか、循環の「円」、つなぐ「縁」の意味を含み、ロゴマークは円状にデザインされた経糸（たていと）の間を、アルファベットが緯糸（よこいと）のように走ります。

2行に並んだ[entr]、[ance]は、entr（y）＝入る、ance（r）＝答え、を暗示するもの。

服選び・生地選びにおけるさまざまな選択肢の中で、人それぞれの答えを導けるような、そんな活動を大切にしていきます。

なお、entranceの初のイベントとして、来月7/1-2に遠州織物の生地を自由に選んで服を仕立てられるイベント

～産地職人が生地選びのコンシェルジュ～
遠州織物のセミオーダー会「entrance」

を開催いたします。詳細はあらためてご案内しますので、ぜひご期待くださいね。

HUISでも、遠州産地に生まれたこの力強い動きを、できる限りサポートしていきたいと思っています。

↓こちらentranceのインスタグラムアカウントもぜひフォローしてみてください。

■entranceインスタグラム
https://www.instagram.com/entrance.textile
@entrance.textile

2023-06-28

今週末7/1(土)・2(日)の2日間は、卸商団地のあつみ工房さんで
いよいよ遠州織物のセミオーダー会
「entrance」を開催します！





今週末7/1(土)・2(日)の2日間は、卸商団地のあつみ工房さんで、いよいよ遠州織物のセミオーダー会「entrance」を開催します!

昨夜は、entranceメンバーの各アカウントよりインスタライブを同時配信させていただきました。
https://www.instagram.com/1_huis

このイベントに向け、メンバーのみなさんで作ったオーダーサンプルや、たくさんの生地もそろい、無事開催の準備が整いました。

140種類以上の遠州織物の中から好きな生地を選んでオーダーできるこちらのイベントですが、一番のポイントは、機織り、染色、さらには撚糸や紡績などのそれぞれの道のプロフェッショナルの職人さんたちから、この生地の何がすごいのか?ということを直接とことん聞けることだと思います。

アパレルの世界に身を置くと、この業界でいかに「遠州織物」というものがハイエンドな生地として知られているかよくわかります。良いのはわかるけれど、高価でそう簡単に扱える生地ではない、そういう認識が遠州織物に対するアパレルブランドの基本的な認識です。

一方、世界的なアパレル高級生地、と言われても一般のお客さまには地元の人ですら、なかなか知られていない。その理由の一つは、あまりにもそれぞれの生地に詰まった情報が多すぎるからだと思っています。価値の情報が詰まりすぎていて、伝えるため情報の整理が必要なのです。そして伝えられる言葉が足りないから、言葉がなくても伝わるアパレル業界の専門家にしか知られることがないのです。

品質に徹底的にこだわるハイブランドが、なぜこの遠州の生地を使うのか、なぜこの機屋さんの生地を使うのか、なぜこの織機で織られた生地を使うのか。

コミュニケーションを通じて一般のお客さまにお伝えする機会は、なによりentranceメンバーのこれからの糧になると思っています。

このイベントが、遠州というかけがえのない産地がこれから先にも続いていくきっかけの一つになればいいと思っています。

地元新聞社をはじめ、さまざまなメディアでご紹介いただき、当日は混雑も予想されます。駐車場はたっぷりとご用意していますが、混雑時の会場は少し狭く感じるかもしれません。ご不便をおかけすることもあるかもしれませんが、興味のある方はぜひお越しください。

2023-07-04

「entrance」初イベントにたくさんの反響をいただきました







先週末に行われた遠州織物のセミオーダー会「entrance」には発足後初めてのイベントにも関わらず本当にたくさんのお客様にお越しいただき、大盛況のうちに無事に終えることができました。

HUISを通じてイベントを知ってくださった方もたくさんいらっしゃいましたが、フライヤーを見て知ってくださった方や新聞やテレビの報道を見て急遽足を運んでくださった方も多くいらっしゃいました。

また、県内だけではなく、東京や名古屋、また山梨からも足を運んでくださったお客様もいらっしゃいました。

中には以前から遠州織物に興味がありこちらのイベントを楽しみに東京から来られたというアパレルデザイナーさんもいらっしゃいました。

今年始めの「産地交流ツアー」をきっかけに、遠州織物の素晴らしさを感じられる今までにない洋服選び、買い物の機会をなんとか設けることができないかと思ってentranceメンバーとこの日に向けて準備を進めてきました。

本当にさまざまなエリアからさまざまな背景をお持ちの方がお越しくださったことで、「新しい洋服の買い方・選び方」の提案だけではなく、遠州織物や洋服を大切に想っている方々と接点をもてるイベントになったと気づくことができました。

いろいろな方がゆるやかに繋がれるイベントとして今後も続いていってほしいですし、HUISとしても引き続きサポートしていきたいと思っています。

2023-07-17

古橋織布・濱田さんの門出



HUIS創業以来、変わらずにHUISの生地を織ってくださっている浜松市の「古橋織布」さんで今年の夏、長く働かれてきたスタッフの濵田美希さんが結婚を機に退職されます。

HUISがブランドスタートする前からずっと担当していただき、HUISの生地について常に相談に乗っていただいてきた、大きな存在です。

東京出身の濵田さんは生地の専門家として学び、自分の就職先を探る中で世界中の産地を回りました。その上で、日本国内である“遠州”産地の技術・ものづくりが最も魅力的だと感じ、12年前に古橋織布さんに就職されました。

以前は自分が国内で就職するイメージは持っていなかったそうです。そんな濵田さんが世界中の産地を探った上で、自分の力を発揮したいと見定めた産地。

おそらく「遠州の技術」と「一般消費者に対する知名度」との乖離を、最も歯がゆく感じてきたのも濵田さんだと思います。

退職されるのはとても残念ですが、退職後は遠州産地の魅力を発信する若手グループのプロジェクトチーム「entrance」の代表として、新たな活動をスタートしていきます。

そんな濵田さんのインタビュー生地を、古橋織布さんが紹介していますので、本日はリポストさせていただきます。（文字数制限の関係で一部編集しています）

— repost @furuhashi.weaving

約12年働いた濵田が語る、古橋織布はココが凄い。東京生まれ、東京育ちのSTAFF濵田。古橋織布で働きたいと思い、約12年前に就職。

そんな、テキスタイルラバー濵田が、結婚を機に退職されることに…さみしいですが、最後に古橋織布の魅力を語ってもらいました。

■どうして古橋織布で働きたいと思ったの?

『小学生の時、縫製の内職をしていた祖母から、工業用ミシンでスパルタ教育を受けていました（笑）

小3で自分の帽子を縫ったこともあります。

高校はファッション部に入り、自分たちで洋服を縫い、ファッションショーを開催していました。学生時代から、ずっとファッションに興味があり、生地屋さんをウロウロするのが趣味でした。

高校卒業後は、東京にある文化服装学院のファッションテキスタイル科に入学。

専門学校では、基本的な「染め」「織り」「プリント」を学んだり、“織りの生地作り”に没頭することもありました。休日に、自分でアポを取り”全国の機屋さん巡り”や、展示会でいろんな産地の人の話を聞いたりしていました。

海外への憧れもあり、トルコ、フランス、イタリアへ『テキスタイルの旅』へも出かけました。そこで、ファッションの本場の「フランス」や「イタリア」の生地を見て、気付いてしまいました。

「あれ?日本の生地の方が凄いかも」と。





就活が始まり、講師の方に、「日本の産地で働きたいです」と相談しました。

そして、講師を介して、古橋織布と出会いました。

入社前、展示会に出展すると聞き、そこで初めて古橋織布の生地を見ました。

その時、「生地屋で見たことないモノばかり」と、衝撃が走りました。

綿100%の生地ひとつでも、密度、ハリ感、風合いと心地よさに驚き、触ったことのない感触は今も鮮明に覚えています。』

■入社した頃のことと、大変だったエピソード

『入社当時、古橋織布には営業がおらず、社長(現会長)が現場をやりつつ、客先の対応をしていました。当時21歳の私から、いちばん年齢の近い方は50代。。。

遠州産地の繊維業は、分業制で毎日が予想外の連続でした。糸が切れて整経が進まない、指示した色に染まらない、織機のトラブルで生地に欠点が出たりなど、、日常茶飯事。

問題が起きた時に、どう解決していくかがやりがいを感じる部分かなと思います。』

■他社にない、古橋織布の魅力とは

『学生の時に、フランスやイタリアの生地よりも『日本の生地の方がレベルが高い』と感じました。12年経った今も、全く変わっていません。何度かイタリア出張に行き、ヨーロッパ各地で織られた新しい生地を見ても、古橋織布より優れた“綿の生地”に出会うことはありませんでした。

古橋織布は、ほぼ毎シーズン、ヨーロッパのブランドから注文を頂いています。コストや納期がかかっても、古橋織布の生地に“こだわる”のは、代わりが効かないからでしょう。

ヨーロッパの生地は、見た目に派手なものが多く、見せ方を意識している生地が多い印象でした。一方、古橋の生地は、見た目に派手さはなくとも、着る人の“着心地の良さ”を追求しています。

服になり、着た瞬間に「ん?何かが違う」と違いが分かるはず。

“ふっくら”で、“上質な風合い”は、『古橋にしかできない』と自負しています。

普段、アパレルのお客様と取引しているため、一般の方に『古橋織布の生地』だと認識してもらえることは、ごくわずかです。

しかし最近、若手の社員が増え、作られる工程や背景を知って、購入してほしい!という想いから、自ら発信し、直接伝えられるようになりました。

私は退職しても、ずっと変わらず“古橋ファン”です。

これからも、まだ世の中にない生地がたくさん生まれることを楽しみにしています。』

HUIS. SHOWROOM

東京SHOWROOM
東京都千代田区丸の内2丁目4-1 丸の内ビルティング4F garage内

横浜SHOWROOM
神奈川県横浜市神奈川区金港町1-10 横浜ベイクォーター3F noni内

立川SHOWROOM
東京都立川市緑町3-1 GREEN SPRINGS E2-208 Rust内

名古屋SHOWROOM
愛知県名古屋市中村区平池町4-60-12 グローバルゲート3F garage内

豊橋SHOWROOM
愛知県豊橋市曙町南松原17 garage内

福岡SHOWROOM
福岡県福岡市西区姪浜3-11-5 COMBLE内



HUIS. journal vol.3
発行日　2023年10月
発行者　HUIS.
本書を無断複写・複製(電子化を含む)することは禁止致します。
We are still on a journey.